

川柳塔



No. 932

同人特集・私の一句

一月号

昭和十七年一月九日発行
平成十七年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九三二号

日川協加盟

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー

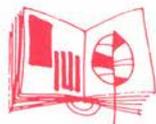


コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL (06) 6372-1178

賀春

河内 天笑

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

昨年は皆様方の絶大なるご協力を得て、川柳塔創刊八十周年記念大会第十回川柳塔まつりを盛会裡に催すことが出来、ご同慶の至りでございました。この先もまた一歩ずつ川柳塔の明るい未来に向かって歩を進めて参りたく、なお一層のご尽力賜わらん事をお願い申し上げます。

お陰様で私も、満七十歳を迎えました。川柳とご縁が出来たのが三十二歳でしたから、もう人生の半分以上川柳と暮らしている勘定です。川柳の持っている魔力というものでしょうか、私を離してくれませんでした。そして、川柳のない暮らしは考えられないところまで来てしまいました。やはり川柳と私との相性がよっぽど良かったんでしょう。川柳とのきつかけを振り返りますと、奇妙な偶然が何度も重なっていた事に驚かされるのですが、ご縁とはそんなもんなんだなあ、と神様の仕組んだ芝居を面白がっている私です。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

この路郎先生の句がこのごろようやく分かる様になりました。どったんばったん五人の子供たちと賑やかに暮

らした約三十年間も、今はもう夢のまた夢。だだっ広い家でたった二人の暮らしにも、やっと馴れて来たところでは。子供達はまたそれぞれ家族をふやして、何年か先にはまた元の二人になるのです。そしてばらばらになった家族は、また浄土で会おう、とこういう仕組みになつてゐるんですね。

俱会一処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して
尚柳号で呼び合い永遠に川柳を

語りあう絆を以て此処に愉しく眠る

高野山に川柳塔碑が建立されたのが、平成元年十一月。八尾市在住の奇特な同人の寄進によつて実現したこの碑は、世界遺産に指定された高野山の地に根づいて十六年。碑の背中に彫られた西尾菜先生の文章も、すばらしい文字も、訪れるたびに私達をあたたく迎えてくれます。川柳をしてよかつた。そして、よくぞ川柳塔同人の仲間入りをしたものだ、つくづくよるこんでゐる毎日です。

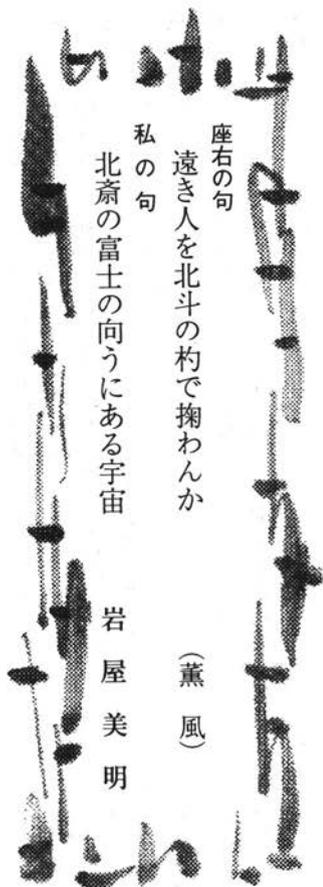
七十歳元氣なだけで大儲け

運のよさだけでここまでたどりつき

寝違うた首ひっさげてダイナーショー

モンローに見える日もある茜雲

二日酔いするほど飲んでいたのです



座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

北斎の富士の向うにある宇宙

岩屋 美明

川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 賀 春	河内 天笑	……	(1)
福助さん	黒川 紫香	……	(2)
川柳塔 (同人吟)	河内天笑選	……	(4)
新連載 川柳塔の川柳讃歌	木津川 計	……	(54)
自選集	奥田みつ子選	……	(55)
水煙抄	波多野五楽庵選	……	(59)
私の一句 (同人特集)	田中正坊	……	(80)
愛染帖	田中正坊	……	(94)
■句集紹介「たびの川柳」	田中正坊	……	(97)
誹風柳多留二四篇研究	波多野五楽庵選	……	(98)
74	田中正坊	……	(99)
茴香の花	政岡日枝子選	……	(100)

福助さん

黒川 紫香

昨年初夏、胃腸を壊し入院。ひと月過ぎた或る日、院内で患者を含めた「七夕」祭りが、二階の談話室で開かれました。

賑やかな中で患者を見舞いに来ておられた中年の女性が、いきなり私を捕まえ「あんた、ええ耳したはるな、ここへ座りなはれ」と座らせられ、スケッチブックを取り出すなり私の似顔絵を描き始めました。その時、薫風先生はじめ川柳塔の二・三人が私のお見舞いに見えられたので、輪郭だけ描いて貰って、皆さんと病室に戻りました。のちほど仕上げて貰った作品を戴くと、大分若くなっていました。が上手に描けていました。

「まるで福助さんみたいやわ」

と丁度見回りに来られた婦長さんも感嘆して去られました。後で若い看護師さんが、

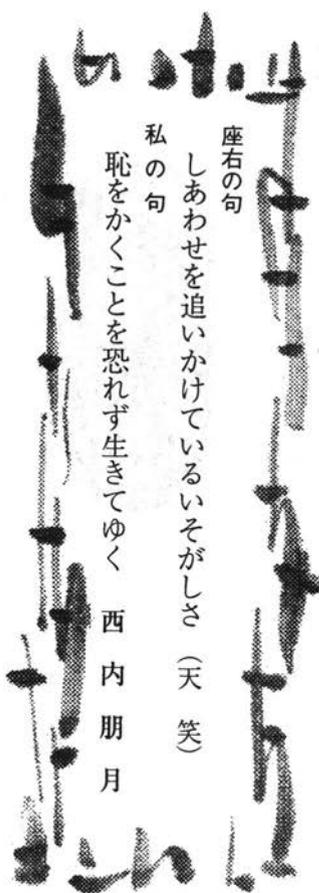
「福助ってなあに」

と聞くので、

「有名な足袋の会社のトレードマークや」と言うのと納得したようなしなやかな顔をして出て行きました。

若い人達には馴染みの薄いことですが、昔は

「方」	山本玉恵選	(102)
一路集「ポスト」	川原章久選	(102)
「掴む」	福士慕情選	(103)
初歩教室「正月」	三宅保州	(104)
秀句鑑賞	同人吟	(106)
水煙抄	高田美代子	(106)
さようなら	小野句多留	(108)
中澤伽羅さん	西内朋月	(109)
十二月本社句会		(110)
■エッセー	牧野芳光	(114)
パリ旅行		(114)
各地柳壇 (佳句地十選/籠島恵子)		(117)
柳界展望		(174)
一月各地句会案内		(176)
■編集後記	楓葉・義子	(178)



座右の句
しあわせを追いかけているいそがしさ (天 笑)

恥をかくことを恐れず生きてゆく 西内朋月

仁丹の威厳のある横顔と、この福助さんのお辞儀している姿が都会・田舎を問わず家の壁、または塀に貼られていました。

私の顔のふくらみは、特に大きいのでさわりたくなるようです。子供や次々と出来た内孫外孫を問わず、曾孫まで面白そうに触りました。膨らみの中は脂肪ばかりで、切り取って終うかと言うお医者さんでしたが、痛くも痒くもないのでそのままにしています。

入院後何日か経った或る日、看護師さんとの話をすると、私の回復に合わせて毎日の挨拶の代わりに毎日膨らみをつまむようになりました。これでお互いの信頼関係が出来、入院生活が一層楽しくなりました。

「お早ようさん」

と声をかけながら朝の挨拶に、この膨らみをつまむ看護師さん達も、いきいきと楽しんでそのうになりました。

似顔絵になる私の顔の膨らみは、永遠にとり去る事は出来ないでしょう。だから、同時に昔よく出ていた福助さんの広告に、近頃お目にかかれな이의が本当にさみしい。

子、孫、曾孫たちから触られながら人生を過して行く私が、福助さんそのものなのでしょう。

人生を福助として過ごす僕 紫 香

福助に怒った顔は似合わない

毎日が福助さんでありたいね

川柳塔

河内天笑選

鳥取市 岸 本 孝 子

いい人生だったと二人して言おう

中の子が我慢の虫を飼っている

いい汗をかくといい風きつと吹く

中年の背がさみしいパチンコ屋

お粗末な顔だが五体満足だ

避難所を見て贅沢をいましめる

吹田市 山 本 希 久 子

古稀の春白いところに戻らねば

三社めぐりに元旦暮れてゆく長閑

少子化へがたがた揺れる玩具箱

ふいに名が出ぬ脳みその白い午後

終着駅に近づいてから揺れ激し

穏やかな茶の間で老いが加速する

弘前市 高 橋 岳 水

指の節鳴らして期するものがある

相槌が軽くて疑心少し湧く

天罰を信じてるのは雑魚ばかり

鼻肩する力士が負けて肩が凝る

炊き出しの御結びにある連帯感

匂という死語が冷凍庫で眠る

藤井寺市 太 田 扶 美 代

恋を得たあたりで石を積み直す

悪女のふり淑女のふりもしておんな

チヨコボール恋とははしゃぐものらしい

通過したあそこがきつと絶頂期

あれも本音これも本音で生きてきた

ガーデニング余生とやらは忙しい

堺市 矢 倉 五 月

両の手でいただく屠蘇も二人きり

神妙におみくじ恋愛運を読む

穏やかな日々に信仰心が湧く

あの人の指へ今年も停まりたい

寶石に混ざれば石も玉に見え

四捨五入出来れば楽になれるのに

鳥取県 奥田保子

ありがたい叱ってくれる人が居る
苦しみは逃げるほど追いかけてくる
父母逝つてふるさと少し遠くなり
知り過ぎてやりにくいことあるらしい
つまらないおしゃべり時に必要だ
無礼講本気にしては駄目ですよ

西予市 黒田茂代

秋から冬へ移ろう不安定な色
夢の木と詩の木を部屋に植えている
いい絵だな風も光も香も見える
わたくしを見詰める眼鏡掛け替える
無農薬蜜柑器量は言わないで
水道水を温泉なんてよく言うよ

橿原市 安土理恵

立冬へ震災の地の雪おもう
騙されたふりも騙しのうちやろか
妥協するつもり今夜はモツ煮込み
甘いささやき無いから耳が遠くなる
いつかまた言うて別れた秋巡る
尊厳死あるがまんまで終りたい

芦屋市 黒田能子

迷惑ならぬ程度にハメはずす
シェフの技少し盗んで主婦の味
マンネリの鬼と時々喧嘩する

急がば回れ道草もまた楽し

目標を見つけてからは一直線
適当に用事があつてしゃんとする

寝屋川市 平松かすみ

コケコッコー平和な時を告げてくれ
十五歳どんなお花になるのやら
申年の爪痕疼く列島よ

新築の頃は窓から生駒山

丸鬻り出来たりリンゴの唄の頃
溜息の訳はいっぱい捨てる物

河内長野市 加島由一

嫁にゆく気配すらない娘に育ち
更年期刺ある妻を許されよ
子を持つて親の苦勞を知りなさい
堂々めぐりする恋もあり楽しまん
五歳下ならもう価値観が分らない
居酒屋を妻に引かれて通り過ぎ

大阪府 榎本日の出

追い抜いて下さい坂はマイペース
花咲けば雑草とても美しい
人間のミスを冷たく覗く神
目を閉じて自分を見つめ直してる
何故かしら遺書のつもりで書く日記
老いのグチ優しく聞いたボランティア

青森県 小寺花峯

電子辞典 辞書を取り上げ台にする

南天の首を隠している根雪

こっそりとゴキブリになるコップ酒

朝一番誰にもやれぬ深呼吸

二段跳びで春を誘う月曆

弘前市 今 愁女

生きてる地球慣れば怖い人の群

熊だつて生きる権利はあるだろよ

ライフライン 便利なものと気付かずに

ああ自然 白神山の錦秋よ

金木犀の垣根と歩く古寺めぐり
弘前市 高瀬霜石

賑やかな方へつられる福の神

カラスだけ今日も元気な冬の道

年金の話をすればこつち向く

正座して聞けば頭に入らない

寅さんもシャワーなんかは使わない

弘前市 岡本花匠

二〇〇五年 多彩な夢の老童子

岩木山淑気みなぎり掌を合わせ

大袈裟におもねる拍手初詣で

松竹梅飾り我が家も無上楽

初春の夢を呼び込む自動ドア

弘前市 櫻庭順風

東京の吟社牛耳る津軽風

台風一過ほっとしている句会

驚天動地 親友の転校よ

転校で捻くれずんば馬鹿になる

合格率を上げた転校生ひとり

弘前市 須郷井蛙

腹八分越えてしまった祝酒

神様にお願ひしたのに不合格

オシッコを教えおほめの抱っこする

手品師も負けるやりくりうまい母

旧道の散歩朝夕詩が生まれ
弘前市 相馬銀波

前略で本音ばかりになるハガキ

休田の大豆と泣いた秋の雨

外は雪あれもこれものおでん鍋

日程は降雪量と体調と

輪の中も溝の深さを探らねば
弘前市 富士慕情

座布団にトンボ座っている日向

青空の浮かぶ雲から鮒を釣る

止り木へ何時もの顔が揃い踏み

逃げもせずカラス小馬鹿にして跳ねる

北風が吹いて嚏が止まらない

砂川市 大橋 政良

さいたま市 八田 敏

敗北の涙がにじむ夕やけ小やけ
一色に山も平野も塗って雪
過去帳の縮図の中に僕がいる
気に入った背広財布と折り合わず
皮を剥く形で本音出してくる

黒石市 相馬 一花

偶然に拾った恋が発芽する
原型を留めないほど厚化粧
介護三でも晩酌は欠かさない
伝説の酒に高ぶる手の震え
お隣の嫁は宇宙人かも知れぬ

十和田市 阿部 進

古日記たぐり寄せます想い出を
せちからい世をのんびりと生きている
のんびりと屋台で一人酒を酌む
妻の勤おそろしいほどよく当たる
真心を売って老舗が混んでいる

富山市 島 ひかる

瑞雲へとり一声を高く鳴く
初春の願いことさら念入りに
酉年に添うて卯年もよく跳ねる
吃水線行ったり来たりする命
ひと月の余命へ告知など出来ぬ

秋楽し今年の菊の成果待つ
道路端打捨てし菊咲き誇り
嬉しさは六十年の戦友と酌む
三年のプランク埋めてウォーキング
駅階段つい手摺持ち上下する

佐倉市 岡井 やすお

大陸向く首相の獅子吼歯切れ悪し
門松で会社の格を値踏みされ
年かわる機嫌直してくれ鮎
凧上げがリモコン飛行になる広場
初蹴りでサッカー日本一を決め

東京都 岸野 あやめ

尾長鶏世界平和と啼く初日
七彩に塔は輝くお元日
父さんのコピーのような息子さん
常識の通らないのが戦場だ
一抜けてやがてはみんなばらばらに

東京都 後藤 早智

報道の震度を時間差で感じ
桃源郷崩す余震が強過ぎる
被災地の涙 犬猫牛に鯉
救出の奇跡に列島救われる
平和への願い戦も災害も

東京都 清原悦子

改めて太陽拜むお元日
情けない話だけれど温かい
散歩道休んで欲しい椅子がある
そっくりな人を見かけてむずがゆい
栄養のバランスを盛る朝の皿

武蔵野市 亀井円女

欲の皮ポロポロ落とす心地良さ
時はいろいろ つらさ空しさ素晴らしさ
老いる身に待ったをかける好奇心
秋の空われも負けじと茄子の紺
こちら年金 円が上がりと下がろうと

八王子市 播本充子

二年目ののぞみは冒険も少し
囲まれていいお顔などして見せる
一人旅うどん一杯食べに降り
人間が好きで寄せ鍋バーベキュー
一族が寄るといよいよ光る父

横浜市 菊地政勝

いたずらな葉 夫婦に溝が出来
医者よりも恋が効くのかボケ防止
極楽の予約今から入れておく
胸のすく啖呵一度は切つてみたい
暗号を違え夫婦の不整脈

横浜市 小野句多留

七十に届く間際の気の焦り
雨続きプラス思考が浮かばない
被災地にオレオレ詐欺が出張所
お通夜じゃないぜ二人の朝の膳
コンビニのお袋の味よく変わる

静岡市 安本晃授

誉め言葉時には愛の意志表示
追伸へ書き足すことが多過ぎる
妻も子ももうこの指に止まらない
賛成をすれば見返りある仕掛け
後輩に追われ息つく暇がない

静岡県 蘭田獏杏

ハイヒール履いた途端に女めく
秋風に洗いざらしが心地よい
気のせいか昔の風は温かった
お隣の煮物が匂う換気扇
片えくぼ波瀾万丈包み込む

可児市 板山まみ子

松茸を採った話は遠い過去
天災の書込みはないカレンダー
咲けばよい咲くだけでよい菊作り
信用をして買うことに無農薬
言いすぎを悔やんで磨くガラス窓

愛知県 早川 盛夫

波風を避けてどっこい生きている
じいちゃんになる覚悟ならできている
摺り減った靴よ勤めもあと少し
子の帰省昨年なかった髭があり
無情にも冬忍び寄る震災地

京都府 丹後屋 肇

秋深し幻聴で聞く虫の声
たそがれて散る紅葉が肩に乗る
淋しさをつきつけてくる落紅葉
激震に慌てふためく皿茶碗
救出の崖に固唾を呑むカメラ

京都市 都倉 求芽

曙の空にひろがる可能性
どの鳥も平和を謳う年賀状
血の色で修羅場に昇る初日の出
意地捨てぬ同士で話行き違う
モデル地区行事ばかりが増えてくる

京都市 高島 啓子

雪催い小吉と出る初詣で
湯どうふのゆらぎ程度の恋心
食パンをまっすぐ切ったことがない
アラファトの妻アラファトを看取るなり
乾燥肌しばらく恋をしていない

福岡市 井上 森生

ITは何やら打ち出の小槌かも
シニアの夢と命はどこらまで
パソコンと睨めっこして句をひねる
遣伝子がお好きないようにスイッチで
生きて来た宝の取っておきの知恵

大阪市 本間 満津子

何処からか蟋蟀が来て家も秋
しよがないなまた歳に罪着せている
凡々の日々感謝を忘れまい
神さまにお願い戦争止めさせて
何をうろうろ潜水艦はお隣か

大阪市 西出 楓楽

三が日酒気帯び家事は許されよ
カルチャーで教えることは学ぶこと
逆転の発想だろうぬれおかし
握手の手あたたか過ぎるのも注意
ひとりぼっち淋しい人と限らない

大阪市 神夏磯 典子

人間の無謀へやさし虹が立つ
鯛よりも目刺しの頭に賭けている
怒った時の妻に活気が満ちている
うな井が美味しいのですテレビ消す
アングルの具合で鼻が高く見え

大阪市 川原章久

あつさりと金は貸さんと出たメール
八十五歳保険効くなら出る電話
衰えを知らぬ傘寿が打つメール
炭禁輸庶民の味に出る異変
一寸した事に怖がる肝っ玉

大阪市 板東倫子

高層ビルに住めば地震にゆすられる
身動きもとれぬ泥土で牛が啼く
大荒れの秋に見事な菊花展
家族とはいいものだネと孫が言う
それぞれに悩み抱えた忘年会

大阪市 前 たもつ

大阪城借景にして初日の出
気持よくさせていただくボランテア
マンションという町会のおつきあい
心当りある風邪引きに長引かれ
新住所ふえて賀状の書く意欲

大阪市 小糸昭子

卵でも値段が違うルーツの差
ワイングラス磨いてロゼが虹になる
ジルコニア磨くとダイヤより光る
圧力の反動思ったより凄
子離れの出来ない老母の小煩さ

大阪市 町田達子

せめてなりと余震だけでも穏やかに
被災地を思えば結構なくらし
少しゆつたり過しましようよもう八十路
チユンチユンと雀元気に餌を漁り
鳥語が分れば楽しいだろうと一人笑む

大阪市 古今堂 蕉子

青空がきつと見えるよ生きてれば
チエーンまでかけ怒ってる午前二時
腎臓結石とって指輪にでもするか
子に見せるうしろ姿のない私
こだわりが消えて笑顔でシャンシャン

大阪市 川久保 睦子

下心おへん たあんとお呑みやす
友達がまた増えました年賀状
チヨコパフェ野暮な話はやめにしよう
歯の痛み消えない何の罪だろう
むつかしい言葉で人はくどけない

大阪市 松尾 柳右子

年賀状何度も見ては笑みこぼれ
暖い布団で寝てる至福時
強制はしない日の丸愛でる時
つつが無く過ごす二人の痴話げんか
信号を守ってるのは犬でした

大阪市 鶴田 遠野

眼の老いに遠ざけられる文庫本
副作用スリムにさせた片思い
雑言を聞き流してる秋の風
指切りの言葉信じている小指
レモンティー最上階はふたりだけ

大阪市 清水 利武

美声上げコケコッコと初日の出
酉の年元氣を出して初詣で
無理矢理にとられています介護保険
新潟の地震止まらず落ちつかぬ
平成になって日本も住みにくい

大阪市 奥村 五月

のんびりの妻もいらだつ歳の暮れ
警察で刑事も照れる下着ドロ
笑いたい時は困ると仁王さま
暴走の娘を変えた母子手帳
野菜高趣味の島も役に立つ

大阪市 熊代 菜月

寝正月ゆつくりさせぬ客が来る
薬でも過ぎれば毒になるお酒
喜寿近し残りの夢のまだ多し
廃校の壁に残った傘マーク
いくつもの坂がつないだ夢のかず

大阪市 岡本 久峰

秋の陽を受けて八十路のわび住まい
干し草に寝かされ零下四十度
柿食えばホロリ亡き母なつかしむ
冷水摩擦身心共に洗われる
ほどほどの幸せ白の保険証

大阪市 小泉 ひさ乃

荒れた年過ぎ新年の陽が昇る
新札の偉人この世のドラマ見る
何もないやさしさほしい一通话
桁外れの出世喜びより不安
良く笑う妻で我が家がガラス張り

大阪市 安達 はじめ

限界を越えて無口が口を割る
失敗を重ねて知恵も増えました
ばつさりと切りたい時もある絆
この人も善人らしい下手な嘘
傘寿から白寿を狙う意気がある

大阪市 玉置 英子

今日いい日犬の鳴き声聞けたから
胡麻がいい蜂蜜がいいみんないい
アリコにも入れぬ歳にとうになり
草の実があるのか雀群れている
知恵くれた友若いのに先に逝き

大阪市 星 野 きらり

温もりが欲しくローカル線に乗る

釣瓶おとし人影せわし帰り行く

あれこれとやる気充分秋桜

縄とびへ亡母の呼ぶ声耳底に

思い出も楽しからずや秋夜長

大阪市 大 川 桃 花

新しい靴に背かれ旅疲れ

すき間にはたいてい小銭落ちていて

若者の会話にわたし異邦人

ペンペン草生えて好評分譲中

群の中たまに外から見る余裕

大阪市 津 村 志 華 子

煩惱を捨てよと響く百八ツ

初春はいい 森も小鳥もよく喋る

野心ない故郷の風に癒される

いにしへの文化が眠る深い森

この町に住みこの町の彩が好き

大阪市 伊 藤 博 仁

コマージュラル抱えて走る市営バス

今年こそ七輪買ってさんま焼く

葉野菜の高値が妻をほえさせる

ストレッチ目の前にへそ腰が抜け

置き忘れ杖が記憶をたどらせる

大阪市 中 田 あい子

色気という言葉をきらう女子社員

失って知る信用の大きさを

あこがれのマイクにぎつたのど自慢

恋人を失い彼女に出来たはば

いとし子が宝であった時はすぎ

大阪市 川 端 一 歩

柳友が一人増えたら手を敲く

初春の空ボクのジャンプを待っている

文化果つ国にしないで総理殿

初夢は砂漠に水が湧き出する

九条の集いに老いの血が燃える

大阪市 西 川 更 紗

豊かさに溺れていたはひと昔

渋滞へプロペラと羽根ほしくなり

断った日から味わう孤独感

採め事を冷ややかに見る他人様

受話器から友の咳こみもらいそう

大阪市 杉 澤 汀

元旦へつづく除夜の音聞いている

雄鶏も雌鶏もいて年明け

おばあちゃん着せて嬉しい七五三

単線に由緒ある名の無人駅

元旦と除夜の隙間へもぐりたし

大阪市 榎本舞夢

赤とんぼ空から秋を連れてくる
たのまれる内は華です元気です
最近ほ主人の料理まつている
同じ場所アングル変えると別世界
百歳の母穏やかに逝きました

大阪市 中村叡子

小泉さん貴方の意思は何方向く
自衛隊一人の犠牲も許せない
被災地に人の強さと優しさと
松坂がイチローの道遠からず
仏壇のお下がりが私みんな食べ

大阪市 清水絹子

労苦ここに見事果した一葉忌(二葉三句)
にこりえを友と騒いだ青春期
流麗な筆に釘付け日記帳
父母の顔知るしあわせの誕生日
諭吉さんに連れ出されたも無事法事

大阪市 津守柳伸

被災地に笑顔期待の初日の出
自家栽培菜食主義の血糖値
被災地へすまぬ三食恙無し
道祖神おやきの好きなわさび沢
義援金ノルマ果たした初旅行

大阪市 津守なぎさ

もめ事はいつもあつさり聞き流す
星空にせつない恋をぶちまける
おのろけを言い返して立話
要領の悪いところが憎めない
百歳を囲む家族もみな長寿

大阪市 岩崎公誠

注連縄を飾る餅屋のえびす顔
自然体無心無常と手をつなぐ
辛抱は嫌い妥協はなお嫌い
歯車のひとつで生きて火を潜る
午後三時百円そばに刻み葱

大阪市 近藤正

無駄金の極み政党助成金
良い夫婦とていささかの溝はある
奇跡よぶ生死の間優太郎
去る年は地震台風クマ イラク
温暖化青い地球が溶けていく

大阪市 渡部さと美

もえつくす もみじいのちの話する
新札が出たか二日目もう忘れ
里へ出て熊がほしがる体脂肪
優しい人やさしい影がよう見える
歩きよい靴をふやして弱る足

池田市 栗田久子

若水を杓ですくえば春の音

早春の曙光きらりと地を走る

いざこざを聞く気はないが外せぬ座

たまに逢う人からもらうあたたか味

そこそこにあせり暮らしを引き締める

茨木市 藤井正雄

寝たきりの祖母の目線で飼う金魚

正論の証拠に拍手鳴り止まず

防犯の当番札をでかくする

審判の手が砂塵から出てセーフ

運だけで取れたポストとへりくだる

和泉市 西岡洛醉

定退の其処から僕の曲り角

一合の酒に本音がポロリ出る

いち日を駄馬で終った甲斐性無し

B面に逆らう五指をかくし持つ

喜寿の坂まだまだ夢を追うつもり

和泉市 中川楓

仮の世を本気で生きる夫婦です

積ん読を義理で二冊も買ってくる

こんには後は弾んでゆく会話

すぐ決まる誕生会の蟹料理

せっかちで直ぐに本心曝け出し

泉佐野市 山本蛙城

バツカスの思慮 勝って酒負けて酒

八百八橋青いテントが目にしみる

行き詰まる会議の中の咳一つ

早起きの苦手若さと信じとく

化石にもなれずテレカの侘住い

大阪狭山市 矢野 梓

おみくじは小吉でいい空が澄み

故郷のニュース土産に友が来る

こだわりを捨てて心を和ませる

二人して登れるゆるい坂選び

童謡は音痴の二人にも歌え

柏原市 永浜 加津子

問題をいくつも抱え年越える

環境の違いに友が遠くなり

災害の大きさに秋忘れられ

今日こそと出掛ける手筈雨ざんざ

一枚のセピアの写真時戻す

交野市 森本弘風

血圧だ血糖値だと探す医者

餅二つ焼いて昼飯妻の留守

どなり合う会話が弾む老夫婦

古希過ぎた男十人クラス会

癒されるお助け水に会う山路

交野市 山川 日出子

平穩な酉の年待つ老いた猿
温暖化地球の怒り大震災
雑念が坐禪で消えて無の世界
床の間で見守っている亡母の琴
寝室に夢が広がる世界地図

交野市 田岡 九好

純生と描いたTシャツ着て歩く
どの顔を見てもほくよりかしこそう
年金でだんだんブタの顔になり
Bクラスでは優勝とトラファン
後家さんを羨ましがる妻と居る

河内長野市 植村 喜代

コケッココ今年は良いことあるように
台風も地震も秋を持って行く
何処へ行くことも出来ずに秋最中
赤い糸にも時々悪魔忍び寄る
クーラー済みあなたの部屋はもう真冬

河内長野市 井上 喜酔

来た道を帰れないのが夫婦坂
舌もつれ口のチャックが甘くなる
ときめきは無いけど仲の良い夫婦
血圧と相談急ぐことは駄目
鐘が鳴り歴史が動く大晦日

河内長野市 山岡 富美子

同居して御節料理はグローバル
肩書きは主婦で財布は握ってる
妻の風邪余震が続く台所
石ひとつ胃の腑に沈むわだかまり
ほろ苦い恋が沈んでいる汀

河内長野市 水谷 正子

ベッドより落ちて腰痛爆発す
何よりのお見舞友の便りです
イチローの母嬉しからうれしから
楽天が杜の都に風起す
真つ黒の年が終ったさあ西だ

河内長野市 村上 直樹

祝電のご披露はない無位無冠
鼻柱でんと構えた頼り甲斐
中道という比類なきしたたかさ
晩学に燃えて古びた辞書を繰る
いざやいざ飛び立つ酉の関の声

岸和田市 原 さよ子

ちっぽけな私と思う青い空
お若いとうれしい嘘で和ませる
口下手がボチボチ話す人間味
わがままと背中合わせのマイペース
受話器から喜ぶ顔が見えてくる

岸和田市 岩 佐 ダン吉

辛うじてふる里一字だけ残る

ご交誼を願うと恐いことを言う

老けたなあ小さくなつたなあ母よ

許すたび人間の味深くなる

野に放つ僕が再生するために

岸和田市 亀 井 皎 月

休耕田多く日本が瘦せて行く

故里は紀の川飲んで皆長寿

宅急便初物という里の四季

我が蔵は嘉永の音で開けしめる

愛すれば風の心が聞えそう

岸和田市 井 伊 東 吉

ことの外今年活躍扇風機

泊りがけ初老のゴルフ疲れ果て

野菜高もやしばかりが売れている

灯油の高値に悩む年金者

柿好きが今年の出来を案じてる

岸和田市 雪 本 珠 子

背のびして英字のニュース読んで見る

とびきりの笑顔に心掴まれる

お望みの色に染まって生きてます

しがらみを脱ぎ捨てひとり旅にでる

わたし今心雨もりしています

岸和田市 中 島 寿 海

三が日見るものすべて晴れ姿

撮影会天地自然が美術館

朝焼けも夕焼け雲も我が名画

飼猫の生き様からも教えられ

改まる年の始めに誓い事

岸和田市 土 橋 房 枝

三が日白足袋はいて妻らしく

震災は明日は我が身と献金す

邪魔をされ余計に燃えた恋心

コンビニのお節ですますひとり者

片想いプラトニックなラブ終わる

岸和田市 宮 野 みつ江

冬なのに春色を着て春を呼ぶ

今年から未来日記を書き始め

寝そべって高野の犬は寺門守る

近江から来たと給仕の若い僧

かいらしい口でやんわりいけず言う

堺 市 村 上 玄 也

当事者でないから奇麗事が言え

飢餓の子がいて肥満児もいる地球

天才と言われてたのは五歳まで

男気を出して妻から詰められる

張り合いをなくし蛻の殻になる

堺市河内月子

孫ふたり増えにぎやかなお正月
葉桜のアーチバイクで通り抜け
あれやこれ自家菜園に頼り切り
動いてるあいだに消えた肩のこり
残菊の庭水仙が咲きはじめ

堺市神原文

コラムから拾う言葉よ山椒の実
情報過多に方向指示器出し難し
秋雲に見透かされてる嘘いくつ
紅葉につられるんるん庭仕事
ワイングラス替えてフルムーンの気持

堺市石堂潤子

サザエさん読んで私の小宇宙
預金崩してささやかに夫婦旅
ごめんねの一言胸の刺消える
利き酒の鼻は逸品妻は下戸
丸ごとのカボチャを前にする思案

堺市山本半銭

旅愁かな時雨肩うつドレスデン
市庁舎の庭にバッハの枯葉舞う
マイセンで選ぶ小さいマイカップ
朝霧の楓並木にさようなら
介護保険値上げ年金目減りする

堺市和田つづや

もがいたり泣いたり確と生きてます
被災地に申し訳ない熱い飯
味噌汁は平和な朝の香をはなち
座禅組む気持でギター弾いている
風邪に寝て辞世まがいの句が出来る

堺市宮本かりん

夫三分わたし七分の妥協点
腹立てて笑って外野気が軽い
何となく釣られて唄うわらべ唄
青春が戻るナツメロ唱和する
閃めいた言葉が消えてゆく脳よ

堺市近藤豊子

たんぼの絮毛を吹けば泣きやんだ
集団登校おかれて走る傘ひとつ
ぐらり揺れはなれ住む子の顔うかぶ
被災地へとんちやくなしに雪はふる
列島のこころひとつに義援金

堺市齋藤さくら

たんと幸かれて子供が嫁ぎます
元氣かと聞いている友がくしゃみする
口べたと言うてる割によく喋り
一日は辞書と遊んで恙なし
一合の酒でストレス散らして

堺市 志田 千代

運のいいヤツと言われているらしい
いい婿だ酒をたしなむいい婿だ
いい事をしたのでどつと疲れてる
気疲れなお方やたらとへり下る
産土の神様だけを信じてる

堺市 西村 りつえ

大空へ高く翔びたいコケコッコ
一葉も美人になつて五千円
窓際で負けず嫌いなシクラメン
どん底で根気強さをくれた神
ユーモアで飾つてみたい寒い部屋

堺市 柿花 和夫

お元日今日の幸せ自祝する
初詣で盲導犬は常の顔
元日の新聞三日では読めぬ
寒いなあ疑似平和主義のさばつて
わが息子僕より僕の顔をする

吹田市 瀬戸 まさよ

新札の貧しく偉い人ふたり
祖父と祖母小さくなつて孫伸びる
猛暑耐えインフルエンザ迎え撃つ
憧れの汽車貴婦人にやつと乗る
政財界嘘が通らぬようになり

独房の闇に命と語り合う

お見舞に声はげまして空元氣

友からの便りに溢れ出る祈り

名前すら書きたくない拒む指

ロボットが歩くとこんな歩き方

初日の出鳴かすにおけぬ律儀者

一声で春を迎える心地良さ

鯨にもよろしく頼む初詣で

イラクでは嘔みつき亀が息ひそめ

用事だけ大声で言うお父さん

狂乱の天地に棹も流される

飲みなはれ遊びなはれとふて腐れ

豪快に笑える妻に従いてゆく

泥沼で咲かせた花を愛おしむ

抽出しに遣り損ないを仕舞い込む

だんだんと猫に似てくる日向ぼこ

外人の客と美々卯のうどんすき

人情があついうどんの旨い街

銭湯で拝むレトロな富士の山

罪のないマンガのように過したい

吹田市 穴吹 尚士

吹田市 野下 之男

吹田市 太田 昭

吹田市 岩屋 美明

吹田市 早川 棲世

幻想と記者が知らないはずはない

男は背 女は腰がもつ表情

老人ホームまで一生を駆け続け

子育ての母にきたないものがない

十二月女Bとは切れたまま

吹田市 大谷 篤子

無器用に浮世の波を泳いでる

不整脈抱き鈍行の旅をする

ひよっとして今が一番幸せか

食欲に歯止めがきかぬこわい秋

ときめきを胸に残してまだ老いず

吹田市 木下 敏子

一杯のコーヒーだけで足るふたり

心底を空っぽにして笑い合う

酉年を迎える筆の年賀状

満足の顔を浮べて葉風呂

背を伸ばし若さ保っているつもり

吹田市 須磨 活恵

有難い夫婦達者で晦日そば

しみじみと生きる喜び除夜の鐘

子や孫に囲まれ夫婦古希の屠蘇

昇る陽にささやかなれど夢を抱く

水仙も春を寿ぐように伸び

四條畷市 吉岡 修

冗談でこんなこと言うはずがない

笑ってる子供はほんと天使だな

竜宮にいても我が家に帰りたし

琴線の違い女に響かない

怪しげな国それらしい大統領

大東市 南原 正和

ばあさんや雀鳴いてる起きようか

やさしいに言うたはるけど根は恐い

パソコンの文偉そうに澄ましてる

唇を盗まれ怒る振りをする

肌に染む君の色香がまだ消えぬ

大東市 児玉 蛙

里帰り迎えてくれる母はない

おいしいと母のおにぎり思う手よ

喜びも悲しみも花勇氣くれ

一人身の生きる余生の置きどころ

歳をとり臆病風がついてくる

高石市 浅野 房子

しがらみの縫れて解けぬまま逝くか

蜘蛛の巣を払えば少し見えてきた

心とは違う芝居も出来る歳

わたしよりお年寄りには親切に

更年期心を病むと厄介だ

豊中市 安藤 寿美子

あの話余震みたいにぶり返す
子どもらに私は反面教師です
湯どうふにあっさり負けを認めてる
孫はもう私のアングルには居ない
女ひとり渴きに強くなっている

豊中市 吉田 あずき

天も地も国も安全圏がない
熊も知るこの住みにくい新世紀
パレットに汚れた色が溶けて来た
家庭菜園不揃いながみずみずし
来し方を想うひとりのブラックコーヒー

豊中市 水野 黒兎

竹とんぼ空の青さに憧れる
忙しいことも一種のくせらしい
単線のレール孤独に耐えている
陽を恋うて冬のトマトにない笑くは
定年を機にトップの座妻に空け

豊中市 江見 見清

わからないところはウウウの子守唄
出かけますただそれだけのメモがある
運動をしたと納得迷い道
敷かれてる などというけど威張ってる
急ぐからと言いつつカレーにす

豊中市 山門 タミ

ヨッコラシヨ アヒルで登る傘寿坂
散り急ぐ枯葉がしょった輪廻かも
三日月が諸刃の剣でさしてくる
被災者を思えば温い飯に泣く
永年の身体のしみはぬぐえない

豊中市 岸田 知香子

ガラス越し落葉はらはら命燃ゆ
ガラス越し初冬の陽ざし背に温い
ガラス越し駐車違反の取締り
真っかつか夕日が沈むガラス越し
曇り空傘の有無知るガラス越し

豊中市 藤井 則彦

盗み聞きしながら粘る縄のれん
約束は今日もないのか皮手帳
また一つ普通電車で見る景色
街頭のティッシュをあてに立ち止まる
幽かな灯サービス残業かも知れぬ

高槻市 乙倉 武史

天災にや文句が言えぬ泣き寝入り
生活の基盤根こそぎ持つてかれ
悔しいが弱音は吐かぬ男伊達
敵味方共に疲れたとは言えず
四面楚歌味方の妻も横を向き

高槻市 西谷 治三郎

ティッシュまで俺を無視して横を向く
絵馬の誤字これじゃ合格見込みない
クリームを皺に擦り込むおばあちゃん
バーゲンの服と服とが顔合わす
心ブラも軍艦マーチの街と化し

高槻市 田中 千莞子

残照に命極める冬紅葉
クリスマス亡夫の写真と二人きり
嫁姑話弾んで歳の市
キツチンの窓俵せに曇らせる
売れ残った注連縄どないするんやろ

高槻市 生田 義一

夢で会う昔の仲間若いまま
カラオケは要らぬ軍歌の同期会
琵琶の湖じっと見ているだけでいい
イチローに負けじとゴジラ大暴れ
台風の名残り無残に青シート

高槻市 傍島 克治

蚊帳の外聞こえよがしの独り言
謙遜でなかった嫁の料理下手
人生双六振るサイコロのままならず
職場変れど必ず嫌な奴が居る
町医者の上得意です喜寿間近

高槻市 執行 稲子

命火を燃やし尽くしたベットの腫
いらいらをなお募らせる咎め癖
左脳から指令がきます箸を置く
新婚の部屋から軽い生返事
置傘が安らぎくれる空模様

高槻市 滝本 きよし

二階の灯が灯台になる午前様
山の神に厳しく夢で叱られる
言うことが次々変わる酔芙蓉
携帯の海で老翁泳いでる
地底より幼い命生還す

高槻市 左右田 泰雄

神様も大変だろう絵馬の数
ウイットに富んだ科白に操られ
どんだん橋渡れば月も付いて来る
効いてると思い惰性で飲む薬
派手な音させて買物車押す

高槻市 江原 秀夫

うれし悲し最高齢のOB会
小賢しい男を叱る文殊菩薩
百歳へつながる道が見えて秋
すらすらと手馴れた筆が味を出す
優しさにぴりっと本音効かせてる

高槻市 井上照子

地位のある男を時に魔が誘う
仕送りの親へ感謝の卒業証
惚けだけは堪忍独り生きてます
独り居の夜の冷たさ負けられぬ
災害を忍び忘年会はせず

寝屋川市 江口 度

お赤飯を配る話も速くなる
道楽のはずが金賞もらう菊
信号へふと立ち止まる向老期
押しつけの好意反感呼ぶことも
被災地をアングル変えてとりまくり

寝屋川市 籠島恵子

立前と本音トコロニヨリ違う
コスモスも私も平凡が好み
警え話でうまあくなだめられている
じわじわと吃水線が首にくる
オブラートに包んでくれたご感想

寝屋川市 坂上高栄

生きてるぞレスキュー隊の意気あがる
自然ダム目を被いたくなる風情
嫁はんの型にはまってゆく息子
盲導犬影の形に添う如し
異常気象神の警告かと思う

寝屋川市 太田とし子

いい酒に会うとすぐ泣く前科者
蟋蟀も浮気みとめて声たてぬ
生国を告げてみかんの旅ガラス
酔うまでは仲のよかつた嫁姑
兎追うた山から熊が出るそうなる

寝屋川市 富山ルイ子

片付けが大好きひまを見つけては
何もかも思い出母の一周忌
弟妹と今年こそ行く黒部ダム
古里の友庭の柚子山ほども
携帯を持ってと友がさりげなく

寝屋川市 森茜

ストレッチ ウォーキングで骨護る
木枯らしを背負って部活より帰る
先生を怒らせている細い眉
すこやかな冬へと予約する注射
終日の雨読書三昧パズル三昧

富田林市 池森子

直感的をはずして風になる
身辺を整え風に添うかたち
感性は秋で檸檬をふりかける
一言の語尾から秋が深まりぬ
破目をはずして舞い上がる落ち葉

富田林市 片岡 智恵子

恥をかく勇氣自分が好きになる
思い出は美しいまま椿落つ
グーチョキパー何を出しても負けている
百の願かけて百円ほうりこみ
美術全集買つて心が満たされる

富田林市 大橋 鐘造

がまんした数だけ太くなる絆
価値観の違う二人で一つ屋根
豹変したのは素顔知つてから
人間になつて見て来た夢の数
風去つて何もなかつた事にする

富田林市 中井 アキ

躰いた数だけ神に愛される
真つ白な恋もあるぞと百合開く
時々魔女になりたい秋帽子
裏切つてそれから深いふかい闇
終章の駅で出会つた淡い恋

富田林市 稲川 恵勇

偶然の出逢いアダ名で呼びかわす
職降りて生きるテーマをがらり変え
捨てられぬ五欲が老いの活となり
天高く石焼き芋の声のどか
母の味祭りがルーツちらし

羽曳野市 吉川 寿美

国民不在の九条がゆれている
親も子も妻もいるだろテロリスト
対岸の火事と思えぬ被災地図
髪一本ずつ花になる孫の恋
菊もダリアも母を癒してはくれぬ

羽曳野市 安芸田 泰子

ひとり住むことにも慣れて年暮れる
秋の山色付くさまに散るさまに
日替りの雲美しい秋の空
余生なお無事でありたし初詣で
添書きの一行温い年賀状

羽曳野市 酒井 一壺

読めぬ文字名僧の軸家宝です
飄々と生きて一生縁の下
法律を知らずに生きて恙無し
神様も裁ききれない人の業
信ずればすべて正しく見えてくる

羽曳野市 三好 専平

抜けた毛が耳の穴から生え変わ
考えが違ふと言うては殺し合い
観音の裏でカラカラ笑う鬼
天然の河豚は尾鰭をピンと立て
知床の秋の罨ひくまが人を恋い

羽曳野市 徳山 みつこ

工場の野菜でしのご災害禍

太陽に勝るものなし物干し場

エプロンにお日様マーク貼って朝

北風にごっそりストレスを渡す

世界中みでいて戦火なげ止まぬ

東大阪市 谷口 義

型くずれするほど食べる秋の天

中年が終った時は気づかない

段取りの悪い手品を見せられる

いつまでも若いつもりで揺れている

正眼の構えで柿を剥いている

東大阪市 安永 春

メルヘンの森の散歩は小さい手と

手招きのススキに魅惑され迷路

引越して転勤族の娘を想う

ゆらゆらと川面に映える紅葉狩り

日が昇る生駒借景祝い膳

東大阪市 笠井 欣子

洗濯ものたたんで思う今日の幸

美容院で雑誌ながめて知る世界

まだ一人帰らず門灯つけておこ

老いてなお五体満足贅言わぬ

主導権妻に任せて日々平和

東大阪市 北村 賢子

被災地へ憎らしいほど青い天

活断層あるが大阪まだ平和

介護さえさせずに逝った母恋し

父母にやはり感謝の誕生日

ネクタイをキリッと締めてゴミも出す

東大阪市 中岡 妙

開けて閉めひとり芝居の自動ドア

新しい風だ倒れぬように立つ

奇跡より今が大事と米を研ぐ

一行詩ほどの人生歩んでる

落ちてからどどんぐりハテと考える

東大阪市 指宿 千枝子

扇風機一つ残して夏仕舞う

しみじみと柿むきながら子規のこと

のんびりと新聞を読むのもゆとり

じいさんも三人寄れば賑やかだ

隅っこへ外へ追われる煙草好き

枚方市 二宮 山久

晩秋を夫婦であるくベアシユーズ

孫にあう七五三参りの夫婦旅

六十歳曲り角とは思わない

診察券こわい話が酒の量

好きな酒飲めぬ結果の診察券

枚方市 寺川 弘一

故郷は地図が無くても迷わない
ワンルームいつも下着の満艦飾
初恋は別々だったのに夫婦
雑巾も汚れていない新世帯
漠然と老後のために貯める金

枚方市 鈴木 政子

ママが留守子供同士で回転寿司
組もチンも不用のものが増え
貧乏神私の身から離れない
台風が過ぎヤレヤレに地震来る
日本列島に神様罰の贈り物

枚方市 海老池 洋

鶏鳴を永らく聞いたことがない
寒風に耐える私も枯れ木立
平成の父の一喝通じかね
近道にまさかの踏み絵落し穴
弁明へ舌纏れだす臍の傷

枚方市 宮川 珠笑

相談をして子供らが席ゆずる
返事せぬ嫁にも老後頼んどく
強面の語尾に小心者のかけ
とほけたり聞き流しでき好爺
台風がそれで対策疲れでる

枚方市 莊司 弘之

他人の技盗んでうまくなる力士
青空をバックに熟し柿ひとつ
多忙な日こなしゆっくり飲んでる
まだ洪がぬけない妻の小言聞く
好手打つ指先ピンとそり返る

枚方市 安達 忠央

名月が被災の地にも煌煌と
おたがいに用事つくつてしのび逢い
用事でと下戸は静かに宴を抜け
競う店たがいに味を盗みあい
遣り練りの妻の名人芸を褒め

枚方市 森本 節子

神無月千両の実の赤く熟れ
くらがりで頑張った児に歓声あがる
父母眠る墓は静もり故郷は秋
主幹とは同名の蕎麦屋で由来さく
月下美人の鉢に仔猫を置きざりに

藤井寺市 高田 美代子

秋の絵に連なる赤青黄の山よ
陽の届く所へ花の鉢を置く
手作りでプロとは違う良さがある
言にくい事も言わねば日が昏れぬ
決断の一語が辞世めいている

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

信号の点滅渡り切れた足
新しい釘に吊した古時計
最初から思い違いの時刻表
手鏡に節穴だった目を映す
聞き流すことも世渡り心得る

藤井寺市 楠 昭子

距離置いて住んでいるからつつがなし
阿呆なこと言い合い無事を喜ぼう
躓いた石にもあった良いヒント
ほめ言葉たつぷり孫を弾ませる
決断へ父が沈黙破るとき

藤井寺市 中島 志洋

松の内堅い話はお断わり
新年の誓い日記に書いただけ
舞う巫女のお尻を拝む初詣で
お年玉一子から貰って孫に分け
福笹が肩で揺れてる千鳥足

松原市 小池 しげお

親戚に九十歳が二人居る
昼めしは食べなくてよい文化の日
外からは見えないようになってる
曲っても自分で線がまだ引ける
触っても何も感じぬ歳になり

箕面市 出口 セツ子

夢捨てた瞬間から時間の逃亡者
手鏡の中に溜まっていく秘密
ほんやりと無駄を楽しむティータイム
純粹さ消えて淋しい子の自立
優しさの線の細さが気にかかる

守口市 石森 利昭

取り敢えずおせちを買っておきました
初笑い和服で並ぶアルバイト
引越しの手伝い呼んで貰えない
心配が無いのか妻が大あくび
幻の地酒を呑みに来いと言う

守口市 井上 桂作

暴風雨乾くひまなし大地震
靖国の参拝たてにごねる国
冷静になれば争いなど忘れ
負け戦六十年も頭下げ
泣き上戸泣くまで飲んでうれしから

八尾市 高杉 千歩

せめてもの金箔の酒ほとけさま
寒牡丹遺作にはせぬ絵具皿
二千五年ひとり暮しも六年生
年金で浮かれた話知れたもの
殺してもゲームはすぐに生き返る

八尾市 宮崎 シマ子

人間の差配で運が動き出す
食べ放題の松茸ツアー嘘くさい
大方がゲームで消えたお年玉
潮引いて正月四日古い二人
百歳の自信仏の顔になる

八尾市 長谷川 春蘭

枝豆を届けてくれた兄達者
別れてはまたもつれゆく秋の蝶
断ち切れぬ想いが咲かす曼珠沙華
片恋が好きでコスモスゆれている
約束を破らぬものに秋の風

八尾市 宮西 弥生

その先は神にまかせた迷い子札
狂わずにプラトニックはむずかしい
来る者を拒まぬ壁面に揺れ候(薬師寺大壁画)
サスペンスぐるぐる回りして終る
新札が人の流れを変えてくる

八尾市 吉村 一風

善人と言われ善人らしくする
じゃんけんぼんじつくり妻の肩を揉む
望郷のまぶたに浮かぶトンボ追い
敬老日孫酒提げてやってくる
松茸を押し頂いて笑わせる

八尾市 井尻 民

浮きあがる事もあるさと耐える石
腹八分言葉八分のバランスで
沈黙を固く守って自己嫌悪
近道を選んで迷う事になり
火傷せぬ距離で合図をしています

八尾市 内海 幸生

鶏の関富士に初陽を呼び寄せる
ブルーヘブン二十年の汗バラ開く
バラ遠目 花芯を覗かないように
可愛い花抱く雑草を踏まないで
柳聖に雪清く舞う高野山

八尾市 村上 ミツ子

寒くなるだんだんてかくなる不安
知らなくていいこと知ってからのうつ
歯医者行くいつでも痛くなつてから
今やれることをぼちぼちやっていく
米びつの底が見えなくなっている

八尾市 山本 宏至

自分史を集印帖に語らせる
外面のいい分家で小うるさい
折返しここから自分との勝負
旅プラン酒のめるならどこへでも
人間として古傷はつつかない

八尾市 生嶋 ますみ

国籍にこだわっている市場籠
米五キロ元氣を出して持ち帰り
黒い髪茶色の髪もみんな孫
ひと言をこらえて家の和を保ち
胸の中見抜かれそうな鎌の月

大阪府 米澤 俣子

透ける風青より碧い秋の天
丹念に来年の夢種を選ぶ
集中が出来たら迷うことはない
あいまいな記憶もカネは別らしい
我慢しているのは夫かも知れぬ

大阪府 桑田 ゆきの

台風が生んだ野菜の超高値
風水に凝った置物黄に染まる
鍬と鎌宝にしての一徹さ
病んでから神よ仏と手を合わす
小豆選る母の背丸く秋陽はね

大阪府 初山 隆盛

初夢や白寿の馬でいざ駆けん
星の降る月の砂漠をゆく戦車
はつきりと水位の下がる盗み酒
災害へ時の申し子ポランティア
責任を果たす姿の干し蝶

大阪府 前田 ゆい

三猿も出来ず申年あつと過ぎ
理解ある婆ちゃん演じ知恵絞る
旅の子に母の一日長いこと
美しくなりたし恋を今一度
川柳も上手くなりたいた年女

大阪府 野田 栄呼

身長にまわしてみたい高血圧
心臓に余生のほどを問うてみる
もう一度旅の気分にあす写真
子を失くし胸の空風撫でており
神様に頼んでおこう尊厳死

大阪府 澤田 和重

風呂あがりみたいな顔の初日の出
あいまいを許さぬ妻の丁寧語
和解してからの握手に血が通う
家事音痴妻に洗脳されている
酒好きが反省会をだしに飲む

神戸市 山口 美穂

清掃の車がベンツというお国(ドイツを旅して)
ラインの船から税をとったという古城
旅楽ししはお預けダイエツト
木組みの家お伽の国かと迷わせる
葡萄畑パッチワークのよう黄葉で

神戸市 木村 貴代子

忘れる間なしに天災おそう年
地震国なのに備えは先送り
平穩ないつもの朝に感謝する
ブッシュ再選世界の受難まだ続く
出来事に追いかけられている政治

神戸市 池田 善守

初春やめざすは次の年男
初日の出今年の力満ちに満つ
一寸先分らないから生きられる
力湧く生きてるだけでまるもうけ
敬老バスもらって複雑古稀の秋

神戸市 山口 光久

近道をする正義が怒りだす
丸腰で失うものの無い強み
風下で皆の技量を盗み取る
建前で進む話かもどかしい
悔い残る一日夜の苦い酒

神戸市 伊勢田 毅

一日に一事専念心掛け
居酒屋で人事を決める雑魚仲間
さりげなく煙幕を張り友が消え
老人に優しいラジオ離せない
風向きを読んで野武士が旗たたむ

相生市 中塚 礎石

仕舞風呂母と戦士の垢が浮き
さよならの机に残る戦あと
台風の波に漂う夏の恋
共存を拒んだあげく熊を撃ち
病室にいくつもの札祀つてる

尼崎市 春城 年代

いつまでもあてにしている力瘤
ごほうびに珈琲入れよわたくしに
お不動さんが頃合いの散歩径
夫留守二階からふと降りて来る
残月のふわりと浮かぶ昼下り

尼崎市 春城 武庫坊

新暦掛け老いの未来を思考する
勝ち鬨の軍鶏に元気をつけられる
焼芋を食べると昔話出る
身の程を知って二三歩後退す
ノースサイド敗者に向かい風が吹く

尼崎市 長浜 美籠

雨しとどバイオリズムが狂い出す
絵に描いたように尾を引く一番機
愛も恋もいつかは萎む夢想花
迷い箸うまい逃げ道考える
真実を言うと言信じて貰えない

尼崎市 山田 耕治

歌う気でいたか最後にマイク持ち
ぜいたくは虫の声聞き本を読む
社長さん笑ったあとは気むずかし
何しても大層な人が風邪を引き
酒飲みの父を残して飯がすみ

尼崎市 松下 比呂志

菊香る人恋う秋の風流る
クラス会遊び仲間の顔揃う
酒も煙草もみな先輩に教えられ
まだちよつと華やく心持つている
明日あると思えば眠り深くなる

尼崎市 田辺 鹿太

体形の崩れを妻と笑い合う
難敵は老いだと悟る坂の道
悲しみを消化する胃を持つている
自分史の処どころで鳴る太鼓
お若いと言われるたびに胸を張る

尼崎市 軸丸 勝巳

予知もなく揺れ阪神も中越も
思い出し余震の画面辛く見る
お天道さま雪は止めてよ被災の地
たこ焼の熱さを口で踊らせる
ケイタイの歩きながらもやがて罰

尼崎市 林 昭三

鳥は街に和尚さん今アルバイト
二坪の貸し農園の作業表
魚心 水心との出会いから
観客を気にせぬ猿の芸が好き
ばあちゃんの落したお金よく転ぶ

伊丹市 山崎 君子

ライトアップお城も除夜の鐘さいて
だるまの目二つにしたい今年こそ
美人だな友の横顔今さらに
手紙の返事ファックスでくる夜の雨
夢で逢う手紙残して征った人

川西市 米原 雪子

生きることを教えてくれた優太ちゃん
恐い夢夢と知りつつ覚められず
驚かすつもりで行けば友は留守
健康法長生き競う同い歳
お遍路の出会い信仰深め合い

川西市 西内 朋月

値切らずに全額払う葬儀代
御布施料十年前と同じ額
さつさつととする事はして飲みによく
みぞれ降る夜も休まずに屋台酒
若いはずが豊の縁に蹴つまずき

三田市 北野 哲男

赤青黄白黒茶色豆が好き

凜に河豚がかわゆく見えてくる

一DK一人の部屋へ一人発つ

営業の笑顔のままの遺影だな

美女同士組ませば仕事捗らず

三田市 久保田 千代

前向きに生き抜く朝の紅をひく

突き放すのも抱き締めるのも愛だ

ボケ役に徹し修羅場は見ないふり

支えたり支えられたりして夫婦

許されて初めて知った自分の非

西宮市 西口 いわゑ

痛かったあの一言が宝なり

一行詩自分にあてた手紙なり

あの嘘を亡母は信じたのだらうか

五色豆はんなり競うにも似たり

胸の内開けてはならぬ箱がある

西宮市 門谷 たず子

漢方薬を毎日飲んでるいのち

いつまでを生きるしまい湯落しつ

母と娘の心はひとつ募洗う

やさしさがにじむ嫁からくるメール

顔上げて歩こう老いを遠ざけて

西宮市 山本 義子

お炬燵でうれしい噂聞くみかん

初めから二次会までを組んである

源氏読む歳にはとしの味がある

丸うなるう芯にかたくな残すまま

坂の上の教会いつも花がある

西宮市 牧 渕 富喜子

言ういわぬ摩擦熱あり生きてる

生き下手も文殊の知恵で支え友

余震まだひやひや感ほ治らない

日々草すつかり小さくなつて秋

ブッシュ勝つ野口英世の釣りがくる

西宮市 亀岡 哲子

子に譲りカタカナの名の店となる

ケイタイが届かぬ深い深い森

揺れないと信じて泊る三十階

百五歳とて年賀失礼いたします

電器屋も大工もこなし妻達者

西宮市 菊池 トミエ

山錦みのりの里は祭笛

絵手紙の里の便りは赤トンボ

電話より手紙がうれしい友の顔

好物のみかんが届く手紙添え

菊人形新選組の雄姿あり

西宮市 坪井孝一

真心には真心返る人の道

ネクタイを弛めると出る好い意見

ロボットには到底無理な思い遣り

絶対に第九指揮する望み持つ

お父さん近頃ちよつと派手を着る

西宮市 秋元てる

母子草あるかなきかの風に揺れ

時が少し後戻りしたよな故郷

居所を知らせぬ旧友の古手紙

不平不満屋台に置いて父帰る

よくしゃべるロボットよりも犬がいい

西宮市 井上松煙

信長もお大師さんに縋つてる

陽だまりで花の手入れに死を忘れ

ライバルに勝てそうなのは寿命だけ

なんやかや用事作っている余生

借り返すつもりないから呆けたふり

西宮市 緒方美津子

冠雪の北山杉の神神し

家族の輪しつかり繋ぐ雪囲い

真夜中のひらめき朝は残骸に

指折って亡き人想う年の暮れ

クラス会つい比べてる髪の毛

姫路市 古川奮水

たそがれの暖簾に頭入れて飲む

荷を背負う後姿が祖母に似る

十六夜の月台風が食い荒らす

改札は菊見に向かう朝の靴

同類の輪が出来弾む文化の日

兵庫県 大谷幸次郎

工事場でトロッコの頃ふと思う

台風が突つた秋を搔つ攫う

引つ張つて叩き伸ばして顔洗う

年金に生きているかと触られる

実るもの風に攫われ熊飢える

奈良市 米田恭昌

ええ格好しいとかく男は背伸びする

御民われ健気に歌っていた悪夢

お説教しかしとフォロー温かい

生駒山麓ここは栢山かも知れぬ

温泉もどきの風呂ならここ生駒にも

奈良市 天正千梢

つぶされた原因嫉妬とは知らず

霧を脱ぐ安達太良山の空ふかし

蛾がひとつ真白き壁にしみとなり

メール持ち二十一世紀の孤独

一人旅これが最後と言いつづけ

檀原市 居谷 真理子

秋の野にあなたと見たいものばかり
内風呂を持たない頃のオリオン座
風邪ひいた夫婦が違う医者に行く
こんな嘘つかせた人に針千本
日本語の海から紡ぐ一行詩

大和郡山市 坊農柳 弘

引き際の美学男の下駄の音
耐え抜いた胃の腑へぼとり酒の音
もう少し時間が欲しい三面鏡
ひよっとしたらひよっとしまっせ初日の出
よく笑う笑い袋にある疲れ

香芝市 大内朝子

アングルががらりと変わるお正月
いい予感新たな年の白い地図
まるい絵がだんだんうまくなつてくる
わかるかなあ女ひとりの酒の味
神さまの試練ことしも耐えまっせ

生駒市 飛永 ぶりこ

酉年の鶏冠の赤に願う吉
万葉の調べ木霊す香具山に
穏やかな笑みとは別の仮面あり
飼い主に似てもりもりと食べる犬
無意識の奥に意表をつく言葉

奈良県 渡辺 富子

友の訃へ悄悄と泣く秋の風
冬眠する予定の男と食べ歩き
宣伝効果膨大でしたライブドア
のびきった男とうどんずする昼
ゆったりと紅葉に染まる老いふたり

和歌山県 中後 清史

こつこつと築いた父母の温い塔
どん底に堕ちると神の掌に縋る
因習の殻はたやすく破れない
迷ったら初心に還る道しるべ
終章は神のお膝に辿り着く

和歌山市 桜井 千秀

縮んだり伸びたり影が従いて来る
新年が来るたびわたし古くなる
清水の舞台も飛んだ若かつた
ページの隅に足滑らせた跡がある
褒めるだけ褒めてさよならしておこう

和歌山市 牛尾 緑良

占いの吉を信じるお元日
イラク新潟お元日させてもらいます
笑い皺このまま行こう師走まで
喜と楽を揃えて届く年賀状
惚けていることにして聞く本音かな

和歌山市 福本英子

サイズばらばら記念切手の不幸せ
見え見えのお世辞へ利かす唐辛子
狂い咲く夜来香に酔う夜長
生きているだけで儲けと他人ごとに
残り火を扇ぐ余震に耐えながら

和歌山市 古久保和子

伎芸天のため息お堂ほの暗し
あられもない姿ただいま治療中
腰痛へカチカチ山に針の山

牛井は消えてもみんな生きています
もったいない もったいないが皮下脂肪

和歌山市 木本朱夏

しみじみとひとり小雨の美術館
おむすびがころがる先にある出会い
志半ばで歌う枯すすき
あと五キロ痩せると影が囁いた

風船が割れたら旅に出てみよう

和歌山市 堀畑靖子

バラ色の人生も経てジジとババ
主婦業のスペシャリストと胸をはる
華になるにはちと盛りすぎている
バブル期においしい思いた財布
帰りたい昭和に好きな人がいる

和歌山市 細川稚代

シクラメンつぼみふくらみ新春を待つ
ちっぼけな幸せでいい秋刀魚焼く
生きているだけが儲けという避難
頑張つて僅かばかりの義援金
活断層の真ん中に住むこの不安

和歌山市 楠見章子

反応がスローで喧嘩にもならず
ケータイは持たぬ蒸発したいから
気がつくとき化石の貌をする踵
てにをはをパズルのように置きかえて
ふと夜中夫の寝息確かめに

和歌山市 榎原公子

QアンドA方式で孫の守り
錦秋を総身にまとい風と居る
骨格が頑固に家系継いでいる
磨かれて秋の主役になる小芋
大根と芋で理想的夫婦

和歌山市 田中みね

やめたやめた遺言書くほど財がない
有り余つて貸したお金じゃありません
わが家では百八十万は痛いです
今何処でどうお暮しかとんずらよ
正直な鏡であなた奇麗やて

和歌山市 山口 三千子

考えすぎてまだトンネルを抜け出せず

咳をしただけでギックリ腰になり

年二度の義理が重荷になってくる

背なボンと押してあげるもいる勇氣

氣晴らしにくれたテブ涙なみだそうそう

和歌山市 武本 碧

まず一步踏み出す勇氣明日を呼ぶ

ラブコールいつかセピアの色になり

はつきりとノーと言わぬは罪つくり

善人の仮面外して憩う夜

寄り道で拾った運を飼ひ慣らす

和歌山市 木村 初子

幸せな朝だ雀も庭で鳴く

リハビリの杖に鎮守の守り札

感謝して生きよう今日の幸せを

侘しさや秋の夕陽に散る紅葉

雨音をゆっくり耳に老い一人

和歌山市 宮本 三喜夫

国会は議員さんたち休むとこ

無関心政治を無視は困ります

ビールかけ見苦しいので止めてんか

老舗でも時勢眺めて移転する

虚偽はれて辞任で済ます頑固者

和歌山市 松尾 和香

子供の夢飛ばす風船甲子園

深呼吸こたわり捨てた自然体

火祭りの焼餅楽しクラス会

音痴でもふるさとだけは口ずさむ

癒される法話仏像寺歩き

海南市 三宅 保州

初鶏に催促される初日の出

いつからか同じ長さの夫婦箸

私を添削したい日記帖

頂上も裾野もあつてこそその山

開店の花輪に義理と書いてある

海南市 谷口 義男

数多ある星と宇宙で同居する

我が子にも似るほど手塩掛ける菊

腹の底までも喋らす聞き上手

空いているレジの女は無愛想

ボケ防止日に五十句の自己ノルマ

海南市 堂上 泰女

パソコンに溺れています午前二時

ビタミン剤与えるように子へメール

紅葉が降ってきそうな露天風呂

ボランティア出来ぬ分だけする募金

パソコンが毎日物を売りにくる

鳥取市 春木 圭一郎

乙酉 愛と平和に満たされる

白鳥になるのを見たくアヒル飼う

厚化粧してもカラスは黒やった

鷲と鷹熱い乱パに期待する

君のためただ黙々と鶴を折る

鳥取市 岸本 宏章

真心をあげるとまごころが返る

ストもよしプロ球界に活入れる

老いという未知の荒野へ立ち向かう

過充電しない程度に昼寝する

乗せられて買ったカメラがややこしい

鳥取市 植田 一京

生きのびるために芝居の二つ三つ

振り向いて欲しくて大きな音たてる

諺どおりならぬ浮世を生きてゆく

ぬくもりを戴く句会梯子する

小遣いを孫に渡して株上げる

鳥取市 近藤 佳子

留守電に切りかえ雑誌読んでいる

ふるさとの米を仏とわかち合ひ

草紅葉このまま弥陀に会えそうな

だんまりの夫が夢に来てくれる

おさな顔さがす傘寿のクラス会

鳥取市 山本 益子

おたがいに試す心を潜めてる

落葉焚きそつと投げ込むラブレター

米大統領歯痒いままに再選か

同窓会あの人誰かガキ大将

それぞれの新札の顔喋り出す

鳥取市 富山 檳榔樹

老春の夫婦鴛鴦傘寿越え

懐しい向かいの路地に詩がある

さわやかな小春日の風口マン蔭く

無限への道凸凹を補修する

限界を知った脳波に触れてみる

鳥取市 土橋 はるお

長生きにのろけ心を弾ませる

金婚が人生最中これからだ

貰い物中身どうあれありがとう

飲んでない吹けと言われりや吹きましよう

刀をさして歩く勇氣は誰もない

鳥取市 徳田 ひろこ

若い樹と同じ世界にいる未来

花活けて誰か来てくれそうな気も

胸の窓にはエンゼルがよく止まる

また今日も心の中に魔女聖女

彩りを賑やかに織る暮しぶり

鳥取市 夏目一粹

生きるのに辛いと思う暮れが来た
古希までも生きれるなんて驚いた
年金の金が泣かせる笑わせる
わずかな募金でもとてもいい気持ち
本震が来た後そつとしておいで

鳥取市 武田帆雀

知事室へ召されて行った出世菊
辛口の住職菊が震えてる
バーで飲む解禁一号蟹を割る
なんの苦もない地下道のギター弾き
昼めしを食べたか道の旗振りさん

鳥取市 倉益一瑤

ふるりの風が恋しくなる日暮れ
そろばんが得意で恋に遠くいる
大太鼓ダイナミックに自己主張
転がらぬ石です苔が生えている
沈黙した政治不信に船が揺れ

鳥取市 有沢せつ子

私にも出来る手助け募金箱
芋粥をすすり恩ある人惚ぶ
干し柿が粉を吹き母の忌が巡る
母の忌は形見の服で行く墓参
バス停で問わず語りを聞いている

鳥取市 中村金祥

永遠の愛誓う平和をかみしめる
年賀状切れない糸がついてくる
自己責任つき離されて思い知る
熊だつて食の安全考える
あの人の飾らぬ様に惚れました

鳥取市 美田旋風

悪友は金では買えぬ宝物
肩書きの立派な人が味噌つける
定年後遊びを知らぬ粗大ゴミ
白黒をつけて味方に逃げられる
たっぷりと時間があると油断する

鳥取市 宮脇道子

老い一人みつめてくれる人がいる
老いの向こうに何がある覗きたい
恋人の対話は笑顔楽しそう
落葉道色艶よい葉蹴つてみる
残されて自由を食べて生きている

鳥取市 福田登美

除夜の鐘一打に心清めたく
女ひとり生きる希望の火を点す
限りある命静かに介護する
哀しくて泣けなくなつた日が怖い
今年こそ流れについて走りたい

鳥取市 奥谷彩子

クレヨン画親子でえがく未来絵図
子の未来バラ彩の空染め抜いて
生きざまを親父の背中からぬすむ
にぎりめしほっこり亡母の顔浮かぶ
群にいて雑魚でのんびり生きのびる

鳥取市 杉本孝男

罰ゲームだろうか医者へ月三日
鳩の目の淋しさに遇うヒロシマ忌
ヒロシマのところに学ぶ非核論
折り鶴よ競い平和の空へ舞え
心では泣いて薄情ものの振り

鳥取市 上田俊路

初勝利涙の孫へもらい泣き
婆ちゃんも口紅をさす秋祭り
撫でられて叩かれながら西瓜売れ
プービーも完走をした晴れやかに
賠償は保険払いと割り切られ

鳥取市 林露杖

文化の日筆を洗ってみたものの
台風禍無くても稲は七分作
埒外と休耕田の草紅葉
もう一つ妻に言えないことがある
当てにせぬ長寿いささか持て余し

鳥取市 西村黙光

被災地へまずはお見舞い申します
衣食住悪魔がみんな奪い去り
災害がタイムトンネルくぐらせる
年金で心ばかりの義捐金
親父より台風とても恐ろしい

鳥取市 吉田弘子

ウイルスの運び屋もする渡り鳥
野菜高根の葉に陽が当たる
同情のことばの裏に落とし穴
矢も楯もたまらず飛んで行く一途
滝壺の打たれ上手な丸い石

鳥取市 田中憧子

理由など言えないままに別れた日
皮剥くとはずかしそうに見えるナス
散歩好きが噂の種を拾ってる
視角かえ些細な悩みだと気付く
食べ頃は野鳥が試食してくれる

鳥取市 録沢風花

平和馴れして災害にうろたえる
身辺に持っておきたい鈴と笛
被災地を思えば我慢出来ること
三代代 多彩な朝が動きだす
不揃いのリングも生きるファイトある

鳥取市 平尾 菜美

傷口を装う恋の登竜門

土弄る花が妙でも澁刺と

口下手で鍋まで焦がしそうになる

明日の糧めざすカエルがジャンプする

共生の痛み分け合う茶碗籠

鳥取市 永原 昌 鼓

長寿化へ財布の紐を締め直す

敵味方乱れて的が絞れない

涙腺も酒もからきし弱くなり

計算の好きなお寺で味気ない

当たり前の暮らしこんなになりたい

鳥取市 近藤 春 恵

一日のドラマを閉じて陽が沈む

今日もまた心が沈む記事ばかり

ラブラブの二人に月が嫉妬する

助太刀をしたがガンには勝てなんだ

追風に助太刀されてベダル踏む

鳥取市 太田 幸 枝

裸でもよいから来てとうそばかり

優しさに老いの心もゆれ動く

藁で織るむしろの温み猫が知る

来年の出番待つ西羽づくろい

密閉の車で奇跡優太ちゃん

鳥取市 西川 和子

元旦の朝も忙しい西である

七十年生きて知らない事はかり

災害に負けてはならぬ知恵を織る

輪になって笑えば痛いの忘れ

大風呂敷広げ手柄を振り回す

鳥取市 吉田 孔美子

左頬黒く病む猫がよう食う

新聞を読む膝に猫の肺鳴る

臭く病む猫は刺身のミンチ食う

骨皮の体毛にやさしくブラシ

汚れても臭くても生きてる温み

鳥取市 福西 茶子

仲裁をして重い荷を背負い込む

核心を外してジワリ攻めてくる

寄らば切るそんな顔して野良がくる

手土産を提げて来る客肩が凝る

胸さわぎ誘うカラスの鳴き声だ

鳥取市 田村 邦 昭

一つぐらい秘密もあって人間だ

一つだけ大事と問われ妻と言ひ

ほんやりと平均寿命を生きている

国政のややこしすぎて棄権する

お粗末な謝罪ばかりがうまくなり

鳥取市 山宮愛恵

寝たきりの目線へひとつ水仙花
世の中がさびしい話ばかりする
いらだちは老いのしるしと笑う友
舞子さんの眉をずらしてみたくなる
O型が中心に居て賑やかかい

鳥取市 加藤茶人

貧乏の垢が染み付く朝茶漬け
子を訪ね掃除洗たく金もやり
裏表パンツ二度はく居候
飼い犬が噛むかも知れぬ餌をやり
おいコラと言えば叩かれそうで止め

倉吉市 牧野芳光

私を隠す石垣積んでいる
針金は追いつめられてバネになる
猫よりも丸まって寝るただ一人
紙テープ千切れるように出来ている
隠れんぼ鬼がこっそり泣いている

倉吉市 野口節子

向かい風たつぷり受けて遅しい
有り余る愛が育てたもやしつ子
人事課に一寸いびつな色眼鏡
ネクタイを締めると不思議 様になる
老婆心涙の訳を聞きたがる

倉吉市 最上和枝

惜別の想い断ち切る潔め塩
潮時は惜しまれるうち線を引く
またしても庭で小鳥の弁論会
味見して予定以外の土産買う
惜敗の中日拍手惜しまない

倉吉市 米田幸子

溺れそう藁一本にしがみつく
ぎりぎり駆込み寺にすべり込む
何時までも元気でいると邪魔になる
濃い化粧したら何処かに出なくなる
迷うて迷うて袋小路に追い込まれ

倉吉市 山本玲子

老眼鏡見えてしまった顔の皺
秋まつりたつぷり食べた母の味
腹八分残りの二分は健康法
家中を開けっぱなしで秋日和
味しめて猫定刻にやってくる

倉吉市 松本よしえ

なるべくは癩癩玉にさわらない
笛吹いて呼んでも飴帰らない
草笛も知らず学力低下とか
心ない噂あちこち飛び火する
千代紙の衣装花嫁お人形

倉吉市 淡路 ゆり子

年金で蟹一パイのひとりじめ
色づいた隣の柿がそそのかす
起き抜けの夫の小言にうんざりす
築五年改造続く手抜き工事
金ピカのお色直しもはや破綻

倉吉市 山中 康子

被災地へ鳥取地震だぶらせる
川柳に惚れて笑って心中か
いち早く機転利かした人助け
パンジーを植えてほんわか春を待つ
新米も意中の女もいい香り

倉吉市 猪川 由美子

この年齢で自分曲げるは難しい
女老い鏡だんだん見なくなり
デキちゃったで女は妻の座を狙う
正義漢ミスを許せず拳上げ
スポーツ選手は年上女房好きらしい

米子市 政岡 日枝子

野菜室がらがら冷蔵庫寒い
満月に顔上げられぬ怠け癖
縦糸の私が織りむらを作る
未完の絵の声が私には届く
あわてずに織ってく終の日の衣

米子市 林 瑞枝

にんげんのポケットにまで来た政治
瞳の奥に祭りがあって巫女が舞う
栈橋の背なはわたしの余白かも
三百年は経た湧き水を城で飲む
饒舌な並木に新春のお芽出度う

米子市 青戸 田鶴

丁寧を作る我が家の夕御飯
根っ子には亡母の惣菜受けついで
赤い横縞地震雲だったと気付く
感謝する心育ってゆく災害
怠けものの猫と月夜の庭にいる

米子市 澤田 千春

何事も響き合ってる家族だな
夕映えがやさしさたんとくれました
立ち読みで迷い道からぬけ出した
枕の下の水の流れを聞いている
輪の中で安心できぬ世の中だ

米子市 中井 ゆき

天地人 天はやつぱりえらいのか
念ずれば通じるそうな手を合わす
サンセットさび色家並妻籠宿
吹きぬける風に何かをさらわれる
地図のない国に向かって旅仕度

米子市 野坂 なみ

パスポート素敵なチャンス持つてくる
吹きさらしの電柱いつもご苦労さん

骨折り損 一向溶けぬわだかまり

島紬の織機になつて暮れてゆく

幸せになつて丸書く稽古せぬ

米子市 木村 富美子

良心のまま矢印を出して生き

吹き荒れる風やり過ごす事おほえ

千三つというほら吹きが憎めない

たつぷりとカレーを盛っているひとり

クラス会十指の中に生き残る

米子市 木村 春枝

心の駅探し日毎の旅日記

眼から鱗言葉一つで甦る

唾み合いどうせゆく途知れてるに

台風に地震 日本にのこる疵

茶の間まで感動くれたレスキュー隊

米子市 白根 ふみ

風下から近づいてゆく菊花展

紅葉が映える障子を張り替えて

美しい名よりきれいな山茶花が

つるし柿北を好んで凜と垂れ

日溜りを感じる秋蝶がじつとする

米子市 光井 玲子

当つてくだけでそれから考えよう

もう無理はするなと亡母の声がある

迷い道駅の灯りに縋りつく

慌て者だなど見ている信号機

人波を泳ぐ都会によう住まぬ

米子市 永井 三津子

思い切り母も泣きたい時がある

強盗が村議だなんて何だろね

わたくしが私の心持て余す

白蟻がたとと住んでる官の城

ささやかなヘソクリでかい夢を描く

米子市 門脇 晶子

新米を拝む感じで食べている

笑うまでもりガラスを拭いておく

枕の下に昔話を感じます

今日もまた元気を出そう顔あらう

台風で私に合った帽子買う

米子市 本吉 宗光

モジャ頭小泉首相何想う

大地震見舞募金を僅かだが

岡田はん四位のトラでオフにする

東北の新球団にある期待

冥土では妻待つてるか十四年

台風の爪跡旅の目に痛い

過疎すすみ草むして行く無人駅

久しぶり城崎通過汽車の旅

掌を返した顔も涼しそう

大声を出して笑ってウツを斬る

鳥取県 西原 艶子

台風よ悪い奴等を吹き飛ばせ

中年のおばさん天下無敵なり

お互いの臭い届かぬいい間合い

年輪の中心あれは木のお臍

平均寿命目指してソフトランディング

鳥取県 新家 完司

精一杯の親切黙っていてくれる

諺で丸めこまれて妥協する

まだ未熟いつも一拍ずつずれる

目はテレビ見ても心は見えていない

ホラ少し吹いて私を売っておく

鳥取県 石谷 美恵子

鶏に負けず元気にお早うと

芽を出すか堆肥と化すか濡れ落葉

被災地にコスモス咲いてサクラ待つ

総理さえベットのようになんを付け

婆ちゃんは織るが如くに言葉継ぐ

鳥取県 谷口 次男

歳月を呼び起したな震度七

明暗を分けた港に辿り着く

復興をめざし未来の花咲かせ

美しく老いる言葉を聞いておく

平凡に生きて来ました古希の膳

鳥取県 土橋 睦子

栗ごはん亡母の笑顔を想い出す

貯める気を失くしてしまいう低金利

歩くのはまだまだ人に負けません

医者通い長生きに金かかりすぎ

冥土行く往復切符あれば買う

鳥取県 村上 信子

県庁のビルに餅搗き餅する

餅搗きの音とヨイシヨが人を呼ぶ

被災地の回復待たず冬至なり

玉葱の苗が無いぞと威される

松葉蟹雄だけでかい顔をする

鳥取県 竹信 照彦

出かける時バカになる水ちよつと呑む

無謀な旅するなと孫に言いきかす

あの夢が形になるまで生きたいな

大山に雪望みあらたな暦繰る

災害もいくさもない世祈る新春

鳥取県 佐伯 やえ

鳥取県 山本 正光

被災者に何とかせねば雪が降る

何時までも仲良くいよう老いるまで

順調な老化と思うもの忘れ

生きたいと朝の薬を欠かさない

税務署はお茶が出そうでないところ

鳥取県 國 森 武子

川柳を作らない日は落ちつかぬ

下手でよい真面目にやろうのろのろと

地虫には地虫の生き方あるはずだ

天命と思いまじめにうけとろう

私の歴史私が作り生きてゆく

鳥取県 蔵 本 悦子

欲しいからみんなお金でもめている

核に拉致神や仏も許すまい

便利さは太るが知恵が痩せてくる

正面で向き合う愛に嘘はない

コスモスが風と向き合う秋日和

鳥取県 澤 裕 子

家計簿がセーフアウトをくり返す

ひとりの夜風の音にも身構える

小春日に心の鍵もゆるみだす

株分けが縁で仲間がふえていく

逆らった後で虚しくなってくる

鳥取県 小谷 はるみ

まな板と包丁母の楽器です

パトロンのパパがリストラされていた

流せない涙のダムに溺れそう

簡単に愛が壊れて行く時世

雑踏の中へ私を消しに行く

鳥取県 盛 田 夢 路

邪気のない孫の笑顔は宝です

茶柱に今日の雲行き問うて見る

拾った犬が亭主面して前歩く

朝昼晩デザートにしてくすり飲む

一直線むかし気質の夫と生き

鳥取県 下 田 茂 登 子

行く先は告げずに老母は旅立った

オレオレの電話に乗って下車出来ず

石橋を叩いて渡る古希の坂

待合室で逢えなくなったあの人と

ゴシップになるほど金を掴みたい

鳥取県 鳥 羽 直 市

熨斗袋派手で中身が照れている

ぜい沢を袋に詰めて増やすごみ

生き抜いたドラマを抱いて今日暮れる

老いてなおテェブ切る夢捨てられぬ

ありがとよ言える夫婦にまだなれぬ

鳥取県 山下節子

難しい話のようだ人払い
運勢を変えるほくろをつけてみる
ゴシップの火種を抱えデートする
あの人の癖はしつかり覚えてる
返答は指でつくった丸一つ

鳥取県 深田俱久

来年に続くぬくもり年賀書く
携帯を持たぬ肩身の狭い午後
椅子取りの秘訣は誰も教えない
フルムーンの旅五体は工事中
天国へ続く道よと導かれ

松江市 三島淞丘

脅しには乗らぬが情けには弱い
あらためて吾が郷に会う郷土館
ゲジゲジ眉だけが私の存在感
検診のたびに短くなる背丈
バックオーライ信じた僕が馬鹿だった

松江市 銭山昌枝

即答を避けても出口見つからぬ
幸せの隙間に疼くものがある
欠点を補い合って来た阿吽
老朽の橋に譲れぬものがある
主に似て覚えの悪い犬を飼う

松江市 小川注湖

屋台には口で駒指す八十路顔
新婚さん未知いっぱいの台所
村祭り賑やかさ去り過疎の顔
垣根越し花壇を褒めて種貰う
見上げればまだ半ばかな坂に立つ

松江市 安食友子

サイレンも事の起こりで揺らいでる
枯れ芝を情けごかしの風なぶる
台風に好かれるなんてこてんぱん
幻影の二重瞼も愁いがち
グッバイは目と目を交すのがルール

松江市 川本 畔

湖の色今朝は無口になっている
一つだけ気がかりがあり秋深む
シクラメン燃えて決意をしたらしい
傘一本黙って借りることにする
旅の連れ降りて独りのガランドウ

松江市 松本知恵子

台風が去って菊の香競い出す
枯れてなおドライフラワー主張する
少しだけ余力残してする介護
枯れ出した庭が掛け軸替えさせる
じわじわと五感に染みる岩清水

松江市 佐野木 みえ

狂い咲くつつじにそつと聞いてみる

清張の世界今宵も引きこまれ

奥出雲歩けば温い足の裏

奥出雲山の紅葉画きとめる

干柿の皮むく子等の顔浮かべ

出雲市 園山 多賀子

お人好しの柘榴が腹を割っている

人間がイルカの群れに撞れる

消しゴムを忘れた時は誤字多し

生き残りゲーム体操しています

無防備の視野に野地蔵おわします

出雲市 吉岡 きみえ

素朴です母の煮メの結び昆布

わたくしがいちばん好きなかっぱう着

物言いはつたたくなくて負けておく

母さんが探すとみつかるコンタクト

八十歳身体が横になりたがる

出雲市 石倉 芙佐子

御元日神様みんなお揃いで

なでてこつつん時々なさる家の神

神様に少うしおまけをしてもらう

水の神火の神様に手を合わせ

今年こそ嫌われぬよう笑いましょ

出雲市 岸 桂子

山ひとつ越えて私が甦る

少子化にどこ吹く風と猫社会

沈丁花もの言わずして呼び止める

レンズ越し人も景色も美しい

たらの芽も命コロリともぎとられ

出雲市 久谷 まこと

年寄りをいたわりすぎてひがんでる

私にも出来る温もりある笑顔

裏表ないから人が寄ってくる

食欲をおさえ泣き出す腹の虫

留守番も一人味わう酒がある

出雲市 伊藤 玲子

千両の雪に見栄切る赤い実よ

ふる里の神に素顔を見せておく

しがらみは神に預けて屠蘇を酌む

趣味悠悠人間でいるお正月

お笑いと歌懐しむお正月

出雲市 城 多喜

そよ風が心の髪を通り抜け

優しくはないぞ私を叩く風

むかい風どんと私に挑む気だ

諦めの根っ子掠ってくれた風

倒れたら風の所為だと言っておく

出雲市 小玉 満江

ほろ酔うて出雲良いとこ旨い酒
災害へ園児も募金箱を持ち
満たされて祈りの岡に陽は沈む
虎の子の一万円に羽根が生え
おしゃべりがいつまで続く山の宿

出雲市 富田 蘭水

喜寿さかい生き方しかと変えてみる
いらだちは止めようせめて妻の前
幼稚園孫のお話生きかえる
直されぬ生れながらのこの性分
無常の身知つたら半分楽になる

出雲市 岡 あきら

今日誕生日でしたねと夕食後
先ず相手讀え戦の幕を引く
被災者に悪いがそつと栓ひねる
手の届くところはあわれ吊し柿
長芋よごめん先まで掘れません

出雲市 佐藤 治代

愚痴をさくあなたはいつも笑うだけ
尾骶骨打つても医者に見せられず
賑やかな喧嘩のあとの無言劇
損をした事はしゃべらず飯を食う
姉さんの好きなた餅提げてゆく

出雲市 青山 久子

あれからはひとりて川をブッカブカ
虫だつてまあるくなつて死んだふり
わたくしの心の闇を見るこけし
この辺で休みましようよ古時計
被災地の雨が心につきささる

出雲市 小白金 房子

神殿の扉が開く感謝祭(十二月十五日)
酒とろりとろりやさしい老母の味
降る窓辺温い手紙を読み返す
搾乳へ牛と対話の夜を稼ぐ
朝星夜星拝む牛舎の窓灯り

出雲市 多久和 敬子

真つすぐに生きて背中丸くなり
どうしても真似の出来ない母の味
息抜きがじょうずになつて跳んでいる
譲る者居なく明日も主婦で居る
名水を飲んでも解けぬわだかまり

出雲市 小豆澤 歌子

三世代違うレベルで踊つてる
黄昏の耳にやさしいセレナーデ
私の歩幅知つてるローヒール
哀しくて時どき見せる力瘤
何時の間にきれいに咲いたこぼれ種

雲南市 榎原秀子

今日からは雲南市ですという合併
表札を書き替え小さい背を伸ばす
子には子のわたしは私あるくらし
紅葉が見たい元気を出そうかな
先生の笑顔を拝む診察日

雲南市 毛利幸

ときめいて文字が乱れて笑い出す
どうしても美声の方に耳が向く
昨今は悪が溢れて零れ出す
行きずりの他人と酷似で苦笑い
霜柱踏んで大地を確かめる

島根県 森茂美

鎌を研ぐ手元に秋が忍び寄る
お山から鴉とともに秋が来た
公園の句碑を訥訥読んでいる
菊の香にうもれて過す小半日
ちびちびと命惜しんで飲んでいる

島根県 多々納テル子

清潔に老いたい朝の身繕い
年金にありがとうねと今日も留守
鈴振って朝の礼拝神を呼ぶ
張り替えてプラスの風を浴びている
今年また定期検査で丈縮む

島根県 持田多輝子

みまかりシクラスメートを偲ぶ秋
中傷は柳に風と受け流す
カタカナの新語に老いの曲り角
長らえて年金同士冬籠り
嫁として丸く生きてる仕舞風呂

島根県 伊藤寿美

立ち止まると倒れてしまふから歩く
沢山の無駄を重ねて生きてきた
花火のような手紙わたしを眠らせぬ
手伝ってもらいよけいに草臥れる
カーナビの知らぬ抜け道通る故郷

岡山市 井上柳五郎

余生幾許まだ捨てきれぬ欲と夢
お揃いで夫婦出掛ける健診に
不安持つ結果気になるレントゲン
災害が忘れぬうちに来た今年
日本一の身売り話に仰天す

倉敷市 井上富子

天下国家を論じて唾の飛ぶ炬燵
不整脈赤信号になるハート
結婚も離婚も人の道の駅
この胸を土足で通過した男
落ち武者もプライド一つ握りしめ

倉敷市 小野 克枝

新年という名の始発駅で待つ
一枚の葉書で伸びる母の腰
反対へ走り出したら虹が見え
新旧の和に変わりなし屋台骨
影武者となつて手応え待っている

岡山県 小林 妻子

風無情将棋倒しの父の山
暮れ泥む喪中ハガキに立ちどまる
新潟のニュース解決策がない
消エネヘスイツチオフも忘れない
温暖化地球も疲れきっている

岡山県 福嶋 智恵子

百歳の手織りの小袖母達者
冬ソナで忘れかけてた灯をともし
君の名を冬ソナが来てうすれさせ
師走でもいつもの如く無人駅
師走にも長閑に走る一両車

岡山県 国米 きくゑ

ひたむきに太陽に向く花になる
妻の掌の上で転んでいる平和
秋の月影を慕いて口ずさむ
面影に老いの埋もれ火燃えてくる
散り急ぐ今日一日の紅芙蓉

岡山県 福原 悦子

たとえばを聴く意外にも本音かも
やさしさに触れて心の窓開く
土に返す裏切らぬ汗の数
天と地のはざまに挽歌ゆれている
神様の一病にある小休止

岡山県 大石 あすなろ

炊飯器ときどき予約間違える
恰好いい女目指して若くいる
未知数の明日があるから生きられる
なんとなくヒントを貰う無駄話
句読点自己責任で打つつもり

岡山県 山本 玉恵

笑うては泣いては女生きのびて
うたかたの想いにゆれるイヤリング
思い切り泣きたい夜の風の音
女心お見通しかやお月様
おいでんせいとあの娘が呼んだ月の道

広島市 森田 文

折った泣いた忘れないわよ優太くん
一月の雲は黙して忌は巡る
即答はできないのです えのぐ名
拘りも過ぎるとあとへ続かない
十三夜栗名月で栗こはん

竹原市 森井菁居

身内自慢は禁句でそれから威張らない
いさかいを避けて真つ赤に夕焼ける
交際は極秘にすすめつつがなし
敵は近く自滅するので放っておく
依頼心大敵己を信すべし

竹原市 石原淑子

金色の初日信じる二〇〇五年
新年の平和を祈願松翠
オレ流を支える妻の剛い愛
半額の惣菜のせた皿の鬱
自分史の最期に繋ぐ今日明日

竹原市 正畑半覚

大空を愛して羽が生えてくる
人のため世のため使う知恵袋
愛されています人間信じます
一人七役妻は神様だと思ふ
小さいが竹の都という誇り

竹原市 時広一路

負けてたまるか打たれ強さを自認する
二メートル眼鏡外した方が見え
虫歯では無いのに冷たい水がしむ
漢字よりあかタカナが難かしい
鍵が要るなんて人間だけだよな

竹原市 岩本笑子

それなりの覚悟か一つ歳をとり
窓枠のまんまに秋が暮れてゆく
台風のすき間に虹が二度三度
鍋物の予定へ野菜高すぎる
翼千すストレスを干す十二月

広島県 藤解静風

価値観の違う眼鏡を持つ夫婦
神さまも時には敵に味方する
日本が試されているサマワの地
震度7神の試練が厳しすぎ
言い訳はしない黙って笑つとく

広島県 福島万年

二人旅我亡きあとを思う旅
地に落ちて花びらは見る白い雲
七十四まーだ洩たれ小僧なり
友の訃に俺は未だだと思つて
七十四陰の白髪は数えない

宇部市 平田実男

鶏と一緒に起きる篤農家
お茶に水やがて空気を買う時代
重宝にされるが右腕にはなれず
百均で高い買い物して帰る
裸一貫僕には捨てる物がな

美祿市 安平次 弘道

バラ咲いた景色女は忘れない
点と線結べば時はすでに過ぎ
追究をすれば古傷疼き出し
一匹の鬼に言い訳叱られる
パズルまだ解けず結論あすにする

熊本市 永田俊子

白鳥と夢買いに翔つ春の空
初空へ風を上げてるパパの夢
影法師とどこへ行くかお天気だ
つまずくなゆつくり歩くと昼の月
忘れもの届けきれいな花を買う

唐津市 井上勝視

三日坊主繰り返しつつ八十路越え
余白こそ我が人生の総仕上げ
死語ばかり増えて昔を懐しむ
無添加の老いに頑固の錆が浮く
八十路越え頑固の気持ち解りかけ

唐津市 坂本蜂朗

ご苦労様皇后様の白い髪
腹が出て髪がだんだん瘠せてきた
業務用の笑み稽古する洗面所
飽きのこぬほどにふくれる妻の技
一二合飲めば出来ませすVサイン

唐津市 樋口輝夫

猿に夢食われてからの高枕
種切れもせずに女房の長電話
懲りもせず育毛剤を試す父
もう一軒つい後輩に見栄を張り
太文字で思わせぶりの日課表

唐津市 久保正剣

てきばきとナース手順を誤らず
主治医からの散歩を犬に守られる
ノッポビル増えてモラルが消えた街
店頭の梨もリンゴも化粧好き
くらげゆらゆら越前沖の無法者

唐津市 山口高明

拝観の正倉院は人の波
炒飯で良いかとおんな嬉しそう
愛子さまの見られた絵本良く売れる
寡婦ひとり生きる手立ての酒を注ぐ
近く居る他人が心配してくれる

唐津市 宗水笑

地震台風手加減しないから困る
被災者の強さ自分を省みる
コスモスを折らない風の思いやり
神主の柏手さすがよく響く
念入りに診られもしやのレントゲン

唐津市 市丸晴翠

幸せな旅になりそう富士仰ぐ
箸だけは忘れず入れる旅靴
惨状についゼロ増やす義援金
避難所の堪忍袋辛かろう
夜勤明け居眠り運転高くつき

熊本県 高野宵草

便利さの追求地球蝕んで
影長く今日満ち足りた畑に佇つ
めでたさは半分禁酒中の屠蘇
指先の老いを嘆いて障子貼る
夜のテレビ消したら淋し老い二人

熊本県 岩切康子

稚児たちが華を添えてる村まつり
別腹という美味しさが面白い
ライバルのプライド護り下手に出
世話役は客の健康祈り待つ
食べ切れぬほどのサービス問題ね

東かがわ市 神保坊太郎

ゆつくりと石が目覚める除幕式
温泉を名のる色つき井戸の水
化けたもの中には居るぞ貧乏神
地割れした顔をただ今工事中
勘ちがいするなよ俺は面食い屋

東かがわ市 池内かおり

口八丁手元が留守になつてます
電卓に勝るソロバン艶が出る
杖持てばまだまだ悪と闘える
通行料払うと広い日本地図
髭を剃る百面相がまだ出来る

東かがわ市 川崎ひかり

苦労した過去は語らぬ丸い石
会いに行く老母には苦労聞かせない
優しさをそえて差し出す介護の手
峠こえ春は息子に嫁が来る
結び目を少しゆるめて冬ごもり

東かがわ市 原賢

見ぬふりをしてから鬱がたまりだす
有頂天になると躓く石もある
余生にもまだ前向きな夢がある
自己主張ばかりで話まとまらず
ひと休みさせよとイエローカード出る

東かがわ市 清川玲子

胸に火を抱いて耐えてる休火山
火山灰ふるふるさとの母思ふ
賑わった浜にも秋の波寄せる
秋夜長本は人並み積んである
留守にして夫より猫気にかか

東かがわ市 伊勢 八重子

青天の霹靂地球に降りかかり
親が打つ釘一本も無駄がない
肝心な事は笑ってごまかされ
皆同じ胸に悩みを抱いている
元氣かに力をもらう子の電話

松山市 宮尾 みのり

真つ当に生きると試練降りかかる
若い日の冴えた五感を持て余す
声出して読めば日本語美しい
マジシャンのように消えたい時がある
燃えるものあつて微かな風探す

松山市 丹下 美津子

縁あつてなにわ男に京美人
ハネムーンGパンで行く気軽さよ
仕合せがふくらむ孫の一通話
萩桔梗トンボを友に秋遍路
もう一泊きめた城崎お湯の街

松山市 高橋 宏臣

無我夢中手のひらの歩を忘れたり
幸せの形で欠伸移し合う
錆び付いたわたしのネジは緩まない
迷つて言葉を笑みで埋め合わせ
抜け道を知つてひとり安堵する

松山市 古手川 光

人生をご破算にする大地震
ロボットのような中間管理職
秒針に逆らうように水車小屋
異常なし言われて医者を替えてみる
国民の血圧上げる保険庁

愛媛県 中居 善信

貧弱な知識で政治言うたとして
鷹足袋に法被おとこの血が騒ぐ
ポリシーを持たず集まるパチンコ屋
辛口のご意見などとマイクくる
追い風に乗つておとこは飛びたがる

高知県 小川 てるみ

痛いところ出来て夫が悄気ている
下心ないから怖いものがない
負けまいと背伸びしている影法師
姿見で今日の仮面を選っている
サイコロの転んだ先の運不運

高知県 北川 竹萌

退屈はしない身に合う事をして
死にたいと思うことなく九十二か
平道も石ころ除けて汝の杖
散歩道趣向が湧いて腰かける
誠実一路名誉会員メダルくる

(赤川菊野さんの句は58頁に掲載しています)

新連載

川柳塔の川柳讃歌

木津川 計

「空は青いとか、水が冷たい、とか。そういう当り前を、ときどきは、きちんと感じておかないと、人間は枯れてしまふと思うんですよ」

歌舞伎界で一番忙しかった市川猿之助がJ R東海のキャンペーン「日本を休もう」に寄せたコメントである。枯れないために青空を眺める。だから次の句が詠まれた。

青空は葉のように効いてくる

夏目 一 粋

薬効としての青空ではあるが、空自体は超然である。人間世界の修羅と無縁に空は青く澄んでいる。

癌告知空青く澄み青く澄み

福島 万年

随筆家で俳人だった江国滋は、内視鏡検査の結果、医師から「高見順です」と告げられた。江国もまた食道癌で逝ったのだが、「如

何なる星の下に」の作家が激しく動揺したように、江国も一緒に「短日や『発癌』の電話かけどほし」と慌てた。万年さんとして衝撃を受けた筈だ。そんな心揺らぐときは青空を眺めるに如かず。自らの重大事が、ちいさなちいさなことに思え、気持が安らぐ。「空は晴れて空は青くてこともなし」(渡辺和尾)と詠まれたように。

死にたいと言つてて医者替えてはる

水谷 正子

すべての欲望を棄ててなお捨てきれぬもの、それが(へ生)なのであろう。やはり、

生きたいから死にたいなぞと口走る

猪川 由美子

死にたい死にたいと言う人が実際死ぬことは少いようだ。仮に、逝ったとしても本懐を遂げたのである。悲しみの度合いは、生きたい生きたいと言つてた人の死よりは小さい。

生まれたときはよるこばせ、死んだときは

悲しませる。それが人間の定めであれば、生

に執着した方が人をしてどれほど悲しみの淵に沈ませようか。死に甲斐とは、あるいは

そんな終末をいうのではないだろうか。

海苔を歯につけ悪口よく喋り

小池 しげお

海苔を歯につけた人物こそ、悪口をよく喋って似つかわしいのである。バリバリ喋り、ガハハと笑う、そんな人物が身をつくらう美学をどうして持ち合わせていようか。

笑えない理由は前歯治療中

大川 桃花

歯の抜けた口、あるいは一見治療中の歯ではひと前で笑えない。歯は噛むためだけにあ

るのではない。

笑うための歯を美しく手入れする

榎本 舞夢

「誰が為に鐘は鳴る」のではない、歯が為に金は入り、歯がために笑いはあるのだ。海苔のついた歯を論外とし、明眸皓歯をよしとしてきた私たちである。

あとは手入れした美しい歯で何を笑うか、であろう。すると文句の一つも言いたくなるではないか。

ユーモアを知らぬカルテと納税書

久保 正 剣

深刻な症状は別として、軽症のカルテからはドクターの口笛と患者の鼻唄が聞こえてくるようであつてほしい。まして納税書の本で鼻をくっつけた文面は何だ。ユーモアの宅配に心を砕く、そんな事務署にはならないものか。

自選集

橋 高 薫 風

元旦や中国大陸地図黄色

お雑煮へキティーちゃんの縫いぐるみ

初春三日この言やよしノーサイド(長居球技場)

薫風と薫談合初曆

淀屋橋から難波まで恋の点と線

八十田 洞 庵

長生きをせよとは老残知らぬ人

口裏を合わそう鬼が耳を寄せ

カタカナ語未消化のまま総入歯

雑談にピンと走ったテレパシー

人生はドラマ私はジジの役

兩 川 洋 々

罪一つ消そう讚美歌口ずさむ

添い寝して鬼に手枕してやろう

不発弾 女が抱くとキナ臭い

支援米送ると拉致を返すかい

年寄りには死ねと言うのか年金よ

阿 萬 萬 的

いたわり合いまあまああと言う夫婦

勇み足妻の皮肉な目に出会う

伸び切ったゴム紐に似た昨日今日

積み上げて崩して子等にうとまれる

あつけらかん火傷はしないおつき合い

石 川 侃 流 洞

ほどほどに飲めとほどほどの位

糠漬けに元気を貰う朝の膳

功労賞御先祖様へ先ずお礼(山口県知事賞受賞)

高所恐怖だから天国遠慮する

オレオレ被害よくぞ年寄貯めている

板 尾 岳 人

降る雪や母の声するおめでとう

どうしても母の乳房は忘れない

逢えなくて母に相談してみよう

死ぬときは正月がよい深呼吸

好きですと言った記憶がないリンゴ

奥 田 み つ 子

初明り貴方はいつも側に居る

錦織る楓にもある躁と鬱

人は人、心決めれば銀河澄む

失敗にベールをかけてくれた友

月の光浴びてやさしい目に還る

河井庸佑

他人の気を汲み過ぎ自己を見失う
岐路に立ち真の勇氣を考ふる
善と悪しつかり教え込むわが子
筆の立つ恩師気になる字の乱れ
人に意見できるか自問自答する

川島 諷云児

晩学の焦りを笑う広辞苑
決心がつかず鳥合の衆でいる
車間距離置く付き合いは難しい
肩の力抜いてあしたの策を練る
行くあてもないのに磨く老いの靴

木村 あきら

翔ぶ構え上昇気流待っている
網棚に赤福があり初詣で（伊勢詣で）
獅子舞に今年の夢を賭けてみる
泥水も呑んで男の貌になる
空晴れて一際まぶし讃岐不二

工藤 吟笑

国の危機今忠臣の出番待つ
玉砂利を踏んでいそいそ初詣で
雑草が陽のぬくもりでしゃべり出す
おしゃれた雑草小さい花をつけ
あの人があると空気が暖かい

黒川紫香

聞く耳を持たずに文句ばかり言う
病後まだ足の弱さを感じつつ
介護する女と夜空の月を見る
がんばれと自分の足に言い聞かす
もう少し命が欲しい白寿まで

小西 雄々

木漏れ日に生きるドラマはマイペース
血栓といういたずらに病むベッド
アンテナに噂話が寄ってくる
ゆったりと情念のせた流し雛
別荘へ向かうベンツを覗かれる

小林 由多香

熊さんがみのりの里へ顔を出す
食欲の秋だ食べたい物は食べ
しっかりと顔を洗って出直した
赤ちゃんの仕草家中和ませる
夢の中とばが出ない走れない

斉藤 焔

煎餅汁美味しい店と聞いて来た
羊羹を厚めに切っていい話
白菜の結球力を信じ切る
農高のラガー スクラム組んでV
三味線の撥がだんだん吠えて冬

傘寿半寿全寿と年を積み重ね
六十年日の丸あげたことがない
新年やひそかに期することがあり
イラクでは何人死ねば平和来る
紙風船あれが初恋だったのか

田中正坊

玉置重人

世渡りが下手ではつきり黒と言う
何人も戦友を送ってきた喪服
氏素性自慢のできるものはない
秀才がどん尻にいる順不同
来賓の祝辞が長い菊日和

恒松町紅

鶏鳴に平和を願う歳が明け
みな達者八十路が小さい夢を抱く
故里はいい眺めるものがある
愚夫賢妻そんな噂のいい夫婦
人垣が出来て雰囲気盛りあがる
黒星の無念さはさは髭を剃る
道連れのどの掌も温し遠く来て
天に地に命いただく四季の恩
はるか来てはるかへ続く道讃歌
ラストスパート父が転んだ坂登る

遠山可住

惜しまれて散る武士道を知っている

土橋 螢

太陽がのぼる青空準備中

未来とは手かけず昨日過去にして

蟹食いに来いと港の女から

次の世は鶴になりたい鴉たち

仁部 四郎

古川柳に嬉しい句ありお正月

皇室もお元気なはずお正月

数え年にいい味があるお正月

新聞の社説楽しいお正月

お正月去年を少し忘れよう

野村 太茂津

ふるさとの被災者哀れ哀れ哀れ

余震まだ続く被災の身になって

潰されたわが家離れて見る涙

涙滂沱とペンは震えて進まない

とんで行けない吾が老体の口惜しさよ

波多野 五楽庵

畏くも教育勅語に育てられ

不眠症月の軌道を追いかける

マッチ売り少女も雪も孤独そう

レモン汁入れて男を忘れよう

一月の女と二人雪まみれ

新年を迎え幸せに感謝

台風震災平成十六年の悪夢

勇氣と我慢災害時の決断

教育刷新やつとレールに乗って来た

平成十七年きつといい年を初詣で

煩惱をシツクに包む秋の風

来年の命を信じ舞う落葉

野も山もどんどん炎えて秋がゆく

竹トンボ昔の知恵を孫にかす

なごやかに日々が流れて老い忘れ

水中のサンゴに酔った遊覧船(西表島)

岬までつづく二キロの天の梅(宮古島)

灯台へテップウユリの道しるべ(宮古島)

三線が似合う水牛の町めぐり(西表島)

素晴らしいヤエヤマヤシの登り道(石垣島)

八十路坂遂に來ました元氣です

酒という楽しみがあり八十路坂

畑仕事まだまだ出来る八十路坂

まだ死ねん今日も元氣に八十路坂

八十路坂百まで生きる氣概見せ

藤井明朗

藤村ノ女

芳地狸村

宮口笛生

森下愛論

八木千代

酒断った私カルテに生き残る
弥勒仏見上げ空しさ何だろ
草花が素足にもつれ夏しじま
ほたる火の余熱女の血が疼く
ああ地震ふるえ止まらずお念仏
窓開けて朝の儀式の笛を吹く
笛一管 地平線まで抱いてゆく
笛の音さえも現在過去未来
ひとりで笛鳴りだして月昇る
中天の月よ弱者に吹くがよい



(つづき)

高知県 赤川菊野

私も月もひとりの刻が好き

針箱に母の涙の跡がある

輪をぬけて自分の色をたしかめる

台風と力くらべの自家菜園

逝く日までプラス志向で夢を追う



奥田 みつ子 選

堺市 大久保 伸子

しとやかにおてんば包みこむ暗着

土壇場で流れを変え人がある

物あふれ心貧しい人の群

一言が刃となつて胸をさす

満たされぬ胸埋めゆく白き雲

大夕陽見える丘までウォーキング

高知県 桑名 孝雄

旧任地道後の夜の濡れたオル

好々爺ズラリ居並ぶ元戦士

旧悪がカンラカンラですむ時刻

はちきんと違つた伊予の姫ダルマ

大台に乗つたホホホとおんな達

帯きりり平成不況とのいくさ

府中市 馬場 利子

枯野から風が聞かせるひとり言

点滴のしずくと語る生きている

どう生きる定位置に座す女坂

鉄塔で疲れた雲がひと休み

人間を続ける日々の身の重さ

飽食と飢餓の地球が転んでる

長岡京市 山田 葉子

里の秋熊が出ますと書いてある

売り言葉塩をきかせて返される

ほめ言葉だけ敏感に聞き分ける

曲り角揺れる尻尾を持って余す

目に余ることは忘れる老いの知恵

歌流れふいに開いた胸の鍵

神戸市 両川 無限

トップ維持する本当の底力

真つ白がいいねと紙の私語を聞く

古里に太い根つ子が置いてある

口悪いあいつとなぜか馬が合う

裏腹に生きてロマンが捨て切れぬ

和歌山市 柏原夕胡

毛布をください心がとても寒いから
リセットボタン押しても君は還らない

冷やかにわたしを見つめている私
同じところで響いてくれる冬の海
泣いている素顔に化粧して笑う

岐阜市 平野 あずま

中越の再起を願う初光り

両陛下の見舞いに勇氣授けられ
連帯の輪をもて難に立ち向かう
人間の強さ弱さが出る災禍
小さい生命見事守った救助隊

今治市 塩路 よしみ

矢印に頼り自分の意志がない

子の部屋に親の知らない風がある
燃えつきて女の海は凧いでいる
むらさきの夕暮れ亡母の声がする
どの指も個性をもつて仲が良い

奈良市 乾 春雄

都市砂漠ふる里捨てた人の群れ
言葉など要らぬ枯れ葉の散歩道
千羽鶴カルテの秘密知っている
風を溜め飛び立つチャンス狙ってる
うぬぼれの紙風船がふくらまぬ

八尾市 田邊浩三

一生の願いはすでに使い切り
ABC Eもしつかり撰ってます
シーソーで孫の二人に負けました
茶柱が浮いて沈んでまた浮いた
弟はまた女物着せられる

大阪市 小谷集一

マイペースつい居眠りをしてしまい
人生のマラソンきつとエンドレス
どのように生きてても僕は僕の色
つまりと父の背中を思いだし
晩年において晩年を信じない

東京都 小川 賀世子

生欠伸 平穏な日が続いている
ぬるま湯に浸かり右脳もふやけてる
姉妹で語る夜更けの古都ぬくし
嵯峨野から御室あの日の君捜す
石庭を前にロダンの顔になり

大阪市 井丸昌紀

噂では猫も犬かきするらしい
そういえば木を一本も見ぬ日なり
意志を持つ口ポットアトムだけで良い
はっきりと空に浮かんで寝てみたい
働きも学びもせずにかい面

日立市 加藤 権 悟

西宮市 片山 忠

平和つていいな初音に屠蘇のおめでと
歳月は待つてはくれぬ影法師

生き下手な無冠の父に犠打ばかり

一様に亡母の姿で芒ゆれ

歛をふる大地に打算のない軍手

藤井寺市 若松 雅 枝

よく食べてよく寝る父の長寿法

卒寿まだ風除けになる気迫持つ

母に似た羅漢に野菊供えとく

根気良く話せば敵も胸開く

去る者は追わずに温い胸を貸す

和歌山市 土屋 起世子

身の丈の深さで余生泳いでる

寝て一畳天災で知るありがたさ

何もないことが幸せ陽が沈む

一周忌嘘ついた傷まだ癒えぬ

間において見れば許せることなのに

草加市 飯土井 健 翁

百歳へまだ夢がある覇気もある

最高のお茶仏壇の妻と飲む

幸せは顔に出ている良いエクボ

どん底を舐めた男にある度胸

残り火に鞭打ち生きる土根性

スピードを落せば見えてくる余白
スポーツを当てると怯む記憶力
ダーティーな仕事も出来て秘書の貌
咀嚼音だけが虚ろに響く夜
考えた拳句に出したアカンベエ

今治市 渡邊 伊津志

虎の威を借りた啖呵は腰が逃げ

頂点の孤独虎の尾眠れない

女とは虎を寝かせる膝を持ち

虎穴に入る勇気がなくて逃す恋

飢えた日に虎はほんとの虎になる

鳥取市 森 美智代

二〇〇五年が鶏冠を立ててやってくる

大輪を咲かせた人の菊談義

元気がまたいじらしい優太ちゃん

これからの失敗どうぞ見ぬ振りを

欲のない余生どこでも生きられる

相生市 村木 信子

埋み火へエールを送る火吹き竹

重いペン走り疲れた夜の孤独

八十路坂ロマンの電池入れ替える

愚痴はもう聞いてもらえぬ母へ香

君が影くるくる回る愛と憎

札幌市 三浦 強一

ラッピングして取っておくいい話

爪に絵を描いて厨を遠ざける

テレビ漬けこんな幸せだってある

ドクターの笑顔が何よりの薬

本当のオレオレと言う孫の声

日高市 根岸 方子

民泊が支え国体盛り上げる

地元戦決勝よりも湧き返り

回顧録まわり道には返り花

さあ旅へまだ足腰も無理がきき

ケイタイは持たぬと願をかけている

東京都 井上 つよし

賞められて念入りになるコンパクト

食い溜めに熊の親子の命懸け

青空は古稀の二人のサポーター

石段を登れば目玉むく仁王

満山の紅葉絵筆を呼んでいる

横浜市 巖田 かず枝

被災地の天気予報が気にかかる

復興へ祈りをこめて募金箱

国民が皆で祈った救出を

ゴミ出しはかわいい声で頼んでる

オレなんて内の息子は言いません

横浜市 川島 良子

踏み出した一步が生きる杖となり

結婚はまさにギャンブルなのだろう

いいコンビ ワハハ オホホで五十年

長男の嫁の役目が終わらない

立ち止まるボクの良い癖悪い癖

横浜市 布山 嘉信

栄誉賞拒みイチロー株を上げ

野と山と土に童心蘇る

足湯浸け紅葉と語る旅の幸

子を支え子に支えられ朝を発つ

老犬を引いて引かれる散歩道

高岡市 青井 はつえ

赤い糸信じ歩いた五十年

夫婦坂疲れてできた土踏まず

汗涙無駄にならぬと子を諭す

理想へのライン年々低くする

インスタント慣れてばやける味かげん

犬山市 金子 美千代

老いるとはこういう事か母の背

心配の種持ち帰る里帰り

カルシウム足らぬかやたら腹が立ち

生活の見直し迫る大地震

幸せの素ふりかけて出す元氣

犬山市 吉田幸子

プレッシャーを楽しむ人のでかい夢

もう少し煮つめてみます秋夜長

崖崩れ坊やに加護の温い風

無駄骨も無駄でなかった初仕事

お膝まで笑う友との山の間路

愛知県 河合ますみ

大丈夫 私の心ウオツシヤブル

光と影重ねる人にある魅力

保護色がほしいあなたを待つ葉陰

本の虫あれも孤独のなせるわざ

月暗々お伽行列通ります

京都市 清水英旺

とみに歩幅小さくなって道遠し

老骨が頼りにされて太くなる

古書市を飽きず巡って秋夕日

川べりに霧立ちこめて冬気配

弥陀にすぎる十日十夜の鐘の音

大阪市 升成好

バックカスの誘いに負けて今日も酌む

清濁をのんで誘いが途切れない

寺巡り歩みに我捨て業をすて

バーゲンのどの値札にも八がある

手の内を見せてマジシャン煙に巻く

大阪市 三浦千津子

無になれぬ心わたしを眠らせず

すんなりと別れが言える不仕合わせ

人恋し多少の嘘を受け入れる

いい足りぬ言葉に今日が繕えぬ

口下手も分相応に競うてる

大阪市 伏見雅明

時々運休もあり喜寿となる

新しい決意が脱がす古い殻

水洗い不足で過去のしみ残る

似た顔が集まってくる通夜の席

ご近所はいずこを見てもゆとりあり

大阪市 尾崎黄紅

隠居部屋あるというのはいいですね

わたくしではよくでおれでの暮しです

傘寿過ぎ堪忍袋はもう要らぬ

今日も無事昨日も無事で明日も無事

落着きという味付けのある京料理

大阪市 池上清治

靴磨きつつ妻の愚痴聞き流す

外へ出る用事で脳を磨いてる

百歳の生きる意欲を盗みたい

メールでの賀状に筆で返事書く

岩の下生き延びた兎に大拍手

大阪市 中村 れんげ

亡母の日よ菊の節句に寿司供え
ありがとうやさしい便り秋の風
霜月に山燃えつくし初冬待つ
生き活きの講演聴いて若返る
今晚も辞書を枕に寝るとしよう

池田市 多田 契子

生きる気が希薄になって枯れた菊
満腹で撃たれたろうかやせた熊
秋深く恋しいはずの人を避け
この国の弱さ見抜いた台風禍
色のある夢持つ人はしほまない

和泉市 横山 捷也

近道と信じた道でつまずいた
ボランティア以下同文の賞貰う
さみしくて少し早目にコタツ出す
総攻撃の虫に共存無農薬
ステテコで一人誕生祝いする

泉佐野市 稲葉 洋

サヨナラの尾灯は霞むから見ない
頑張った五体を祝い老いの屠蘇
餅腹へめでたさ注ぎ酔っている
見なれたる姿も今朝は初雀
淋しいを禁句にしても亡妻忌

柏原市 伴 洋子

篝火にゆれる鶴匠の影仄か
焦点をほかし油断を誘ってる
あいまいな笑顔で惚けたふりをする
目標を定めて後はまっしぐら
母と娘の視点ときには対おんな

河内長野市 大西 文次

台風が太平洋をかき混ぜる
台風が夫婦喧嘩を先延す
後で酒出ると聞いて帰るに帰られぬ
雑草も一雨毎に背のびする
ごちゃまぜの話尾にひれつけてやって来る

河内長野市 坂上 淳司

壊滅の里に未練の深い皺(新潟中越地震報道から)
激震の里に氷雨の降る無慈悲
監視カメラ沈み行く里冷やかに
故郷の安否訊ねる涙声
髭面も茶髪も笑顔光る汗

岸和田市 坂口 英雄

秋深し癒し与えて散る紅葉
ネクタイを緩めまだまだ飲むらしい
長生きはしたくはないが医者に行く
怒ってる時には鏡見るように
ボランティア汗を流しに被災地へ

堺市 荻野 像山

百円玉足でちゃっかり既得権

秋の蟬君もどんくさかったんだ

上向いて笑えるけれど泣けません

満腹で料理番組見る女房

入れ歯びつたり何でも食べて達者です

堺市 河盛 龍三

生徒祭心合わせてうどん売る

鴨川の土手で乾杯ルビー婚

文化祭抽選だけが盛り上がる

のはほんの祇園騒がすJRA

観光地親も子供も疲れ切る

吹田市 二宮 栄子

一番風呂終い風呂まで一人占め

子の直球まだまだ受ける母でいる

遠い日の母の声聞く夕茜

独り居に元気をくれる残り月

絵手紙に嬉しい里の秋もらう

豊中市 源田 啓生

大勢の愛で奇跡の優太ちゃん

菊薫る今朝は被災地雨だるか

胎内で怒りを溜めている地球

ごめんなさいの言葉に籠めた香田さん

秋の夜の虫歯に浸みる酒二合

羽曳野市 森下 一知

不器用な人を男にした才女

職退いて杯に上下のない旨さ

問い詰める帳簿の穴にネオンの灯

朝市をからかう旅の二日酔い

ストレスが溜まると早口が目立つ

羽曳野市 福田 悦子

何でだろう神の怒りか地が揺れる

五指動く神に感謝をしなければ

六十五老齢なんて言わないで

癌八年医師に預けている命

重箱へうち流らしき物を詰め

枚方市 二宮 紫鳳

大の字で寝て大空を抱きかかえ

太うけに孫は何度もポーズする

母の手のぬくもり確かな手弁当

冬ソナのCD流れてティータイム

スニーカー紅葉ぬって夫婦旅

藤井寺市 鈴木 いさお

遺言にゆっくり来いと書いておく

お迎えを待たせてゆるり旅仕度

古い二人誰に気兼ねもない暮し

金は出せ言葉出すなと若夫婦

目を細め海見て龍馬何想う

藤井寺市 増井 ヨシ枝

おめでとう先ずは亡夫へメール打つ

氏神様今年一年宜しゅうに

カレンダー帰省待つ字が踊ってる

春の種いっぱい蒔いて秋ひと日

美人とは言わず襟足ほめている

藤井寺市 西村 栄一

遠い日の飢えを知ってる芋のツル

梵鐘の音に一つの我を捨てる

恥かいた誤字は今でも忘れない

どうせなら上手な嘘にしてほしい

ときめきがほしくて古稀の回り道

箕面市 寺井 柳童

出かけずとも森林浴の街に住み

自然保護森が育む海の幸

選挙戦急に市民派言われても

メダル取り父娘で追った夢実る

あれ以来揺れに敏感とび起きる

八尾市 脇 俊子

押えても沈まぬ欲の泡が立つ

心にも剪定したい枝がある

ジョークから危い種子がひとつ落つ

出会いは一生通しあみだくじ

古希というラストダンスを踊ってる

八尾市 松葉 君江

笙の音に沈む心が解けてゆく

なにげない言葉毒にも薬にも

孫達の会話半分わからない

カタカナ語ふえて日本語瘠せていく

老いてなお間口広げる好奇心

八尾市 赤木 妙子

鈴虫が無口になっていく白露

ラブコールのチャンスに一步退いた悔い

袋小路で亡母の檄飛び目を覚ます

傾いた木さえ枝葉を空に向け

でかい夢抱いて無人の駅を発つ

大阪府 神野 千恵子

若い人やっぱり白がよく似合う

存在感ない気楽さと虚しさ

退職してから風がやわらかい

小春日に布団をたたく音がする

一輪の椿静かに自己主張

神戸市 田中 章子

軸足をきっちりさせてフルスイング

雨の日は優しくなれる本を読む

まさかねと不意の出会いを演出し

素っぴんは素っぴんでまた美しい

わたしにも敷居の高い家がある

神戸市 木村 忠 義

漢字よりひらがなが好き優しそう
憂鬱という字は見ると憂鬱に
ぎっくり腰少し休めということか
世界地図貼ると心が広くなる
不意打ちの地震よ卑怯過ぎないか

神戸市 山 田 婦美子

幸せはひと掴みほどがちようどよい
秋の蝶明日の我が身を知らぬ羽根
筋書の通りにゆけば楽だろう
方円の器に添って生きている
飽食の世こんなに水がうまいとは

尼崎市 河 津 正 治

夕陽背に子等は家路の童歌
秘め事を抱いて寝付けぬ熱帯夜
檄とばし自分史に書く第二章
炎の匂い消えた男の子守歌
すれ違う尼僧やっぱり女です

尼崎市 桑 原 東 園

師の声を大きなバネに金メダル
表面は紳士憎悪の胸隠す
伐られても古木どっこい新芽吹く
熱演のシテは怒涛の拍手待つ
決断をつけかたつむり角を出す

伊丹市 延寿庵 野 鶴

人間の非力を笑う風が去り
いつだって主役を立てる黒衣の手
父の檄バネに明日へ弾む巻
こぼれ種外れた道でぱつと咲く
躓いた石に再起を励まされ

三田市 堀 正 和

秀才と才媛宴終るまで
子育てにリコールしたいところがある
よく笑う女が会の花になる
無休です病院お寺駐在所
賛成とひとこと言えば楽なのに

三田市 石 原 歳 子

顔の皺増えても凝りず手入れする
穏やかに成れない時は野菊みる
心配なことも吹っ飛ば妻のお茶
昼下がり眠気を覚ます辞書を引く
地図帖の地名にひかれ旅プラン

宝塚市 丸 山 孔 一

餃子食う今日は辣油をやや多目
定まらぬエスプレッソの淹れ加減
ああ今日も浮世が目覚しが鳴る
風に向き風に流され赤トンボ
モードとは右に倣えと言うことか

兵庫県 安達 厚

間違いは言うけど嘘は語らない
一筋の道すたころと生きて喜寿
どう生きるそれがなかなか難しい
暫くが永遠になる怠けぐせ
熊だけを責められもせず里の秋

奈良市 矢野 良一

絵心誘う秋の斑鳩塔景色
秋の夜は八代演歌と酒がいい
厚化粧スカーフ巻いて隠す首
化粧落ち皺寄る顔の微笑まし
吉本に家族全員腹を繕る

奈良県 江波 正純

裏山のもみじが秋を引きよせる
雑踏に沈み孤独にひたる秋
アマノジャクつまらぬ溝も掘りたがる
少年の出すシグナルに耳すます
この紐の先に何かがきつとある

奈良県 藤村 重之

天空の一角掘って夢埋める
耳をすませば花鳥風月誘ってる
野道行くこんなところに石地藏
親の短所子が引きずって歩いてる
一枚のペール政治の闇隠す

和歌山市 喜田 准一
ブランドを持たせば背筋伸びてくる
上目使いの反論は無視される
説明が下手でも部下は聞き上手
微笑みを返して胸は四捨五入
そこまでの話だけなら聞くゆとり

和歌山県 森下 順子

お酒好きな彼で話が面白い
留守電の切口上をもてあます
深読みが苦手でも泥かぶり
仮面の陰から出たがっている本音
虹が立ち気持ちがすつと軽くなる

和歌山県 辻内 次根

何か良いことがありそう晴れている
ひと時を幸せにする酒の記事
適量を知って美味しく飲んで
譲歩して譲歩して土地狭くなる
悲観論頑固な染みが付いている

和歌山県 木村 徑子

スランプに吉報届く秀句とや
さあお行き風が背中を押してくる
幸せはこころ美人に包まれて
晩学の詩に託してひとり舞う
真つ白な吟の華咲く新春祈る

鳥取県 西原 真一

着駅の決った電車には乗らぬ
年金はねずみ講ではないですか
禁煙ができない意思が強いから
災害へチョコとラジオを持ち歩く
マスコミに手なずけられた日本人

松江市 松浦 登志子

八の字の眉でおっしやるきつい事
空っぽの自分を信じ待つつもり
柚子風呂にストレス浮かし冬美人
手品師に騙されてみる楽しい日
見おろす子見あげる母と立ち話

安来市 原 煩惱児

せせらぎの夢は大河に海原に
澄んだ瞳の孫には勝てる術がない
オラが米と達者な祖父の大きな掌
軍艦旗見れば老体躍る士気
誓詞読む時に嘘などなかったに

島根県 武島 ちよえ

過疎のバス紅葉一片乗せて行き
大鍋が昔の生活恋しがる
割れ物に触るが如く介護の手
年齢と片付けられてるカルテ
駆け足の一年でした振り返る

倉敷市 撰 喜子

派手な彩 手に取り昔なつかしむ
公園に夜のさざめき残るごみ
出かける日留守の夫もうれしそ
逢えばすぐちゃんにもどれるクラス会
籠の鳥自由か餌か思案する

岡山県 矢谷 富士野

点滴のポトリポトリにわく命
影となり日向となって来た夫婦
師の影を踏んで越えます芸の道
急がねばあの世の夫に虫がつく
お宝はないが元気な子が二人

府中市 藤岡 ヒデコ

頑張った私ねぎらう花を買う
今日一歩小さな夢を道づれに
着る事もないが和服に風を入れ
ためらわず一期一会を繰り返す
絵ごころをゆさぶる柿が陽に映える

今治市 野村 清美

幸せがこぼれぬように落し蓋
目玉焼きパッチリ出来てウツが消え
知らぬ間に時が過ぎてた物思い
淋しさに豆腐くずれて泣きじゃくる
愚痴言わず鍋を磨いて気を晴らす

愛媛県 花岡 順子

鬼がタツチするから僕も鬼になる

我が子叱って親には親にある立場

臆病の甲羅へ隠す亀の首

芸術に触れて一日画家になる

引き出しの奥の秘密は覗くまい

高知県 伊野部 和江

災害の裏で経済動き出し

念仏のように聞いている老いの愚痴

旅の宿色紙の言葉良い土産

現代に歴史顔出す秋祭り

しっかりと生きて次世代支えたい

高知県 近森 功

太っ腹小兵が持っていた度胸

庭の松ほめてセールス腰をすえ

年金を八つ裂きにする孫の数

禁酒禁煙まだ伸びている爪と髪

とまらない時計がくれた誕生日

高知県 百田 幸

荒れ狂う風が命をもてあそぶ

ウインドーに映る姿に背を伸ばす

教え子も恩師も同じ老人会

親同士決めた御縁でまだ夫婦

先輩が真面目すぎて落ちつけず

北九州市 岡田 幸生

十指みな触れると弾むキーボード

暫くは胸につかえている苦言

会釈した顔に記憶をたどる老い

ライバルの背中一度も追いつけず

どしゃぶりへ促す義理のある喪服

シドニー 三谷 たん吉

人間の自然破壊で迷う熊

人間もエサがなければ牙をむく

熊だつてエサさえあればかわい目

此は如何に怖い蟹かと聞く倅

シドニー 坂上 のり子

もうわずかの命の友と笑い合う

病む友を見舞い慰められて来る

ひまわりのようにパパの声追う児のあたま

赤ん坊に遊んでもらう子煩悩

宝くじ勝てば上げたい気はあれど

メルボルン 藤原 ポン吉

悲しみをこらえて高い空を見る

内緒ごと出来ないらしい僕の顔

台風で職を失う鍋奉行

予知不能地震と籤と家の妻

我が家にも妻という名の核兵器

米子市 足立 由美子

新年へ何故か心が弾み出す
中心で指揮してるのはいつも母
地図にない迷路なかなか抜け出せぬ
再会が一気に昔喋り出す

松江市 山根 邦代

健康は笑いを誘う孫といふ
どうしても右に行きたい時もある
リフレッシュあした天気にしておくれ
孫宛はひらがなだけでポスト行き

羽曳野市 永田 章司

叱つても子供の癖は親譲り
立ち飲みに今日いちにちの無事がある
葉物高大根の葉も売りにする
テーマから骨抜く作業審議会

京都市 三宅 満子

花の名を一つ覚えた嬉しい日
手作りのケーキにころりプロポーズ
鉢合せ熊より怖い人もいる
医療費も見積り取ってかかりたい

大阪府 畑中 節子

秋夜ながページをめくる音静か
コスモスが風の服着て踊ってる
満月に道いっばいの蔵の影
芒の穂白い帽子でとるリズム

鳥取市 近藤 秋星

蛙は登って鮎は下って一期終え
被災地の月は寒かる冷たかる
一番にひく風邪自慢にはならぬ
気が付けばいつの間にやら十二月

泉佐野市 備後 三代子

折々に夫丹精の花のいろ
いち足すいち二にはならない娑婆の風
少しずつ手抜きですます老いくらし
願わくば看とられるより看とりたし

大阪市 木村 青生

一人鍋音も出ぬまま食べ終る
運動会声から先に飛んでくる
石段も踏まれてからが丸うなり
ベアのまま終れる靴がうらやまし

八尾市 寺川 はじむ

愛読書横に積まれて秋を食べ
のんびりといらち夫婦で仲がよい
時代越え名画伝える主題曲
若者の辞書から我慢消える世に

和歌山市 山田 侃太

いい風に吹かれていたい風見鶏
疑問符になつて風ぐのを待っている
ソムリエの資格はないが酒は好き
人間よ奢るな鳥も二本足

倉吉市 酒井 芙美子

蟹さんよぶつぶつ小言お前もか
耳うちをしたばっかりに仲間割れ
いそいそと仕事のはずむ給料日
これからの行方定めぬフリーター

島根県 菅田 かつ子

はらはらと紅葉落ちてみな忘れ
へそくりでそろそろ充電しようかな
スタイルがだんだん亡母に似て丸く
笑つたり腹を立てたり生きている

兵庫県 黒崎 美紗子

ミュージカルの余韻華やぐバスの中
川べりのごみに水位を知らされる
台風能耐えた白菜愛でている
あるがまま楽しく過ごせたら平和

尾張旭市 三浦 きぬ

じゃじゃ馬も飼い馴らせると言った人
ほとぼりが覚めたはずだが煙立ち
強すぎる個性に転けて悔い残し
中越の地震に地球の脆さ知る

出雲市 荒木 英子

若き日の輝きを見る写真帖
いい出逢い君が寄り添う茜雲
今生をエンジヨイしつつ春を呼び
心からありがとうよをモットーに

藤井寺市 俣野 登志子

着膨れて七人掛けに五人だけ
ブランド店一人じゃとても入れない
止まぬ余震に眉間皺寄せ見るテレビ
災害を憂う野菜の高値なぞ

佐渡市 高野 不二

父の歳越えて父には及ばない
人間を試されている台風禍
血糖値酒のさかなにされている
合併にかくれて見える鉛と鞭

大山市 関本 かつ子

忙しい仲の一つに立ち話
羨望が嫉妬に変わる女が目
眉を引く自分の顔が怖くなり
原発もご存知ですか震度7

羽曳野市 吉村 久仁雄

仏縁を論じて静か座禅草
コンビニの小さい秋を妻と食べ
名も財も要るが情けはなお欲しい
意地も見栄も張って人間止められず

雲南市 福岡 博利

日に三度元気をもらうお茶の味
深呼吸してからにらむ血圧計
医者通い妻が護衛の右左
面倒な話きこえぬ方できく

秋田県 湊 修水

武装したテロへ対立過半数
体験の震度七身につまされて痛む胸
優太ちゃん愛の奇跡に救われる
越後路に心して降り雪の精

横浜市 金森徳三

ふとん干しだけは頼りにされている
ほめられた菊一輪をお裾分け
聞き直す二人の耳が共に老い
災害の無いこと祈る初詣で

横浜市 石原三郎

木犀に鼻の快復教えられ
神居るや日本列島惨い事
忍耐を診療待ちできたえられ
気の弱い私 殺すは欠伸だけ

静岡市 中西雅

お二人さん言われた宿がなつかしい
片かなが増えて日本語かわいそう
温泉郷流れるお湯の化けの皮
私の手青すじだらけおこって

大阪市 吉田富美

大根の葉を捨てる人拾う人
点滴の長い時間に五指を折る
没の句に辞書吹き込んで生き返る
待ちかねた柳誌わくわく立って読み

大阪市 平井露芳

出生率 選挙の後にそつと出し
近くには案外居てる乳幼児
物忘れひどいが俺も痴呆かな
玉葱か初泣きをした俄主夫

大阪市 寺井弘子

米をとぐ死語になるのか無洗米
嫁姑無邪気な孫に救われる
留守番が惜しくなってる菊日和
同性の脂粉に悩む専用車

大阪市 吉内タカ子

お人よし嘘が言えないバカが付き
カタカナ語書いて覚えぬ戦中派
占いを先に読みおく控えめに
作りかえ堪忍袋大きめに

泉津市 助川和美

ゴミの日に出せるといいなストレスも
座布団を枕にごろり日曜日
手をつなぎ眠れる夫婦温かい
宝石のウインドーまず値段見て

河内長野市 木太久正一

兄弟の元気確かめ母法事
来し方をじっくり吾に問うてみる
レスキューに救い出された幸運児
優しさがにじむ陛下の地震見舞

懲りもせず文章講座また通う

親父だけ優しくなって他は猛威

祝日は静かに二人茶をすする

医者様はなんでも歳の所為にする

河内長野市 内海綾乃

早朝から大きな音出す草刈機

米を研ぎ心地よい音シャリシャリと

秋空に大根間引く二人連れ

卒寿祝う膳の葉は離せない

岸和田市 森元ふみよ

方言で固い話を丸くする

ライバルが微笑みながらさぐり入れ

ど忘れと呆けとは違うまだ五十路

呆け預けこの先恋に花咲かせ

岸和田市 堤 楢代

嘘と知りだまされてやる思いやり

高騰の大根主役さんまそえ

防災のリュックは重いもてるかな

のんびりのリズムがぬけぬ帰省あと

岸和田市 中岡香代

コンピニが手作り料理カパーする

伸ばしてた髪を切っても知らぬ夫

振じ伏せた夫の夢見て目がさめる

抜目なくちゃっかかりだけど憎めない

道楽に一生使うのも美学

道楽も腹八分目は難しい

弁解し一から怒鳴りなおされる

叱り方甘いと妻に叱られる

堺市 羽田野 洋介

語り部も語りきれないこの世相

人込みで肩書呼ばれ知らん顔

青春の匂い持ち寄るクラス会

大賞もすぐ消えていく流行語

高槻市 安田 忠子

結願のお礼参りに天高し

礼をする松井に見たり日本人

USJ童心もどるクラス会

ガン手術初めて知った友の句集

高槻市 佐甲 昭二

口笛に包みたくなる嘘ひとつ

左遷地の地酒に痛みいやされる

似た人を見過した日のわだかまり

胸痛む話はうまくほける耳

高槻市 富田 美義

五センチも背丈ちぢんでいる鏡

お腹減る拍手ばっかり披露宴

茶柱や今朝も縁なきコーヒー党

妻の手に渡ると金も値打ち落ち

堺市 奥 時雄

高槻市 大崎 侑子

赤い糸弱いと知らずハネムーン
戸締まりを威張った友が空巢の禍
盗まれた方が悪いと恋泥棒
つまみ食いやがて肥満と知りながら

富田林市 古田 千華

見に来てと誘われて行く菊自慢
雲疾し懸崖の菊軒深く
懸崖の菊に一年心こめ
自前の齒親に感謝をしています

寝屋川市 岡本 勲

新店舗横目に老舗一つ消え
おしゃべりもカニ三昧でピタリ止み
気配りをしすぎて変に誤解され
アメリカの音頭で踊る小泉さん

寝屋川市 中川 恵香

昼下りテレビ守りするこれも幸
その一瞬自分悟った自己探し
風になり私と遊ぶ五七五
初空へ翼広げよ鳥よ飛べ

羽曳野市 濱口 フジ

故郷へ迷子イルカが帰った日
地震起き日本列島ひびだらけ
炊き出しのおにぎり旨い避難民
台風のままかの波が家壊す

羽曳野市 仲谷 真一

台風が台所まで直撃す
頭の毛一日百円ずつ伸びる
猛暑でもやっぱり冬は来るそうだ
大相撲外人ばかり国技です

東大阪市 米田 水昇

ポケットでうたうどんぐり秋のうた
角切られ威厳なくした鹿の長
天平の佳人の浮かぶ螺鈿琵琶
一本のばらになりたい赤を着る

東大阪市 今岡 貞人

優しさを生む恋ならば何度でも
政治と金何時まで続くぬかるみぞ
早朝の無欲な顔と会う散歩
考える姿で眠る会議室

枚方市 小川 良吉

字は下手でよいと絵手紙誘ってる
古賀メロデー秋のしじまに沁みる酒
最敬礼する権力者ない平和
礼節の優しい街が懐かしい

藤井寺市 伊藤 アヤ子

同窓会お国訛りがとび跳ねる
ごましおの頭が揃う古希の席
山川も空気もみんな懐かしい
逝った友会えない友も古希になり

藤井寺市 吉田 喜代子

病知らず気弱になった風邪二十日

十分に亡父母に愛され子を愛す

舞う枯葉好きなシャンソン口をつく

百八つまだまだ足らぬ除夜の鐘

八尾市 笹倉 ひろし

忙しい時ほどドツとメール来る

太陽に負けない笑顔君が好き

通勤はボロのジーパン社でスーッ

河内野に藁の煙が秋告げる

八尾市 西川 義明

愛妻のバランスこもる手弁当

襖越し湿った話聞かぬふり

古希間近 妻を宝と思う日々

一生はあさきゆめみしえひもせず

八尾市 中島 春江

不況風寒さにちぢむ招き猫

姑とちり親近感がわきました

歯が抜けて出来ぬ歯ぎしりしています

生花ですよ老いていますがまだ枯れぬ

八尾市 平川 幸枝

話すほど白けて紐の伸び縮み

十三夜老母は幾年子を叱る

年おんなどう楽しむか棚の本

合図した窓がびったり塞がれる

八尾市 田中 トシエ

被災地の身に沁む寒さ今日も雨

幸せは袖湯のかおり吾が浄土

祖母達者布団ふつくら陽の匂い

米寿の寝起き気ままに除夜の鐘

大阪府 小栢 こずえ

栄養を吸い取るように本を読む

もつたいない穴あき靴は暗にはく

背を押され幸せ気分湧いてくる

戦中派命吹き込む捨てるゴミ

大阪府 高木 道子

いのこずち脚に飛びつき縫りつく

留守の家忘れることなき石路の花

行く雲の色変りいて冬の章

安売りと聞いて速出のスニーカー

尼崎市 小池 幸子

腹割って話せば結構通じ合う

心こめ手書きこだわり書く賀状

古傷を一人労る秋夜長

表裏あつて人生奥深い

篠山市 谷田 多美子

勿体ないが脂肪となつて身にせまる

あの道もこの道もある亡夫の影

顔なめる猫は正しく正座して

目的地について帰れぬ空財布

三田市 辻 開子

泣き笑う家族で楽し六十路坂
還暦に夫の酌は愛も込め
秋晴れにリュックも軽くもみじ道
価値観を夫に合わせ愚痴ためる

三田市 阪本 藤 朗

肘付の椅子は家でも昼寝場所
夜の街曲り角には気をつける
喜怒哀楽屋根で蓋した家並ぶ
マシユマロの言葉がハート惑わせる

西脇市 七反田 順子

鴨が来た嬉しくなつて会いに行く
口笛を知っているのかうちの猫
コーヒーをほどよい味に酌み交わす
耳確か大声だして諭される

兵庫県 岩本 美緒子

集合写真それなりと言う嘘つばち
角栄さんお里地震でおおわらわ
毒舌も忘れ上手で不眠なし
旅画帖充実持続もち帰る

奈良市 田中 賢治

児は生きる三日三晩の母の声
狩猟好き飼いだだけが尻尾振り
自衛隊声も出せずに帰国延び
拉致救う精気見せよと除夜の鐘

生駒市 小西 稔

隣り組叱るおばさん今いない
ほけ防止互いに叱る老夫婦
偶然も宇宙のしくみきまり事
偶然と言えない人の巡りあい

橿原市 藤 永 実千代

入院の我が腕にまでバーコード
親切かおせっかいかで揺れ動く
有り難うたった五文字が力持つ
我が内に常に響かそ反戦歌

和歌山市 坂部 かずみ

ツーカーといかぬ会話が真珠婚
古疵が一人になると疼きだす
台風が去つて過去まで消してゆく
おしゃべりも出来て楽しいポランテイア

和歌山市 根田 よしこ

耳遠い老母が毎日よく喋る
お月見にケーキ供えて孫をよぶ
孫のTELホッと背中が軽くなる
サスペンス見ながらビール飲む平和

和歌山県 村中 悦男

波の音無策に落ちる旅の夜
朝歩き霜ふむ音を一人占め
敬老会段差に妻へ手がのびる
御侍史と書いて緊張やつと解け

鳥取市 岡田 信恵

四季の花茶の間を飾るつるもどき

ひきこもる友を見守る愛の声

定年後マンネリ日々にもちをうつ

立冬が教えてくれる冬じたく

鳥取市 山口 千代子

青空にくつきり浮かぶ富士拝む

娘と話し近いスパー回り道

健康は宝と今日も生きて幸

旅予算多めに持つてみな遣い

鳥取市 河田 のり代

朝起きも仕事もベルに支配され

里の秋鈴の音鳴らし熊も見る

一人住む庭のカンナが亡妻に見え

後手後手の家事も忘れる秋の風

鳥取市 鈴木 一弘

黒い雲去つても次の黒い雲

おつき合のおかしくなった子の喧嘩

永遠の平和を守る血は赤い

冷や水を飲んで赤恥爺の旅

鳥取市 谷岡 清子

つやつぱく新米匂う夜の膳

幸福は心次第と母の顔

百までと欲ばる爺の応援歌

不老薬願えば神が笑い出す

倉吉市 大下 智子

逆らつてみてみてもいずれば母の膝

コンビニで株を手軽に買う時代

儲かった株は内緒の宝物

草野球夫のセーフに声からす

倉吉市 前田 喜美子

お粗末と言われそうだね野菜食

母の歳越えて似て来た背格好

ランドセル孫ではないぞ末っ子だ

立ち上がれ心虚ろな繁華街

境港市 遠藤 那珂子

ポストにも改革の波おしよせる

片方が悪くないのよ嫁姑

生還をみな祈つてた二歳の児

もう少し続けていたい夫婦道

境港市 中井 虎尾

東京に生まれた鳩は都鳥

ニーハオのかけでココソするお国

テレビ見て涙を流す鬼の顔

台風が損保金庫を直撃す

米子市 小塩 智加恵

新米を炊いた匂いを一人占め

傷あとを残す言葉は吐き出さぬ

スケジュールあふれる妻がうらやまし

秋日和 全開放のうさぎ小屋

米子市 猪 森 スミエ

おじいちゃん真ん中にして大家族
ゆつくりと吹こう大きなシャボン玉

一年の怠けた皺が寄る師走

鈍感になって時どき火傷する

米子市 池 尾 保 子

お茶漬でいいよと帰る御前さま
整理好き置場忘れてかきみだす
丸い背を丸くしてでも頑張るぞ
長生きは銭もいります要介護

鳥取県 橋 谷 静 江

ゆううつな気分を晴らす孫の声
人の愛たくさん貰い果報者
言いすぎた言葉の重み胸にため
酉年だうぐいす鳴いて春を呼ぶ

出雲市 川 島 和 歌 子

無駄遣いすぎて言い訳苦労する
声出してセリフ反復する孤独
まわり道最初の人と結ばれる
戦いの傷跡いえぬ昭和の灯

出雲市 加 藤 スズコ

団らんの真ん中席にいるわたし
うっとり沈む夕日に手を合わす
好物が知られて届く同じ物
好物と幸せを盛るパーティー

府中市 岩 本 雅 代

露天風呂もみじ一片肌に舞い
露天風呂裸同士で意が通う
今日は他人明日の我が身と成りし日々
目茶苦茶な話に花が咲く野道

宇部市 高 山 清 子

幸せは愚痴をこぼせる老友が居る
調子に乗りすぎた男のすべり台
丁寧の説明しすぎ粗が出る
一歩だけ出れば死角が良くわかる

東かがわ市 向 山 治 延

松竹梅いけて友まつ娘の笑顔
老いてなお心をこめた松飾り
頼まれ事皆は聞けぬと福の神
同窓会友の本音がついぼろり

唐津市 岩 崎 實

青天を入れたく部屋の玻璃磨く
待ちわびる電話不在の時かかり
一時間写経に合わせ時刻む
今日の日も夢と現実折り重ね

第86回 大阪川柳の会

日 時 2月4日(金) 17時開場・18時締切
会 場 サンケイビル本館3F 322号室
題と選者 △爽やか・小松原爽介△運ぶ・上野多恵子
△売る・鶴田遠野△風・磯野いさむ (各題2句)
会費 千円 投句(会員のみに) 2月3日迄

同人特集

私の一句

まだ成れぬ本の匂いのする人に
 さがし物している時間ふえてきた
 土砂降りへ逢いに行かねば罪になる
 明日あると思えぬ歳になりました
 五十年今安らぎの共白髪
 寝て起きて孫に年玉貰いけり
 福笹が街中をゆく初恵比須
 再起する意欲に天も味方する
 小さな嘘許してくれる閻魔さま
 古日記のページは愛を浮き彫りに
 傾いてくれそうにない高い鼻
 新しい日記も使い慣れたペン
 人間を続ける文句言いながら
 蟻社会きつとモラルがあるのだろ
 好奇心ばかりで終らないドラマ

京都府	大阪市	枚方市	堺市	四條畷市	米子市	竹原市	東かがわ市	東かがわ市	尼崎市	大阪市	高槻市	堺市	堺市	豊中市
稲葉冬葉	小糸昭子	海老池玄也	村上玄也	吉岡瑞枝	林井居	森井居	工藤吟笑	木村あきら	黒川紫香	安達はじめ	川島諷云児	板尾岳人	河内天笑	橘高薫風

正月の神籤凶だけ抜いてある
 花が咲くまで絵日記をつけている
 忘れたという優しさも持っている
 ふり向けば泣いて笑った顛末記
 日の丸に狭い思いはさせられぬ
 戦友会食後の葉わすれない
 ひと雫ほどの愛なら施せる
 慈母観音はのいますほどのあたり
 今がある川の流れば止まらぬ
 しばらくは放つとこ金の要るはなし
 鍵穴の向こうは神秘的な世界です
 ああでもないこうでもない枕抱く
 先達の灯を追うてゆくはぐれまい
 花吹雪きれいに散って淋し過ぎ
 貧しさの中に育って行く根気
 京の庭酒宴出来ればなお良かる
 住む人が輝き町が美しい
 健康な暮し求めて夢を描く
 これということもないのにしあわせだ

高槻市	瀧本	きよし
和歌山市	宮本	三喜夫
出雲市	岸本	桂子
大阪市	星野	きらり
鳥取県	山本	正光
鳥取県	小西	雄々
鳥取県	西原	艶子
弘前市	波多野	五楽庵
出雲市	富田	蘭水
堺市	河内	月子
大阪市	町田	達子
鳥取市	倉益	一瑤
河内長野市	水谷	正子
河内長野市	植村	喜代
羽曳野市	酒井	一壺
岸和田市	亀井	皎月
鳥取市	有沢	せつ子
尼崎市	春城	武庫坊
尼崎市	春城	武庫坊



ぼろぼろの心を救う澄んだ空
 許す気で心の窓は開けておく
 幸せは降るものでなし掴むもの
 母さんの包丁確か五分分
 絵に描けば白と黒との冬の道
 生きざまを裁かれながら生きていく
 不器用な生き方もよし汗光る
 どんな夢追ったお方か墓石読む
 明日もまた今日と同じの保証なし
 狼も羊もみんないい仲間
 どうしても妻の箱から出られない
 初夢はアジア五地域手をつなぐ
 愛し合う今が永遠だと思ふ
 伸びる芽も一緒に摘んだかも知れぬ
 屋根という大きな傘を子に渡す
 皺の手にまだ掴みたい欲があり
 残された女ひとりの舫い舟
 此と言う名場面無い一代記
 問診へ身振り手振りで訴える

和歌山県	海南市	大阪市	倉敷市	鳥取市	鳥取市	枚方市	佐倉市	雲南市	愛知県	神戸市	大阪府	竹原市	吹田市	八尾市	寝屋川市	大阪市	藤井寺市	東京都
中	谷	小	小	岸	岸	寺	岡	毛	早	池	前	時	穴	村	平	津	中	清
後	口	泉	野	本	本	川	井	利	川	田	田	広	吹	上	松	村	島	原
清	義	ひ	克	宏	孝	弘	やす	幸	盛	善	ゆ	一	尚	ミ	か	志	志	悦
史	男	さ	枝	章	子	一	お	夫	夫	守	い	路	士	子	す	華	洋	子

逢いにゆく靴は時空を駆け抜ける
控え目な態度で風を確かめる

梅薫る玉青画伯百一歳

愛を盛る皿はあくまで真っ白に

スランプを抜け出た毬がよく弾む

鏡獅子お上りひとり待っている

地面にはきっちり着けておく梯子

真心で漕げばいつかは風になる

胸底にあるのは深い海だった

石ひとつ置いて他人になつてゆく

新聞の匂いで今日が動き出す

旬の味機嫌よい箸美味い酒

知恵よりも汗を絞って生きてます

胸に火を溜めて始発の駅に立つ

他言せぬポストに安心して入れる

お日様は力づくでは咲かせない

いいことも無いが夕日が美しい

拍手を打てば神様いる気配

あたたかい声に心を和ませる

富田林市 中井アキ

大阪市 河井庸佑

交野市 山川日出子

高知県 赤川菊野

鳥取市 奥谷彩子

弘前市 櫻庭順風

松原市 小池しげお

高知市 小川てるみ

美祿市 安平次弘道

八王子市 播本充子

和歌山市 桜井千秀

茨木市 藤井正雄

堺市 柿花和夫

弘前市 高橋岳水

奈良市 天正千梢

和歌山市 武本千碧

大阪市 川久保睦子

奈良市 宮口笛生

寝屋川市 富山ルイ子

ふところは今もくじけぬ歌を持つ
 仰ぎ見る過去もつれづれ流れ星
 天上天下唯我独尊我が心
 ひたすらに命忘れぬ蟬時雨
 母の傘そむいた子にもさしかける
 口下手だけど厳しいことを言うてはる
 山芋の粘りごころを糧にする
 祭壇になぜ私がというお顔
 神々のいくさ以来の殺し合い
 風媒花ほろほろほると夢を見る
 ふっ切れた相剋捨ててレモン噛む
 たこ焼きでなにわの文化食べている
 歳を取る初体験に腰据える
 こだわりの土に匠の技が冴え
 待ちましよう止まない雨は無いのです
 パソコンを駆使する妻は魔女だろう
 浮き草のこの世じつくり従いてゆく
 流されてあしたの岸に泳ぎ着く
 人生がマークシートで決められる

西宮市	出雲市	出雲市	奈良市	藤井寺市	東かがわ市	米子市	大阪府	東大阪府	出雲市	鳥取県	豊中市	弘前市	高槻市	岡山市	吹田市	静岡市	松江市	米子市
坪井	城岡	吉岡	米田	高田	清川	木村	澤田	森下	石倉	新家	藤井	岡本	傍島	井上	野下	安本	安食	澤田
孝一	多喜	きみえ	恭昌	美代子	玲子	春枝	和重	愛論	芙佐子	完司	則彦	花匠	克治	柳五郎	之男	晃授	友子	千春

早や鶏が鳴けば今年は八十歳
 窓の雪解けて明日は旅立つ日
 ゆっくりと歳重ねたい古稀の春
 初夢は七福神と酌みかわし
 熊野古道踏んで心の錯落とし
 浮き沈みしながらゆくえ考える
 貸し借りがちよっぴりあつて腐れ縁
 過疎の里プラス思考の土を打つ
 煩惱を捨て切れなくて二十四時
 凍らせてとっておきたい母の味
 俺の辞世来世はもつとうまくやる
 今日はまだ誰にも傷をつけてない
 真っ直ぐに歩いて傷が付き纏う
 米寿の日叔母を励ます感謝の日
 カルチャーで仲間に見えるのが薬
 何もかも背負い込んだら動けない
 公園に犬の読めない札を立て
 青空を思い出せない戦の子
 縁の下母の拳が支えてる

生駒市	弘前市	尼崎市	海南市	大阪市	姫路市	神戸市	米子市	吹田市	寝屋川市	和泉市	大阪府	大和郡山市	鳥取県	尼崎市	八尾市	大阪狭山市	松江市	静岡県
飛	福	林	三	大	古	山	木	早	太	西	粉	坊	鳥	軸	吉	矢	佐	藪
永	士	宅	川	川	川	口	村	川	田	岡	山	農	羽	丸	村	野	木	田
ふりこ	慕	昭	保	桃	奮	光	富	棲	とし	洛	隆	柳	直	勝	一	み	摸	杏
	情	三	州	花	水	久	美	世	子	醉	盛	弘	市	巳	風	梓	え	

純愛に女性は弱し冬ソナタ
 それぞれの思いで桜待っている
 まごころの届く辺りに住んでいる
 白無垢が思わぬ色に染まり古稀
 いつかまた流す涙を溜めておこ
 青空の深さと平和語り合う
 考え過ぎてる手駒が熱くなる
 祝鯛きょうは主役で膳に乗る
 挨拶を丁寧にしてはてどなた
 高原に一人たたずみ深呼吸
 母が逝き今頃効いてきたくすり
 先頭が頼もしいのでついてゆく
 好きな人と同じ時計の中で寝る
 梅の枝蕾愛らし東風を待つ
 こぼれ種咲いて忘れぬ花ごよみ
 下り坂仮面はみんな捨てました
 団欒に織り込んでいる唐がらし
 また一つ歳が増えると喜んで
 氷柱が溶けて人間らしくなり

吹田市	大阪市	鳥取市	松原市	大阪府	高槻市	米子市	米子市	高石市	大阪市	唐津市	河内長野市	鳥取市	熊本市	東大阪市	堺市	鳥取市	芦屋市	吹田市
岩	榎	徳	玉	米	井	政	光	浅	松	市	井	武	永	笠	神	西	黒	瀬
屋	本	田	置	澤	上	岡	井	野	尾	丸	上	田	田	井	原	川	田	戸
美	日	ひ	重	俣	照	日	玲	房	柳	晴	喜	帆	俊	欣	和	能	まさ	よ
明	の出	ろこ	人	子	子	枝	子	子	右	翠	醉	雀	子	子	文	子	子	よ

古希過ぎてやつと夫婦の歩幅合い
 ふる里の山河に心癒される
 ほろ酔いを薄める水の音を聞く
 わたくしが変わって周り見え出した
 行く夏を惜しむか大空遠花火
 信号がウインクしてる走れない
 カルチャーに人畜無害の人ばかり
 暮らすのはあなたの香り届く位置
 頷いたばかりに貧乏くじを引き
 電文の一句に浮かぶお人柄
 疲れたら老いという蓑被つとく
 さくらんぼ味と心の贈りもの
 お月さま綺麗と妻が呼びに来る
 引退をしてもポッポに一億円
 争いは絶えぬ一人になるまでは
 親切の濃さをたどれば過疎となる
 初日の出いつもの松を間違えぬ
 人間の個性が光る自然体
 比べたらあかん自分を知っている

三田市	鳥取市	米子市	熊本県	宇部市	大阪市	豊中市	大阪市	西宮市	富山市	唐津市	池田市	黒石市	八尾市	枚方市	堺市	東かがわ市	高知市	神戸市
久保田	春木	白根	高野	平田	清水	田中	板東	緒方	島	樋口	栗田	相馬	生嶋	二宮	齋藤	池内	川竹	伊勢田
千代	圭一郎	ふみ	宵草	実男	利武	正坊	倫子	美津子	ひかる	輝夫	久子	一花	ますみ	山久	さくら	かおり	松風	毅

いのち生む星であなたと組むダブル
 忍び逢い尽したりない事ばかり
 寂しがりいつも手元に万華鏡
 タンポポの綿毛伝言届けたか
 鶴彬が叫ぶ歴史の暗がりに
 初恋を無色無臭で秘めている
 膨大な書庫で秘境を探ってる
 お月さま娘が彼をつれてくる
 怖くない無から生まれて無に帰る
 南天の好きな日当り白障子
 台風一過花の寝息をそっとときく
 君は今何に燃えてる十五歳
 金婚の骨しみじみと旅のお湯
 火種一つ抱えて女らしく生き
 余生とは言わぬ生き生き輝こう
 花は葉に明日のことは分らない
 支え合う人と言う字のあたたかさ
 ペン先が派手に芝居をして見せる
 笑うため歯を美しく手入れする

籾	西	川	林	井	山	杉	川	山	都	吉	前	山	鶴	木	伊	福	鴨	遠
本	村	崎		上	本	澤	端	崎	倉	田		岡	田	本	藤	本	谷	山
舞	黙	ひ	露	森	玉		一	君	求	あ	た	富	遠	朱	玲	英	瑠	可
夢	光	かり	杖	生	恵	汀	歩	子	芽	ず	も	美	野	夏	子	子	美	住

分け隔てない太陽の熱射かな
 変えようとしない形について行く
 ある時は自惚れ鏡に励まされ
 初釜へずらりレデイの揃い踏み
 早起きの母のリズムに乗せられる
 幸せを小分けし入れる冷凍庫
 小判鮫みたいに離れない二人
 最高の笑顔化粧に勝るもの
 指切りの果せぬままに梅さくら
 時どきはブレーキかけて振り返る
 病む地球逃れ火星に棲む嘶
 飲めまずと書いてあるので手を洗う
 ふっ切れてああ美味いめし青い空
 神さまのB面にみる戦好き
 癖でない本音なんですドッコイシヨ
 幼な児を見つめて心ピュアになり
 強い仏優しい仏祈りの道
 守護神に身柄あずけて舞うワタシ
 仰ぐもの心に持って迷わない

兵庫県	西宮市	大阪市	東京都	倉吉市	堺市	大阪市	大阪市	熊本市	弘前市	堺市	河内長野市	唐津市	交野市	堺市	大阪市	堺市	米子市
大谷	牧	本	岸	淡	西	津	津	岩	今	志	村	宗	森	宮	渡	矢	野
幸次郎	富喜子	満津子	あやめ	ゆり子	りつえ	なぎさ	柳伸	たず子	康子	愁女	千代	直樹	水笑	弘風	かりん	さと美	なみ

年金の減った分だけ遅く起き
 子育てのページに残る感嘆符
 阿呆にはなれぬ阿呆で胃痙攣
 少年の笛アンデスの空をゆく
 欲を捨て自然の摂理身をまかす
 金次郎マルクス読めと父が言う
 いい風がページめぐりに来るだろう
 逆らわぬ老妻に結局牛耳られ
 両の手で掴みたいもの残ってる
 ぬくもりが肌に伝わる母の愛
 だんじりの屋根で八の字描く団扇
 生涯を学ぶ人生さわやかに
 感性を磨いています川柳で
 岸に佇ち波の鼓動に諭される
 笑顔って心が咲いているんだね
 もしかしてさつき拾ったのは未来
 自問自答しながら歩く風の辻
 拾い主居ぬ人生の落としもの
 程合いの距離で絆をほころばす

倉吉市	鳥取県	尼崎市	米子市	香芝市	倉吉市	岸和田市	和歌山市	桜井市	岸和田市	吹田市	唐津市	唐津市	唐津市	和歌山市	羽曳野市	高槻市	東京都	八尾市
山	谷	長	八	大	最	土	松	河	原	大	井	久	仁	山	徳	田	後	宮
中	口	浜	木	内	上	橋	尾	合	谷	上	保	部	口	山	中	藤	崎	
康	次	美	千	朝	和	房	和	茂	篤	勝	正	四	三	み	千	早	シ	
子	男	籠	代	子	枝	枝	香	雄	子	視	劍	郎	子	つ	莞	智	マ	

肘枕して夢見てる膝枕
 日本海パノラマにして砂丘の湯
 孫といふ鏡が一人笑ってる
 思ひ出をそれぞれ秘める皺の数
 カラオケで愛だ恋だと唄う古い
 星空の彼方にきつとある居場所
 カレンダー私一人の伝言板
 曲がり角スロークライフに切り替える
 三猿の逆したたかに生きている
 還暦の迷う心に残る夢
 土に落ちた汗が明日を実らせる
 気がつけば平均寿命越えている
 大注連に威風溢れる千年樹
 父母に見せて上げたくなるテレビ
 切り札を伏せて反論きいている
 今以て追いかけている青い鳥
 日向ぼっこなどと倅せすぎる時
 平凡の自覚をさせるにぎりめし
 チャットより笑顔に弾んでいる会話

箕面市	弘前市	海南市	堺市	羽曳野市	寝屋川市	大阪府	鳥取市	和歌山市	松江市	豊中市	岸和田市	豊中市	京都府	寝屋川市	出雲市	青森県	鳥取県	泉佐野市
出口	相馬	榊原	山本	吉川	坂上	桑田	小林	上地	小川	安藤	雪本	山門	丹後屋	山本	久谷	小寺	石谷	山本
セツ子	銀波	秀子	半銭	寿美	高栄	ゆきの	由多香	登美代	注湖	寿美子	珠子	夕ミ	肇	三郎	まこと	花峯	美恵子	蛙城

星月夜遙かなひとと酌み交わす
 しあわせを紡ぐ夫婦の宿浴衣
 秋風に教えてもらう現在地
 うら表くるり返せば出る答え
 私の川ときどき流れ速くなる
 好きなこと午後のリズムはごーしちご
 たおやかに舞い納めたし終の道
 泳がずにプール歩いている余生
 風向きで聞えなくなるいい耳だ
 舵もたぬ男とくらし秋刀魚焼く
 夕日見に行つたまま拉致されたまま
 キャンパスで若さを貰う散歩道
 下むいて歩くお喋り下手だから
 ぶかぶかドンドン真っ昼間のマーチ
 埃ニンマリ大好きな風に添う
 少年の背びれ自力を起ちあげる
 白寿だね百寿だね手をつながれる
 この天で展くわたくしの個展
 たくさんの縁を詰めた宝箱

川西市	尼崎市	大阪市	吹田市	西宮市	和歌山市	西宮市	鳥取市	小野田市	大阪府	東大阪市	東大阪市	藤井寺市	鳥取市						
西	田	西	山	山	楠	奥	上	石	八十	指	安	楠	中	中	中	中	中	中	中
内	辺	出	本	本	見	田	田	川	田	宿	永	昭	原	原	原	原	原	原	原
朋	鹿	楓	希	義	章	み	俊	侃	洞	千	春	昭	汲	み	み	喜	喜	盛	宣
月	太	楽	久	子	子	子	路	洞	庵	枝	子	子	香	子	子	与	与	桜	子

発芽視るメガネを二つ持ってくる
 陽がのぼる何と神々しい瞬間か
 いつか飛ぶ長い助走路から学ぶ
 体中信号が来る老いの日々
 見果てない欲が女の奥にある
 三代を生き抜きました笑い皺
 階段を拭き終わったら旅に出る
 恋人はいるかとおばあさんが聞く
 群れるのは不得手ひとりの空を見る
 呑み込んだ言葉心でさわがしい
 シベリアの悪魔がよぎる終戦日
 足の爪この手で切れるありがたさ
 赤トンボ君等もすぐに群れたがる
 自己主張すこし足りないバラの花
 正直に本当を言えば角が立つ
 天秤の傾く方へ寄りたがる
 梅肉をちよろちよろ舐めて頷いて
 自分史を書いて傷口まで見せる
 私発私へ還る愚痴の山

岡山県	松江市	松江市	鳥取県	吹田市	鳥取市	尼崎市	武蔵野市	大阪市	吹田市	岸和田市	東大阪市	京都市	出雲市	西宮市	寝屋川市	鳥取市	鳥取市	鳥取市
富坂	銭山	川本	盛田	須磨	富山	松比	亀井	岡本	木下	岩佐	谷口	高島	園山	西口	北田	吉田	國森	吉田
志重	昌枝	畔	夢路	活恵	檳榔樹	比ろ志	円女	久峰	敏子	ダン吉	啓子	多賀子	いわゑ	一笑	一子	弘子	武子	孔美子

愛染帖

波多野五楽庵選

富田林市 池 森子

黒髪の妖しきまでに寒の月
私にわたしが餓える秋最中
締め直す秋から冬へ靴の紐

和歌山市 木本 朱夏

自転車が壊れて秋がまだ来ない
十一月の蟻よそろそろ休まないか
自爆する覚悟で熟れる木守柿

弘前市 高瀬 霜石

大丈夫わたくし転び上手です
のどぼとけ苦い言葉が好きになる
パンなんて食えるかアンパンは好きだ

富田林市 片岡智恵子

これ以上書けば誰かを傷つける
口紅を落しひとつの偽証罪

藤井寺市 高田美代子

涙腺が潤潤として雨催い
慰めてくださる方を募集中

弘前市 高橋 岳水
哀楽の時を糾いつつ生きる
窓の灯に貰う男の着地点

弘前市 斉藤 劼

無駄口はひとつも吐かぬおじぎ章
木枯しの音に馴染んでいく背骨

和歌山市 桜井 千秀

追いつける距離で諦めまた付かぬ
一握の砂から洩れてくる呟き

八尾市 村上ミツ子

もう少し秋とおしゃべりしたいのに
生きる意味知らないままに黄昏れる

尼崎市 長浜 美籠

無防備なわたしになれるのは私
神さまの隙を狙ってみることに

和歌山市 楠見 章子

ずるずると生きて切り取り線の中
愛煙家の化石はきつと黒からう

大和高田市 鍛原 千里

ためらいを持たず流れる人の川
鍋一つ茶碗ひとつの水の音

西宮市 門谷たず子

矢印から矢印冬に来てしまふ
寝屋川市 籠島 恵子

和歌山市 古久保和子

象形文字伸びて縮んで現在地
睡りたし紅葉の中で青空で

尼崎市 春城 武庫坊

おもい切れずに私好みを買ってくる
尼崎市 春城 年代

吹田市 岩屋 美明
脚本の裏も読まれていた迂闊

弘前市 福士 慕情
羯諦ギヤーンテイ鳥と朝の経を読む

守るものあつて大人の貌でいる
八王子市 播本 充子

上には上下には下のある暮し
尼崎市 田辺 鹿太

温度差があつて続いた五十年
大阪市 前たもつ

くもりのち降るも降らぬも万華鏡
和歌山県 三宅 保州

それぞれの基準で嘘を聞かせ
唐津市 仁部 四郎

前向きで三日坊主を繰り返す
唐津市 井上 勝視

じつくりと煮つめた辞書を子に残す
倉吉市 米田 幸子

何もせぬ事が一番むつかしい
富田林市 大橋 鐘造

蛍光灯花屋が秋を閉めている
西宮市 牧洲富喜子

ひと言が過ぎて波紋に裁かれる
今治市 塩路よしみ

晩成の夢は捨てないかたつむり
日立市 加藤 権悟

様々な矛盾抱えて自転する
高槻市 乙倉 武史

一握の砂にも混じる運不運
和歌山市 武本 碧

寝屋川市 森 茜
柿右衛門好みの木の葉屑に降り

出雲市 園山多賀子
車椅子プラス志向の風が押す

高知県 桑名 孝雄
なやましくない煩惱談義やつてます

奈良市 米田 恭昌
訥弁の中の小骨が突き刺さる

交野市 田岡 九好
表六とすればすべてが腑に落ちる

弘前市 宮崎ヒサ子
火照る日はひんやり感の柿が好き

藤井寺市 太田扶美代
言い訳に青い木の実をボンと置く

和泉市 横山 捷也
浮き雲に似てふんわりと生きている

鳥取市 土橋 螢
約束をしていないのに春がくる

岡山市 井上柳五郎
平等に年に一度は歳を取り

大阪市 川原 章久
思い出に浸るとうどん伸びている

西予市 黒田 茂代
ふっされて何で悩んでいたんだろ

東京都 清原 悦子
何もなない場所で充電して帰る

弘前市 相馬 銀波
温度差を埋めた献盃かも知れず

奈良市 矢野 良一
正論を吐き仲間から孤立する

海南市 谷口 義男
年金が肩代りする扶養義務

八尾市 井尻 民
生涯を堪えた履歴は語らない

八尾市 吉村 一風
生かされて生きて夫婦のなお模索

奈良市 乾 春雄
ほめられて天狗になる子にはかむ子

倉吉市 山中 康子
泣き虫にとつときの顔用意する

鳥取市 夏目 一粋
これでもかこれでもかあと突き放す

松原市 玉置 重人
心配は夫が伝書鳩になった

黒石市 相馬 一花
激突の兆しみなきる静電気

弘前市 岡本 花匠
こはれ萩叶わぬ夢に堪え忍ぶ

三田市 久保田千代
泣きごとと言わず明日を待つ鏡

八尾市 高杉 千歩
リモコンを片手にうつつ冬炬燵

鳥取市 岸本 孝子
有頂天川の深さに気付かない

大阪府 澤田 和重
はた目には見えぬが心飢えている

和歌山県 辻内 次根
新しい知識を詰める空の箱

唐津市 田口 虹汀
西ノ浜から出雲へ送るのが供日

大阪市 小谷 集一
徒手空拳誇りを持って生きている

生駒市 飛水ふりこ
常識も人それぞれに誤差があり

三田市 辻 開子
結論を出してしからの悪いくせ

和歌山県 中後 清史
イニシャルの記憶を辿る古日記

米子市 白根 ふみ
時が過ぎ未完のままで風化する

堺市 桜沢 千世
実のならぬ加減乗除をくりかえす

松原市 小池しげお
一斗かどうか疑う一斗櫛

和歌山県 森下 順子
テレビつけて一人の家を賑やかす

四條畷市 吉岡 修
体裁を整えたつて砂の城

八尾市 田邊 浩三
一生の願いにしては小さすぎ

西宮市 西口いわゑ
秋の天筆一本もあれば好い

札幌市 三浦 強一
楢山のチラシが派手になつてくる

富田林市 中井 アキ
感性の違うあなたの手を握る

東大阪市 北村 賢子
そんなにもあつさり別れられますか

和歌山県 柏原 夕胡
泣いて笑つて時々拗ねるのが女

藤井寺市 鈴木いさお
知らぬふりすれば良いのにおせっかい

横浜市 金森 徳三

もつたいないもつたいないと日を送る

和歌山市 福本 英子

ジョーカーがきたらゆつくりワイン飲む

大阪市 神夏磯典子

追い越すのはゴール手前におこう

羽曳野市 吉村久仁雄

泣きは僕笑いは妻のワキとシテ

砂川市 大橋 政良

出世して出世払いが来なくなり

西宮市 片山 忠

何となくけだるい午後の口喧嘩

藤井寺市 若松 雅枝

聞えないはずだ電池が切れている

鳥取市 武田 帆雀

痛いほど握る手選挙近くなる

奈良県 渡辺 富子

神田川の恋がちくちく胸を刺す

鳥取市 土橋はるお

中立の男じゃ不甲斐ないですか

岡山県 山本 玉恵

赤を着て見ようか運が向きどうな

松江市 川本 畔

約東の小指なやみが深くなり

弘前市 櫻庭 順風

転校のハンディにめげず捨くれず

大阪市 星野さらり

お見事と笑いとばそう物忘れ

大阪市 小泉ひさ乃
思いがけない別れに涙脆くなる

高槻市 田中千莖子

尼寺へ思わせ振りな冬の蝶

大阪市 津守 柳伸

なにかある天気予報にかじりつく

八尾市 宮崎シマ子

物が溢れて地球の底は空っぽに

鳥取市 上田 俊路

無人駅で未来を待っている男

海南市 堂上 泰女

八合目あたりで山に試される

米子市 青戸 田鶴

わびしいと感じる時は旅に出る

安来市 原 煩悩児

右顧左眈やつぱり僕は臍曲り

河内長野市 植村 喜代

鈍行で旅する夢も消えました

岸和田市 土橋 房枝

想い出をシュレッダーする勇氣なく

高知市 小川てるみ

人前で泣くには勇氣いりそうた

美祿市 安平次弘道

逃げ道があるから強いことが言え

和歌山市 田中 みね

出る杭が打たれ孤独の風に会う

大阪府 三浦千津子

真心でもつれた糸を解きほくす

大和郡山市 坊農 柳弘

やさしさをじっくり煮込んである土鍋

唐津市 宗 水笑
質問の席では偉くなる野党

唐津市 市丸 晴翠

育児書の役は電話の母の声

鳥取市 美田 旋風

お人好し相槌ばかり打っている

鳥取県 石谷美恵子

他愛ない話小春日浴びながら

枚方市 海老池 洋

がたの来た鬼に敵しい冬の陣

鳥取市 福田 登美

健康の自負に潜んだもの忘れ

三田市 堀 正和

始末書の見本課長は持っている

吹田市 太田 昭

やんちゃくれに心の鍵を開けておく

鳥取県 佐伯 やえ

起きしなのリハビリ十分物を言う

岸和田市 雪本 珠子

交わって視野がだんだん広くなり

池田市 栗田 久子

一品は絶品だった蟹の宿

河内長野市 坂上 淳司

釣り上げた鯛の寸法また伸びる

大阪府 板東 倫子

韓国産でも松茸は松茸だ

倉敷市 撰 喜子

母さんの叱言短く胸をつく

鳥取市 録沢 風花

母さんが一番偉い三世代

■句集紹介

井上桂作川柳句集

たびの川柳

田中正坊

この句集の著者は、本誌十一月号に掲載されたエッセー「話題の多い中国」を読んだだけの未知の方が、しばしばツアーに出かける私と同好の士とあって、編集部から執筆を依頼されたことをおことわりしておく。

「旅と川柳」と言えば、黒川紫香さんの句文集「むらさき」に、北は北海道から南は沖縄まで「日本よいとこ」と題して各地の情景を詠んだ川柳が収録されている。今は亡き正本水客さんで行き当たりばつたりの旅の記録をまとめたものだが、居ながらにして日本を一周しているようで楽しい。

「たびの川柳」はこれと違って、その対象がすべて海外で、著者がかつて西ヨーロッパを旅行中、スイスを案内された女性からの「ツアーは外国の歴史・文化を吸収するチャンスである」というアドバイスにより、訪れ

た主要八か国の思い出を川柳に詠んだもので、これまでは読者として川柳の面白さを満喫していたのが、それ以来、読む楽しみ、作る楽しみの両方を味わうようになったと、はじめに述べている。

句集は、西ヨーロッパ紀行をはじめとして十章に分かれ、三回にわたる中国紀行からオーストラリア、北米、イタリヤ、東ヨーロッパ、ロシア、エジプトと、ほとんど世界各地にわたっており、全部で二百句がそれぞれ二行ずつの簡潔な文とともに綴られ、川柳で詠む世界紀行となっている。

実は私も、これまでに二十回にわたって海外ツアーを重ねており、この句集に詠まれた多くの国々を訪れて句を作ってはいるが、旅の句は易しいようで実は難しい。三脚をすえてじっくり撮影するのはなく、見るもの触れるものをスナップショットで写すので、どうしても一人よがり終わってしまい、伝達性のある作品に仕上げられないことが多い。

その点ではこの句集は、すべての句に文が付けられているので、それと併せて読めば情景や風物がくつきりと浮かび上がってくる。そこで鑑賞というと、とても私の手に負えないので、通読して印象に残ったいくつかの句

と文を抜粋して、句集紹介の責めを果たさせていただくことにする。

行く年や列車の中でおめでどう

ジュネーブ駅から国際列車でパリへ向かう仮眠中、「おめでどう」のアナウンスに起こされる。

ある時は血で血を洗う紫禁城

現在は故宮の名で全体が博物館になっている。なにしろ明・清王朝一千四代の皇帝が住んでいたお城である。

代わるがわるコアラを抱いて皆笑顔

そつとコアラを抱いて喜んでゐる。可愛さのあまりきつく抱き締め、鋭い爪で怪我をしたご婦人もいた。

ロッキーマンの各所に残る大水河

カナディアン・ロッキーマンと呼ばれる山々がいくつも見られる。いずれも頂上は、鋭い岩石の尖った山から成る。

サンマルコの広場はサロン世界一

いろんな人種の人々が、自由におしゃべりを楽しんでいる。各種のショーもみられ、千円のコーヒードで時間を過ごす。

冷戦の悲劇始まる高い壁

敗戦後のドイツは連合国により分割統治された。壁は今や名所となっている。

誹風柳多留二四篇研究 74

大野 秀二・橋本 秀信
粕谷 長生・小栗 清吾
山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

589 氣のはれた仏事三月十五日

大野 三月十五日は梅若忌。気が晴れるは、鬱屈した心がきれいになる。気分がすっきりする。気が開く。

陰暦二月十五日は現代の暦でいえば四月半ばにあたり、春爛漫で桜花満開、春風駘蕩の気持ちのいい時節、で仏事といっても気が浮き浮きする。まして、その後吉原へでも回ろうとの考えがあればなおさらのこと。

去年三月十五日からのとら 安八礼8

十五日是でおがめと十手でいふ 明五信3
小栗 贊。雨の降らぬ日もあるか。

橋本 贊。仏事といつてもお祭り「とし毎に参詣多し、かりの葭簾茶屋、餅酒でんがくの軒をならべ、花方のわたし牛御前の下陰より、

商家で雇人を解雇して上方へ帰すこと。
吉原の遊女は付けまわし、かなり高級な遊女で、そこへ通う客は呉服屋の手代か。金使いの荒いことが見付かり、いずれ解雇されて上方へ帰る付けのほせ。

遊女と客ともに「付け」があり、対照となつてゐる。

三分にはちつと毛のたらぬ付け廻ハし

莖一34

つけ登せかつこうものにくらいこみ

六39

山田 贊。「つけ」の対比をねらつた句。

清・佐藤 贊。

591 稲つまハくもをゑくつてとつか行

大野 いなづまがピカツと光つて雷雲を買い
たかと思うと、後は光らずにどこかへ行つて
しまった。稲光だけで雷鳴がない場合である。
う。

稲妻の切先みたり戸のすき間 二二丙26

いな妻の其行先たつねれハ 宝八915

いなづまは山を見せたりかくしたり

四六6

橋本 贊。雷鳴は特にこだわる要はないだらう。

清 繰々経験する情景。
佐藤 賛。

592 傘と下駄及びかつはもかりてくる

大野 外出の途中で俄雨に合ひ、知人宅に傘借りに寄つたが、傘だけでなく下駄や合羽も借りて帰つてきた。傘借りが思のある人か、または深い親戚などであろうか。破れ傘などをしぶしぶ貸してくれる句が多く、本句のような句は少ない。

傘かりに沙汰のかぎりの人が来ル 初35

ばけそうなのでもよしかと傘をかし 五15

傘でこも追欠て行くこくこん意 二四16甲

清 俄雨に遭つて、無沙汰している知人宅へ傘を借りに行くのも川柳の約束。

佐藤 賛。

593 氣にハかけられなとかける事を言イ

大野 氣に掛けるは、心配する。懸念する。こたわつて忘れない。

氣に掛ける内容がどういふことか明確でないが、粗相や失敗などをした時などに「あまり氣になさらずともよい」と言われたが、言つた相手(上司や目上の人か)が相手だけに、

そのことが反つて氣になつてしようがない。小栗 賛。相手が氣に掛けるだろうと思つたことを言う時「あまり氣に掛ける必要はないのだが」などと前置きしたりしてシヨツクを和らげる配慮をする。よくある皮肉な光景。

橋本 賛。言葉のアヤと人間の心理をうまく対比させた佳句。

清 賛。よくある事である。

佐藤 賛。

594 糸こういんねんにねこもみへる也

大野 涅槃は釈迦入滅の称で、この時の様子を描いたものが涅槃図である。涅槃に洩れたとは猫のことで、京都東福寺にある涅槃図には猫が描かれているが、他の涅槃図には猫は描かれていない。

回向院前の岡場所には私娼の金猫、銀猫がいた。涅槃図には猫が見えないはずであるが、回向院の涅槃つまり岡場所には私娼の猫が見えると、逆に詠んだ句。

回向院ぶつしやう猫の直をきかれ 傍四35
橋本 賛。「両国回向院の涅槃会には」を加えて。

清・佐藤 賛。

595 わらでたばねた娘の居るいゝ天氣

大野 薬で束ねるは頭髮を薬で束ねる。また、それをするくらいに身分が卑しかったり、貧しいかつたりするさまにいう。「わらで束ねても男は男」、「わらでしても男」などの成語がある。

髪の毛を洗つた嫁が、薬縄で簡単に束ねて、日向で髪を乾かしているところを詠んだ句と解したが、場所やどんな嫁か状況がもうひとつはつきりしない。

愛嬌を薬でたばねるあらひ髪 一四二2

小栗 「薬でたばねる」には礎檣のあげられた意味もあり、また「髪を洗つたとき薬で括らぬと親の死に目に会えぬ」という俗信もあるらしい。また川柳で「いい天氣」には多義があり、どうも一筋縄でいかない句のようにも思えるが、自説を立てえず。結局礎檣に賛。橋本 賛。うららかな天氣に髪を洗う氣になつたのだろう。

山田 礎賛。薬束でしよう。

わらたばね後口へほふるさほじ髪

清 礎檣の説明で良いのではないか。洗い髪を薬で束ねるのが当時の生活習慣だった。

佐藤 同右。

尚香のむ

政岡日枝子選

終章の端がわたしの手に触れる
 わたくしが静まるように雑草を抜く
 コンピニのおにぎり母を探してる
 淋しくてカサブランカの香にもぐる
 組もいつの傷だか忘れてる
 振りむけば屹度自分が厭になる
 とまどきは膝のあたりではたく歳
 住みにくくなった感じの古い町
 めざし三匹こだわって焼き上げる
 ファスナーがよく引つかかる秋の暮れ
 順々に咲いて小菊がはなさない
 その先は見ざる言わざるウーロン茶
 それからはいつ気種を蒔いている
 母は捨て石いつでも役を待っている
 古里の風に譲ってきた居場所
 我の強い次姉はひとりでかくれんぼ
 耳のうしろで世間ばなしに花が咲く
 そのうちにあなたも自分裏切るよ
 このまんま風に吹かれてゆくとする

藤井寺市 太田扶美代
 米子市 白根 ふみ
 大阪市 神夏磯典子
 羽曳野市 徳山みつこ
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 藤井寺市 高田美代子
 松江市 川本 畔
 米子市 青戸 田鶴
 八王子市 播本 充子
 和歌山市 古久保和子
 鳥取県 佐伯 やえ
 鳥取県 長浜 美籠
 西宮市 牧瀬富喜子
 米子市 野坂 なみ
 和歌山市 榎原 公子
 八尾市 宮崎シマ子
 岡山県 山本 玉恵
 大和高田市 鍛原 千里
 米子市 中井 ゆき

今だって心の弾む赤い毬
 縄電車孫とおんなじ呼吸する
 ひと言に和む六人部屋の朝
 花の前爪を研ぐのはもうよそご
 残照に引き摺るものが多過ぎる
 寝たきりの母を干したい秋日和
 人の道アウトセーフが難しい
 さりげない愛の詰った冷蔵庫
 青く咲きたいと言ったか青いバラ
 見落したところから広くなる波紋
 蹴つ飛ばした石がわたしに跳ね返る
 裏切りの背にしんしんと薄氷
 こころにはこころで返すありがとう
 反抗はよしましよ二人しか居ない
 下手なりに織る自分史が進まない
 生きてきた時間が答くれました
 ぱっと射す朝日に元氣みたされる
 大切な物は心の中にある
 留守番のほとけへパンフレットの土産
 気がつけばもう霜月という流れ
 亡き人との思い出たる絵蠟燭
 ラッパ水仙可愛い法螺を吹いて咲き
 裏切りを許し日記は空白に
 耳からは聞けぬムンクの叫び声
 余震なお続くわたしをもてあます

鳥取市 徳田ひろこ
 愛媛県 花岡 順子
 和歌山市 福本 英子
 西宮市 西口いわゑ
 堺市 山本 半鏡
 八尾市 生嶋ますみ
 鳥取市 福西 茶子
 富田林市 片岡恵子
 堺市 矢倉 五月
 和歌山市 桜井 千秀
 和歌山市 柏原 夕胡
 倉吉市 野口 節子
 鳥取市 岸本 孝子
 米子市 小塩智加恵
 鳥取県 石谷美恵子
 寝屋川市 籠島 恵子
 香芝市 大内 朝子
 米子市 足立由美子
 八尾市 高杉 千歩
 鳥取市 録沢 風花
 西宮市 門谷たず子
 富田林市 古田 千華
 池田市 栗田 久子
 和歌山市 武本 碧
 和歌山県 森下 順子

健やかに育て受難の優太ちゃん
 いい話自慢するよでやめておく
 流れ雲子を待つているつるし柿
 雑草の明日へと伸びるしたたかさ
 掌をあわせ心の渴き癒される
 信号よ青に替われとつぶやいた
 怠けては付いてゆけない蝸牛
 一角くずれ緊張の真つ最中
 画用紙にはみ出る虹がもう書けぬ
 ちよっとだけ勇気出したら解ける謎
 人知れず白バラだつて燃えている
 妻に背を押され地域の輪にはいる
 激震に少しいびつな月残る
 すんなりと生きてきたのかいいお顔
 鍵かけて隠すもの無し気の楽さ
 頂いた機会大事に今活かす
 マニキュアの爪を汚して牛蒡好き
 その穴に落ちると虫にたべられる
 きれいな眼未来はどんな虹を見る
 我が心洒れて情けに甘えてる
 朝市の籠のきゅうりは笑つてる
 菊花展中折帽の父の影
 老人と世間話ではやる医者
 情熱が余生を背伸びさせている
 次々と職を見付ける笑顔よし

和歌山市 田中 みね
 高知市 小川てるみ
 今治市 塩路よしみ
 芦屋市 黒田 能子
 鳥取市 奥谷 彩子
 米子市 澤田 千春
 米子市 木村 春枝
 倉吉市 山中 康子
 米子市 木村富美子
 生駒市 飛水ふりこ
 熊本市 永田 俊子
 八尾市 井尻 民
 三田市 久保田千代
 倉吉市 淡路ゆり子
 松江市 兼本 政子
 熊本県 岩切 康子
 堺市 志田 千代
 大阪市 川久保睦子
 境港市 遠藤那珂子
 鳥取県 土橋 睦子
 西宮市 緒方美津子
 尼崎市 春城 年代
 大阪府 米澤 俣子
 鳥取市 福田 登美
 寝屋川市 平松かすみ

損得の話元氣を取り戻す
 前向きの笑顔やっぱり美しい
 波がしら少女に還つて笑いこけ
 中間に笑いを入れて授業
 長老にルールは有つて無いような
 木犀のかおりの中で深呼吸
 丁度よい体重計の針の位置
 草でさえ一度は咲かず花がある
 落日の中に捨て身で浸りたい
 母がいてその母がいて生きてきた
 姿見に体映して亡母が見え
 娘がくれた年玉曾孫へ包みかえ
 私の話たっぷり聞いて風ぐ
 無人駅内緒話を風とする
 襖絵に花のワルツが弾んでる
 八つ当りベットの猫も姿消し

和歌山市 楠見 章子
 大阪市 星野きらり
 米子市 林 瑞枝
 倉敷市 井上 富子
 出雲市 石倉美佐子
 東大阪市 佐伯 光枝
 大阪市 大川 桃花
 大阪府 小栢こずえ
 神戸市 山田婦美子
 米子市 池尾 保子
 三田市 辻 開子
 八尾市 田中トシエ
 東大阪市 笠井 欣子
 東京都 清原 悦子
 海南市 堂上 泰女
 大阪市 本間満津子

扶美代さんの句―自分の暮は自分で降ろすと思ひながらも、まだまだ遠いはずの終章の端が、ちらちら手に触れだした。諦めのような、重いかなしみのような心理がうまく表現してあると思う。ふみさんの句―説明のいらぬ素直な句であると思ひながらも、ずっしりと心の底に静めなければならぬ何かがあるのだと、その陰影に惹かれる句である。典子さんの句―温かみのある素直な句である。おにぎりは母とは切つても切れない分身のようなもの。母への追憶に耽る一瞬ではなからうか。みつこさんの句―カサプランカの香にもぐるというちよつとしたウイットは女性の匂らしい風情がある。花には花の知恵があるもので、潜っている間に何かがきつかけになって、人生楽しく変わるかも知れない。

方

山本 玉恵選



方言を勲章にして農を継ぐ
 方向が決まらぬ風見鶏のうつ
 形よく生きる方法模索する
 方便の嘘年輪も体重も
 金婚も方向音痴の昨日今日
 方角が悪い西向き窓の部屋
 方程式どおりにかぬからドラマ
 読み方の違いで日本語恥をかく
 風船が逃げた方から冬が来る
 優柔不断手の鳴る方へ媚びている
 方向はどちら向いても金詰り
 恋の道解けぬ方程式に似る
 容疑者の行方にデカの靴が減る
 処方箋いのちをつむぐ糧となり
 方言をほどよく入れる日と和を計る
 死に方の話も洩れる日向ほこ
 両方の手にぶら下がる宝物
 妻という方程式がまだ解けぬ
 太陽が好きで迷いのない行方
 方便の嘘を許さぬ子供の日
 方向音痴のわたしを嘘う昼の月
 描くほど夢が膨らむ方眼紙

青生 五月 保州 銀波 英 典 柳 度 正 美 花 一 慕 一 淳 弥 強 寿 充
 子 月 子 波 旺 子 弘 雄 明 匠 粹 情 司 生 一 美 子

二次会は旗色のいい方へつく
 方針は立てても根気が続かない
 自然体風の味方があればいい
 地下を出て迷ってばかり西東
 崩れない政治と金の方程式
 これも日本語方言に戸惑いぬ
 方便の妻の芝居に助けられ
 方向は違いがみんな生きている
 エプロンをしている方が社長さん
 方円の器に馴染まない頑固
 方便の嘘が勝手に走り出す
 行き先は決まらず世間の風に舞う
 親も子も方向音痴のDNA
 神の指す方へ歩いているつもり
 双方の顔を立っていたいヤジロペー
 佳
 未来地図夢埋めてゆく方眼紙
 君の居る方が私の恵方です
 両方の意見に神も思案する
 快方へ向かい家族の軽い口
 ケータイが行方不明にしてくれぬ
 人
 恵方から選んだ嫁に敷かれてる
 地
 方法がないから笑ってごまかそう
 天
 空間の方位に秘める釈迦の指
 軸
 この辺で方向転換して見よう

旋風 尚士 活恵 たず子 俊代子 美代子 清史 可住 可住 像山 ミツ子 悦子 倫子 扶美代 重人 晴翠 あずき 妻子 昌鼓 宏章 武史 千里 森下愛諭

敏腕の部下がポストを脅かす
 丸が好き赤いポストも卓袱台も
 別れの予感今日もポストに音がない
 昇り詰めたポスト冷たい風に遇う
 仮名文字の母の便りを持つポスト
 譲られたポスト土下座の謝罪から
 ポスト諸君どう思われる民営化
 ポンポンとポストたたいて頼みます
 行革の狭間で嘆いてるポスト
 通信の干の字すっかり融けている
 嬉しいネーまるいポストが残ってた
 口ポットが僕のポストを狙ってる
 不況時代上のポストをみな嫌い
 民営化赤いポストも落ち付けず
 もう一つ上のポストに届きそう
 Eメールで済ませポストへ歩かない
 悲しい便りポストが抱いて暖める
 引き際の美学静かに去るポスト
 ポストは赤と誰が決めたかありがとう
 投函のポストは愛の風になる
 三代目すこし揺らいだポスト継ぐ
 重いポスト就いて仲間が居なくなり

玄也 ひさ乃 千里 庸佑 志華子 正雄 保州 一風 柳弘 隆盛 美代子 恭昌 一壺 度 順子 のり子 俊子 春雄 円女 権悟 彩子 遠野

ポスト

川原 章久選



事件現場ポスト見ていたミステリ
一族がポストを占めてきた落ち目
譲られた椅子に画鋲が置いてある
嫁からのメールに返事ポストまで
携帯の電波ポストを越えてゆく
迎春のポストふくらむ春の音
長寿の嘆きポストに瘦せた年賀東
ポストの首はずんでなにか良い知らせ
生きて行くアンテナポストかも知れず
経験を活かすポストにやつと就く
大臣のポスト派閥を振り分ける
外されてポストの威力思い知る
同期でもポストが違ふ太い紐
ケータイのお蔭スリムになるポスト
自分宛の手紙を出してみるポスト

天辺のポストで胃ぐすり飲んでる (簡) 富子
やつと手に入れたポストの堅い椅子 寿美
合併のポストがひとつ空けてある 螢
ポストの中でまた泣いている喪の手紙 ヒサ子
絵手紙の金魚泳いでいるポスト 強一

一枚のポストカードが発火点
片足を上げる仔犬を睨みつけ
天 地

温もりのポスト一会の風を抱く
軸 森下愛論

O、K、とポストお腹で返事する

たもつ

可住

清史

俣子

旋風

敏子

三代子

愁女

銀波

ヒデコ

一知

雅明

慕情

蜂朗

半覚

掴む

富士 慕情選



小さな手に命掴んだ優太くん

鮭掴む笑顔が鮭に侮られ

やつと掴んだ薬一本を光らせる

斬られ役虚空を掴む嵌り役

おでん屋の湯気に掴まる年金日

四コマで掴む世相で職がない

特ダネを掴んだベンが弾み出す

万馬券掴み損ねた紙吹雪

風ばかり掴んで運をまた逃がす

札束を掴む平常心消える

掴み取り十指に欲の皮が張る

掴むのは何マニキュアの見事な手

とりあえずトカゲの尻尾だけ掴む

肉ジャガでハート掴む気の女

娘のハート掴んだらしい彼が来る

掴んだら離しはしない赤い糸

良縁を掴んだらしい金婚譜
ヨン様ハート掴んで離さない
ベアルックしつかり君を掴んでる
わたくしは掴まったのかつかんだか
移り香で妻にしつぽを掴まれる
雲掴むでつかい夢に酔いしれる

雲掴む話にこれに聞いている

汗くさいタオルが掴む土の幸

大空を掴めと父の肩車

転んだら石を掴んでも起きる

大凶を掴んだ運の強いこと

リハビリを重ねも一度掴む筆

ねたきりの視線わたしを掃さない

薬掴む思いで母の百度石

やつとこきコツを掴んだ逆上がり

ミヨちゃんにわざと掴まる鬼っこ

やんわりと掴んだ愛が発芽する

また一人虹を掴むと鳥が出る

掴まえたはずの女に縛られる

灰汁抜けば掴みどころのない男

幸せを掴むと消えるシャボン玉

キャッチされ論吉が消えた夜の街

縄の端はなごめ妻がいてくれる

胸ぐらを掴んだ方が負けている

情報をも掴む大きな耳を持つ

太陽を掴みに行つて火傷する

ふるりの風が掴んだ後ろ髪
かたつむり虹を一色ずつ掴む
命綱掴む奇跡はきつとある
無意識に掴んだ糸が赤くなる

理恵

哲男

彩子

善信

保州

五月

みつこ

志華子

正和

克治

富子

正雄

尚士

柳弘

かずみ

遠野

岳水

たもつ

典子

章子

強一

霜石

初歩教室

題一 正月

三宅保州

今年も多くのの方々のご投句で当教室を開くことができました。川柳を続けられることをお互いに喜びたいものです。今年も時には手厳しい批評や添削をすることもありますが、上達して佳句を作っていたいただきたい一念のこととしてご寛容賜れば幸甚です。

【説明・報告調の句】

課題の「正月」から考えられる発想、連想は誰しも同じことが多く、それを一般的な表現等で作句するところでも同想句になり、説明、報告調のいわゆる「そうですすね」的な句になりがちなものです。難しいことですがそれを超える発想や表現を目指しましょう。お重詰めお年玉入れ年明けの 元日の計は三日で忘れられ お正月家族揃つてハイポーズ 正月に誓う言葉は今年こそ

忠子 松

正月はテレビやゲームで暮れて行く 順子
正月は孫が喜ぶお年玉 (河)洋子
お正月あつという間に過ぎて行く 光枝

【添削・批評句】

原 年金減り年玉いらぬ言つてほしい綾乃
字余りでリズムが悪くなっていますね。
添 年金が減つて大変お年玉
原 お正月家中のスリッパ勢揃い 青生

添 家中のスリッパ揃うお正月
原 避難先で正月迎える人もいる 秋星
添 避難先で初春を迎える人もいる
右の二句は中八です。中七にする習慣を身につけましょう。初春は「はる」と読みます。原 あてもしないのにやつて来る正月 利子
少し組み替えるともリズムが良くなります。

添 お正月当てもないのにやつて来る
原 顔写真つけた賀状が一つ増え 千代子
添 顔写真一人が増えて来た賀状
原 元日がお誕生日で鯛一尾 宇乃子
下六音字、一尾はあえて詠まなくてもよい。

添 誕生日の元日鯛にケーキ付き
原 はやばやと新札をかえ笑顔まつ タカ子
必ずしも正月の句とは言い切れません。
添 新札の出番が多いお年玉
原 おめでどう一人増えますお正月 アヤ子
誰が増えるのか詠む方が場景が見えます。

添 新しい孫が主役のお正月
原 不景気でおせちの数が一つ減り みね代
数は不要。おせちもとすると不況が広がる。
添 不景気でおせちも一つ減りました
原 地震テロ台風なき様祈る今年こそ道子
二十六音字にもなる破調です。

添 災害のない新年を祈ります
原 楽しみの賀状々々四苦八苦 開子
「書けば来す出さぬとくれる年賀状 万彩
郎」という句も参考にして下さい。

原 寝正月抱負だけなどピカいちで 俊子
添 寝正月だけ抱負は光つてる
原 やんちゃ坊かしまつておめでどう 信子
添 おめでどうやんちゃ坊主もかしまり
原 酒断つてお神酒の見えぬお正月 清
添 酒断つてお神酒も見えぬお正月
原 初鏡身をひきしめて紅を引く 志津子
添 紅引いて身も引き締まる初鏡
原 正月のわくわく気分胸の底 英旺
添 何となくわくわくとする三が日
原 昔より風情無くなる正月に 真一
添 正月の風情たんだん消えてゆく
原 若者よ正月だけはラーメン止め 雅代
添 正月もラーメン食べる若者よ
原 普段着で神社参りのお正月 かずみ
添 普段着で氏神様へ初詣で

原 お正月はあやく来いと願つた日 フジ
添 お正月待つたところが懐かしい

原 福袋母娘で買いに初夢を ミヨノ
添 初夢は家族で買った福袋

【少し工夫すれば佳くなる句】
原 和洋中おせち料理の三世代 喜子

添 三世代住んでおせちも和洋中 映子
原 しめ飾り今年も絢える倅せを

添 しめ飾り今年も絢える幸思う 美紗子
原 年明けの順を待つてる年賀状

添 元旦を郵便局で待つ賀状 昇
原 元旦に動いています手も足も

添 手も足も動いていますお元日 淳司
原 お正月たかが日付けが替わるだけ

添 一日に変わりはなすがお元日 幸
原 警沢な正月守る杵の餅

添 正月のしきたり守る杵の餅 章司
原 年金の家のしめ縄小振りです

添 しめ縄も小振りになった定年後 れんげ
原 乙酉また出逢つたね七路坂 いさお

原 一合を妻と分け合い屠蘇祝う 節子
原 新旧の絵馬にふれ合う初詣で

【佳句】
正月だからではありませんが、今年の「佳句」は二十四句、「推せん句」は四句にもなりました。皆様は成長振りが窺えて心強い限

りです。この調子でご健吟をお祈りします。

風揚げもやがて伝統芸となる 昌紀
正月は風と羽根つき見たいもの たん吉

シドニーの方だけに実感が伝わってきま
す。

国内でもめつつきり減つて淋しい限りです。
朝酒の癖ひきすつて小正月

許されて正月だけの酒二本 好
定位置を孫に取られておせち食べ

お正月母の着付けで行くデート はじむ
浪速つ子正月でさえ急ぎ足 千華

年玉に一葉の本そつと添え 美義
喪中につき冬眠してのお正月 典子

一年へ力蓄え寝正月 夕胡
被災者にも良いお正月来ますよう

正月は過疎の神社も目を覚まし 政子
初詣で年々増える願いごと 益子

お願いのたびに手を打つ初詣で 孔一
凶のくじ枝に残して初詣で (高)洋明

正月が過ぎていつもの鍋と蓋 弘子
黄身一つ春から縁起よしとする 准一

血糖値後日調整二箇日 像山
元旦の計そのままに除夜の鐘 時雄

元旦は賀状見てから一眠り イセ
お正月今日も働く人が居る 賢治
正和

まつさらなバジヤマでひとり寝正月 徑子
正月も老々介護休みなく 藤朗

門松に今年も見栄を飾りつけ 那珂子
【今月の推せん句】

電気器具ですが今年も餅をつく 藤村 重之
「電気器具ですが」が何とも味わいのある

措辞ですね。白と杵で本格的に搗くことは叶
わぬが、さりとしてスパーの餅で間に合わす

ことはしたくない。せめて電気餅つき器で搗
きたいという心意気。風刺、うがち、ユーモ

アのある味わい深い句に仕立てられました。
嫁の手を借りたおせちで三が日 小塩智加恵

ほのほのとした句に心温められます。家風
伝来の味が姑から嫁に受け継がれ、それを家

族みんなで味わうという家族円満振りが伝わ
つてきます。

おせち料理にだわる母と好まぬ子 榎本 宏子
まるで智加恵さんの句と連作のような感が

します。苦勞して作ったおせちに見向きもし
ない若い世代。うがちの効いた句です。

デバ地下に正月準備まかせとく 三宅 満子
宏子さんの統編で、結局デバ地下で買い揃

える羽目に。明治も昭和も遠くなりにけり。
【私の句】
三が日昔々が甦る
生きている生かされている年賀状

秀句鑑賞

川柳ってどんなかたちにも作れて面白いな
と思つて始めたのが三十三年前前で、他の趣
味等は体力、視力、根気が歳と共に後戻りす
る。その点川柳は日本語で日本の字で綴れば
いいので私に長続きさせている要因の一つか
も知れません。一日一句日記替りになら百歳
になつても一人で楽しめるので、川柳で自叙
伝でもと大それたことを考えたりするこの頃
です。皆様もいかがですか。

今月は同人の中から出句されたのが三九一
名、句数一九七四の中から縮切り日の時間い
っぱいを頂戴して句との対話をさせていただ
きました。皆様のころろがいっぱい溢れる句
に触れていた至福のひとつとにありがとうを
申します。

知らなんだことにしとこか楽だから

内海 幸生

見てしまふ、聞いてしまふ、知つてしまふ。
興味半分だったはずが後々気の重い事にな
る。そこで策のひとつとして知らんぷりをし
ておこうと半兵衛をきめこんだのです。

同人吟 高田 美代子

— 12月号から

野良猫と同じ目付きをしよう

居谷 真理子

野良猫の性質は御存じの通りで、警戒心が
強く、人に懐こうとはしない。終戦の頃の孤
児達を思い出させて切ないものがある。

のぞみ号小さな羽根が生えてくる

播本 充子

昨年二月の旗上げから早くも一年がくる。
二ヶ月に一度の例会ながら、回を追う毎に広
がりが見えて苦勞も伝わってくる。のぞみ号
が脱線することなく発展なさること祈ります。

日の丸にグッドデザイン賞上げる

西出 楓 楽

白地に赤く日の丸染めて、これほどシンブ
ルなデザインは万国旗の中に見当たらない。
今、日の丸の由来をとかやく言うのは差し控
えておきたいと思う。

君が代も日の丸もまた無縁とや

深田 俱久

国旗・国歌に兎や角の議論をされているが、
オリンピックでは日の丸に期待してしまふ。

傘くらい買えばいいのに濡れてはる

川久保 睦子

天気予報が外れての本降り、その度に傘を
買っていてはたまらない。都合よく百均屋で
もあれば間に合うのだけれど、タクシードも
痛いし濡れて行く他はない。

白状をしなさいキツト楽になる

澤田 和重

正直に言つて褒められるとは限らないか
ら、やつぱりだまっていよう。取り調べ室の
刑事も、あの手この手で白白をさせるそうだ。
百点に遠い妻です爪を剪る

吉川 寿美

何処に行つても面倒見のよい作者、見てい
て疲れないのかなと心配してしまふ。何もか
も一手に引き受けてしまい、ふと妻の立場を
思つているところにいい味がある。

爺ちゃんの手品もどきが受けている

安永 春

孫たちを喜ばせている人気者の好々爺で
す。かつての器用さはもうないが「もどき」
でよい。

いろいろとおましたなあと晦日蕎麦

中島 志洋

一年を振り返つて今年よかつた事は何だろ
う……地球の怒りか、しつべ返しから災害も人

災も最小限にと願いながら年を越す。

理性ある方がこの世は生きにくい

山口 三千子

今昔を比べるにはあまりにも様変りした。人のころもまた然り、これでいいのかなど首を振りながら私も歳をとってしまった。

欲ばりて風船割れるまで吹いた

倉益 一瑠

もつともつと思うのは誰でも一緒、結果を気にしては前進がない。始めたら最後までを目標にしている気持ちのいい句です。

心にだけは残しておこう古い地図

門脇 晶子

そろそろ過去を思い浮かべて懐かしむ余裕も出てきた。人様に話せること話せない事も数たくさんあるが、自分の胸の奥にアルパムは仕舞っておきたい。良い生涯だったと思う時一人でしみじみとあじわいたいです。

七人の中に私もいるらしい

山下 節子

ライバルはいい意味で多い方が生き甲斐があると思う。誰からも相手にされないので張り合いがなく、毎日を何となく過ごしてしまひそうです。目の隅にいつも置かれていてこそ自分があるのははっとしている。

相手を気遣いながら長い人生を歩いたり走

ったり転んだり、思い切り生きたいね。

隕石を見るに七百円かかる

山本 正光

生まれてから死ぬまでに、どれほどのお金が必要なのでしょう。不意の出費も多くて、家計簿が青くなったり赤くなったり。楽しもうと出かけたらの通りで、入場料や拝観料の要る始末です。低金利もいいところで、自分の預金に預け賃をとられていたなんて事のないよう、良い時代になって欲しいですね。

欠点を補い合つて来た阿吽

銭山 昌枝

膏薬を貼り合う位置に妻と居る

竹治 ちかし

この二句は、思いとしては同じ心を持っていると思う。プラスとマイナスが日によってどちらとは言わないが、兎に角一対なのである。補い合える仲の良さが響いてきて、とてもいい感じだと思えるのです。

熊に遭うととも携帯間に合わぬ

小林 妻子

災難は人間世界だけでなく、餌が無くて空腹の熊も人里に現われてのご難。冬が来て寒くなつて、満腹にならないままの冬眠ではぐつすり眠れずに、春の来ぬ間に起き出すのではと心配もする。クマが出たぞーって携帯で

110番するつもりでしょうか。

生き甲斐があるから空気でうまい

安平次 弘道

希望があつて真つ直ぐ前を向いている。個人差はいろいろなところで意外なものを見せつけるが、諦めず弱音を吐かず、自分らしさの中で最高のものを見つけて生き甲斐とする時に、満足という空気がそこにあるのです。

坪庭の万両鳥の贈り物

古手川 光

赤い実をつけて何時の間にか小さな庭を彩っているが植えた記憶はなく、時々やってくる小鳥が落ちて行った実が芽を出し、静かに育つたと思える。千両も万両もお正月に相応しく、鑑賞させていただきました。

飛車よりも歩を大切にしたい

三好 専平

腰痛の診察券が五枚ある

村上 玄也

幸福と思う淋しいとも思う

出口 セツ子

兵馬備中国やはりすこい国

天正 千梢

静脈をときどき通り返る影

林 瑞枝

掌に前世からの深い謎

三島 浜丘

秀句鑑賞

— 12月号から

小野 句多留

追伸の後の余白が気にかかる

河津 正治

相手への思いやり、言いたい事はなにか、そんな気持が句になったと思えました。

里がえり母のぼやきも聞くつもり

岡田 幸生

日頃の母の愚痴とも思える世間話を聞いてやる、そんな親孝行の見返りの土産もあるのではありませんか。

使わない幸せがある非常口

花岡 順子

どこの家庭でも、事故のニュースを聞いたに、非常食とか非常口とか再点検するもの、また平穏な日々を忘れて行きます。日本は平和だな、そう思いたいです。

よく出来る子供の親はよく喋り

堀 正和

親子の立話で、出来の良い子の自慢話を

長々と聞かされている。まわりの親よりも、話題の本人の方が迷惑かも。要注意ですね！

耳打ちをされてる方の目が動き

渡邊 伊津志

日常の行動にこのようなことがあります。なに気ない動作を上手く句にしたと思います。

角取れてわたしに還る四コマ目

柏原 夕胡

起承転結、結局は人の一生なんて回り回って自分の器に収まるもの。多分それは丸いものでしょうね。

趣味があり友もあるのに淋しい日

根田 よしこ

人になにかやっけて上げる、周りから評価される。それがないと孤独に陥る。私も同じですよ。そんな時はお喋りをして無駄な時間を過しています。

存在を示すつもりで咳ひとつ

喜田 准一

本人がいるのに気付かぬ本人の噂話。そこで本人登場。悪口ならピタリと止まる。何だか落語の世界。咳ひとつがいいです。

妻の字が毒に見えるかと老眼鏡

坂口 英雄

妻の強さを日々感じてる作家とお見受けしました。確かに二つは似てますね、毒にも魅

力があります。毒味ともいいますから。(少し脱線しました)

中流と信じ交際費が嵩み

飯土井 健翁

日本人は皆、中流意識を持つてるようで、すぐ著つたりして年中ピーピーしてますな。

水を買う時代をまさに生きている

原田 すみ子

何故水道料を払ってるのに、ボトルの水なんか買わんでしょね。外国じゃあるまいし。日本の水道の水旨いですよ。腹が立つ。

体力も気力も妻の後を追う

笹倉 ひろし

婦唱夫隨の時代、まさにそんな時代に男は丸く生きろと言う事ですか。

老い二人間かぬ言つたで日が暮れる

谷岡 清子

他から見れば漫才夫婦。仲の良い生活が窺えます。

続けてる趣味もそろそろ重くなる

岡田 信恵

根田さんの句とタブりました。頑張れ！
丁度紙面もよろしいようで。

私の勝手な解釈で選ばせていただきました事、平に御諒承願います。勉強させていただきました。き有難うございました。



さようなら 中澤伽羅さん

西内 朋月

中澤伽羅さんが、十一月十三日午前五時三十分にあの世に旅立たれました。持病の喘息や肺疾患のため六月末頃入院され九月に退院されましたが、入院中も二、三回電話をもらい、川柳のこと交友関係などとりとめもない話をしておりました。

退院されて、十月初め頃の電話では自宅で酸素吸入をしているけど、月に二、三回タクシーで主治医の診察を受けたり、御主人に従ってカラオケ屋に行ったりしているとの事でした。

来年の春頃には元気になって、また句会にも出席したいと言っておられました。

ひと月ほど電話もなかったのですが、少し気になって十一月十二日の夜に電話をしたら、御主人がいられて、実は今日容態がおかしくなって、救急車で府立病院に運びましたが今、集中治療室で昏睡状態ですとの事でした。

あとで聞くと十一月十四日に葬式をされた

そうですが、内輪だけで言うことで連絡はありませんでした。

思い出話になりますが、伽羅さんとの出会いは、平成十一年二月に天笑さんの川柳教室エイシスでした。

川柳は彼女が一年余り先輩で、色々教えてもらいました。句会のあとの飲み会が楽しみで川柳を続けている私ですが、彼女は飲み会にも付き合ってくれ、そこそこ飲める口でした。

また麻雀が好きで本社句会のあと、薫風先生、寺尾俊平さんと一緒に、天笑さん宅で牌を囲んだこともありました。

そのあとも二人で麻雀屋へ何度か他流試合に行きました。彼女は負けても金で済むことや命まで取られる事はないでと、一直線にがんばりやりましたので、勝つときもあるが、負ける時の方が多いようでした。

また一年位経った頃、薫風先生の産経教室

に行きたいけど、付き合っただけで欲しいと言われて、産経教室にも月に二度一緒に行くことになりました。エイシスも月に二度、本社句会、堺句会、その他の句会にも時々、一緒に行くので、月に七、八回会っていたことになりました。また、鳥取、岡山、香川、尾道、唐津、四万十川等の川柳大会へ一緒に参加したことが思い出されます。

今、伽羅さんが亡くなられて、非常に淋しい思いをしております。

次に、川柳塔創刊八十周年記念句集から、伽羅さんの句を紹介させていただきます。

散る覚悟できて桜が咲き揃う

いか様と知って持つてるルイヴィトン

マドンナと同じケーキを買ってくる

曼陀羅を見ているような遠火花

嬉しくてまた悲しくて空仰ぐ

消したいがズームアップで来る記憶

並べてるうちに押したくなるドミノ

美しく咲いて答をくれたばら

弾除けのよう先頭に立たされる

大切な人の話は口にせず

ゴシップより凄いはんとを知っている

他人さんだっただけなしたりしない

百歳を目指すつもりはありません

享年七十三歳 早すぎる旅立ちでした。

本社 十二月句会

十二月七日(火) 午後一時
アウイーナ大 阪

ホテルのロビーにクリスマスツリーが美しく飾られた師走の今日、本年度最後の本社句会には17名の参加を得て、定刻の1時から開催された。はじめに訃報があり、11月13日に亡くなった中澤伽羅さんを偲び1分間の黙禱を捧げる。

初出席は城東区の平嶋美智子さん。そしてお話は山本蛙城氏。

川柳と俳句「柳人の劣等感について」というテーマでプリントに添って楽しく進んだ。松尾芭蕉や種田山頭火、小林一茶、麻生路郎と、素晴らしい名前やその句がポンポンと出て、川柳をこころざしこの場に集う柳人達をワクワクさせる30分であった。川柳が溢れて街から犯罪のなくなることを願ひ、劣等感など言わず、せめて半年にひとりぐらい仲間を増やそうではないか、と締め括った。

月間賞は大阪市の立蔵信子さんに輝く。

(司会)朝子(記名)真理子・月子

(受付)ふりこ・春(清記)恵子

席題「指紋」

森 茜 選

地獄まで追いかけられている指紋
警察で指紋とられてから元氣
指紋だけ付けてブランド買わず出る
菓子職人父の指紋は京の味
金よりも先に指紋を盗まれる
あなたの指紋がグラスに青く染まっている
思い出に消えない指紋つけておく
さかさまに押ししても狂いない指紋
お清書に指紋がついたどうしよう
太陽にさらすと指紋美しい
折節に姑が指紋つけて去ぬ
容疑者の気付かぬところから指紋
部屋中に貴方の指紋ある温み
人間の指紋の裏に鬼が住む
自己責任取った指紋に人違い
旅の恥かいて指紋を置いて来る
我が指紋知らずじまいで老いていき
ばあちゃんの指紋うすすらよもぎ餅
指紋拭いて明日は出直すことにする
亡き妻の指紋いっばい残る家
犯人がパパだとわかる指紋跡
浮かび上がった指紋へ意地は崩さない
敗北の指紋夕陽にすり切れる
悠悠自適指紋の付いた僕の椅子
働いた父の指紋は縦皺だ
天神さんの牛に少年期の指紋
わたくしに責任持てと言う指紋

重人 美明 ひさ乃 孝一 昭 寿子 雅文 たもつ 瑠美子 寿美 庸佑 典子 俣子 和香 昭 正文 正雄 甘文 吉 東吉 東吉 寿子 愛論 睦子 ばつは 洋 光久

子がつけた可愛い指紋叱れない
指紋探るうしろでふるえ止まらない
ひび割れて指紋も見えぬ老母の指
期待価値ある子だ指紋はみでてる
正直に生きてかけりのない指紋

佳

東吉 耕治 恭昌 ばつは 朝子

お月様の指紋だろうかゴビ砂漠
盗み酒妻の指紋が先にある
夫にはしっかり指紋つけてある
みどり児の足の指紋を大事がり
百歳を生きた指紋がまだ残り

人

保州 和夫 ひさ乃 さくら 美代子 昭三

指紋など擦り切れるほど働いた
指紋拭いてあなたのことは忘れませ

地 天 軸

朱夏 月子

指紋また消えて私の冬になる
地下道の手摺にせめぎあう指紋

兼題「こっそり」

高杉 千歩 選

散歩するふりしてタバコ吸わんかて
こっそりと体重計の針を見る
夫にはこっそりたかい服を買う
こっそりと本音を探る酒を酌ぐ
夜明け前家を抜け出す釣り仲間
こっそりと逢う香水の強すぎる
隠し酒こっそり飲んでこそ甘露
知らぬ間にこそこそ決まる税の使途

満州 尚士 照子 庸佑 昭 富美子 昭 鹿太

母だけにこっそり告げて走る駅
 仏さん食べたんやろか菓子がない
 書いた遺書どこに置こうか思案する
 遅刻したお通夜に座る隅の席
 こっそりと二人で森の秋ぬすむ
 隠蔽はせめてこっそりしてほしい
 こっそりと使った億の後しまつ
 ライバルの弱味こっそり聞いておく
 こっそりとえげつないこと出来る方
 こっそりと買ったダイヤが見当らぬ
 ウィンクを交わしこっそり場を抜ける
 七十の手習いこっそり韓国語
 こっそりと白髪抜く人まだ若い
 ケイタイはこっそりチェックしています
 救急車もつとこっそり来てほしい
 立ち読みのマンガへ笑い噛み殺す
 駅裏に駆け込み寺の店がある
 耳打ちをされてそれから迷い出す
 呼鈴も押さずに空裏やつて来る
 袖の下こんな早く効くなんて
 負けたらあかんこっそりネジを巻いている
 逢うた日は青いインクで書く日記
 孫にやる保険こっそり掛けている
 こっそりと会えば楽しさ倍になり

正雄 美明 日出子 朋月 一風 千恵子 たもつ 美籠 天笑 さくら きらり 泰子 寿海 恵子 保州 祥昭 和夫 美代子 菜月 良知 光久 真理子 たず子 希久子 保州 梓 深雪 正坊

こっそりと吠いてもバラは騒がれる 孝一
 灯は消さずこっそりお待ちもうします ばっは
 真ころをこっそり捨てたことがある 美代子
 ほんとうに寸志こっそり募金する 茜
 こっそりと生家尋ねる花手桶
 軸
 魔性との出会い人生棒にふる
 恐かったのは先生よりも竹の棒
 わだかまり解けて突つ張り棒がとれ
 肉弾の火花を散らす棒倒し
 確実に狙いを秘めて棒グラフ
 年金をつつかえ棒に一人の譜
 不意の事故棒立ちしてただけのこと
 足棒にその日その日の小商い
 二代目にタクト譲って急に老け
 心棒の真つ直ぐな独楽よく回る
 角棒を持つと暴走したくなる
 八起き目も突かい棒の妻がいる
 心棒が振れたどうしウマが合
 麵棒に父の手垢がしみている
 理解などする気がなくて棒暗記
 棒グラフ付けて叶うたダイエツト
 鉄棒がピカピカ今日も逆上がり
 棒に振った汗も実る日あるだろう

修 隆盛 舞夢 つづや ばっは 集一 重人 富子 見清 美代子 千恵子 春 一風 ダン吉

棒読みで秘書が代読した祝辞
 年末は社連が係る棒グラフ
 天秤棒かついだ人の立志伝
 警棒を今日も使わずすむ平和
 計の知らせしばし棒立ちする電話
 如意棒があれば不況も一跨ぎ
 あいづちが片棒かつぐはめになり
 今年また棒線をひく住所録
 偽善者が隠し持つてる火掻き棒
 どちらかがつつかい棒になる余生
 待ち兼ねた指揮棒第九謳いあげ
 定年へつつかい棒を補強する
 つつかい棒も僕も随分錆びてきた
 相棒の居る幸せな日向ぼこ

尚士 きらり 甚一 一風 寿美 耕治 正坊 和夫 鹿太 孝一 扶美代 智彦 朝子 朱夏 愛論 泰子 恭昌 セツ子 正雄 睦子 保州

兼題「養う」

都倉 求芽 選

養子とは財産引きつぐだけの縁
 感性を養う意気は捨てません
 審美眼養つたのに今の妻
 風向きを見る目養う議員秘書
 栄養剤わが家大だけのもんでます
 月給を運んで妻に養われ
 目の保養しに出かけたが高くつき
 ポチだけが養われてる顔をする
 大の字で英気養うのも女
 養い親僕やで猫に言うている
 猫二匹養い愚痴のはけどころ
 ひよつとしてテロだったかも養鶏場
 感性を養うスパイス足しながら
 口養生して百歳の坂のぼる
 英気を養いに富士山へ登る
 日記には休養とだけ書く平和
 別れてもお追つてくる養育費
 養っていると言われているらしい
 男見る目養いすぎてまだひとり
 二匹は浮気の虫を飼っている
 英気養う旅は一人の方がよい
 教養の深さも見せず霞草
 養つて貰える方へ味方する
 こつこつと自分養う昼の月
 薄味で養われてる妻の匙
 養つて上げるのと妻の大あくび
 養つてもらわうやなんてめつそうな

哲男
 あやめ
 則彦
 玄也
 ばっは
 重人
 月子
 見清
 アキ
 ダン吉
 典子
 陸子
 希久子
 朱夏
 祥昭
 正雄
 恭昌
 ダン吉
 富子
 倅子
 正坊
 潤子
 瑠美子
 いわゑ
 一風
 アキ
 朝子

養殖の恋だったのか味が無い
 別腹で養っている皮下脂肪
 良心を養う本に眠くなる
 夢を追う心養う風といふ
 一病を養い今日も調子いい
 住
 虫養いにショートケーキを三つほど
 大陸に養父母の恩置いたまま
 風船に糸僕に扶養家族あり
 この頃は養われてる気がしただす
 まだ七十命養う米を研ぐ
 人
 よその子も養つた事ある乳房
 地
 清らかな下着で自信養おう
 天
 喧嘩相手に養つてもろてます
 軸
 本棚で紙魚養っている蔵書
 兼題「払う」 前 たもつ 選

菜月
 楓楽
 重人
 陸子
 光久
 美代子
 恭昌
 扶美代
 見清
 千枝子
 泰子
 文
 真理子
 あやめ
 則彦
 満津子
 一步
 千代
 典子
 一風
 篤子

わしら昔水洩ぐらい手で払ろた
 一円が足りず本代払えない
 独り立ち子は手助けを振り払い
 軍手の土払う夕日が美しい
 払うもの払って生活切りつめる
 火葬費を払ってだけは残しとく
 厄払いのためにあなたを置いておく
 枝払いされて新芽の春を待つ
 癒つたら安いと思う葉代
 支払いは僕に任せと上にぎり
 雑念を払う写経の墨をする
 過去すべて払つてわたし再生紙
 子のために払うお金は惜しくない
 払う気はないが天引きされている
 支払いは女に頼む路地の店
 返す気のない娘がちょっと払るとい
 手切れ金払えず続く腐れ縁
 レジの前私も財布だけ握る
 支払いになるとあなたが透けてくる
 割り勘で心おきなく飲んでる
 過去に触れぬ約束小切手で払う
 支払いのローン曳きずるかたつむり
 輪の中に犠牲払つた人がいる
 現金で払う十一月の財布
 住
 払うものみんな払って除夜の鐘
 金払うまでは美味しい蟹やった
 八人も金も払わず飲んだ乳房
 雪払うしぐさ床しい蛇の目傘

ばっは
 三喜夫
 潤子
 洋
 美智子
 ひさ乃
 智彦
 一步
 千歩
 典子
 正雄
 洋
 倅子
 房子
 真理子
 五月
 玄也
 ダン吉
 ダン吉
 西
 雅文
 寿美
 能子
 信子
 月子
 美明
 章久
 茜

わたくしが払うものだと決めている

人

一人ずつ払いますねん大阪は 美明

地

悔し涙はにぎり拳で振り払う 鹿太

天

マツケンサンバ踊り今年の厄払う 富子

軸

厄払いしるこ配って折り返す

兼題「バジャマ」 河内 天笑 選

バジャマ着て踊る可愛いシンデレラ 高栄

外湯からバジャマで帰る土地の人 哲男

寝たきりに明るいバジャマがあるらしい 深雪

着るバジャマ見せるバジャマがあるらしい 美籠

よそ行きバジャマ一枚持つている 義

入院にシヤネルのバジャマ用意する 舞夢

七色のバジャマで今日も恋の夢 祥昭

バジャマにもお名前書いて双子ちゃん 求芽

よれよれのバジャマ今夜もありがとう 見清

ししのバジャマ朝から邪魔はかり 月子

バジャマには夫の好きな色を選ぶ 文

ビーポーにバジャマ姿の人だかり 更紗

バジャマ着たままでんごを押さされる 朋月

バジャマなど一緒に洗いたくもない 瑠美子

お揃いのバジャマ着るのが夢でした 信子

リハビリのバジャマ汗のこちよし 一風

いい夢をみたい日絹のバジャマ着る 泰子

シースルーバジャマに逃げてゆく夫 セツ子

四季折々派手なバジャマを着せられる 昭

母さんの童話を待つているバジャマ 正雄

僕のバジャマ洗ってくれとプロポーズ たもつ

バジャマ着て院内ナンパして歩き 舞夢

父ちゃんと母ちゃんバジャマ脱いではる 愛論

单身赴任女のバジャマ干してある 恭昌

パウつく真つ赤なバジャマ着ています 美智子

寝たきりの母へあれこれ選るバジャマ 潤子

女ひとりペアルックのバジャマ買う 睦子

休日のバジャマの夫嵩だかし 寿美

ひと山を越えたバジャマがよく喋る 富美子

健康な喜寿お揃いのバジャマ着て 篤子

ブランドのバジャマ生ゴミさげて出る 美代子

バジャマ着て逆立ちをする母である 義

酸素たっぷり吸ったバジャマで寝ています ばっは

佳

ムーミンのバジャマが似合うお父さん 朱夏

一日中バジャマ脱がないお父さん 房子

母さんの手縫いのバジャマ大きすぎ 義子

魔がさして買ったピンクのネグリジェ 倫子

女房だけ絹のバジャマを着ています 耕治

人

いつまでもそろえのバジャマ着ています 耕治

地

お揃いのバジャマがゴミに捨ててある 公誠

天

ぶかぶかのバジャマで夢を抱いている 立蔵信子

軸

シースルーバジャマ贈ったことがある

川柳塔のぞみ2月句会

日時 2月22日火10時半開場・12時締切

場所 人形町区民館地下鉄人形町駅A1出口5分

課題と選者 各題2句「深い」のみ3句

「前進」 前 たもつ選(川柳塔社)

「選ぶ」 いしがみ鉄選(川柳塔社)

「あまほし」 太田紀伊子選(つくばね川柳社)

「ポーズ」 五十嵐 修選(番傘川柳社)

「味」 浅井 滋子選(ささなみ川柳社)

「いつも」 西來 みわ選(川柳研究社)

「深い」 西出 楓葉選(川柳塔社)

欠席投句 2月19日必着 播本充子宛

平成16年度本社句会の月間賞杯永久保持者は太田扶美代さん(藤井寺市)に決定しました。

平成16年度本社句会皆出席者(順不同)

浅野房子 石森利昭 稲葉冬葉 安藤寿美子

岩崎公誠 江口 度 榎本舞夢 岩佐ダン吉

大内朝子 太田 昭 鍛原千里 太田扶美代

河内月子 河内天笑 川原章久 鴨谷瑠美子

籠島恵子 木本朱夏 吉川寿美 奥田みつ子

楠 昭子 志田千代 玉置重人 小泉ひさ乃

西内朋月 藤田泰子 板東倫子 高田美代子

坊農柳弘 前たもつ 松尾和香 飛水ふりこ

森下愛論 森本弘風 初山隆盛 宮本三喜夫

吉岡 修 吉村一風 吉村雅文 平松かずみ

山田耕治 米澤俣子 山岡富美子 (43名)

パリ旅行

牧野芳光

一千四年四月、生れて初めてのパリへの旅行に出発した。パリ周辺のツアーであり、点と点の観光である。

関西空港発、パリ直行便。

沈んでいく太陽を追っかけて、ロシア上空を飛行する航空路には隔世の感がある。

少し前ならとても飛べないロシア上空である。行けども行けども白一色の大地、ロシアの広大さを感じる。

雲の上でこぼ道が続いている

何時間飛んだかわからなくなる頃、ポツリポツリと白い大地が切れて、海面の青が見えてくる。

デンマーク上空らしい。レンガ色の屋根と緑の農場が大小の島のあちこちに広がる。パリ、ドゴール空港に着く頃は、冬から春に季節が変わっていた。丁度日本の季節と一致して嬉しくなる。

ガラス張りの近代的な空港の建物が迎えてくれた。パリ市街の伝統的な建物と正反對で贅愼を晴らすかのよふな最先端の建物である。ツアーバスに乗りパリへ。

パリの街路樹はマロニエ(栃の木)が主体である。古めかしい石造りの同じような建物が並ぶ街に、その緑はよく映える。建物の外観を変えてはいけなしいし、また、高さの制限があるそう、昔ながらの黒ずんだ建物が並ぶ中に、宮殿、教会、公共施設が大きくきらびやかに見える。

どの街角も油絵の題材になっているように感じる。何世紀も前と同じ風景がそのままにそこにある。

ユトリ口が現れそうな街の角

日本の木造家屋の文化と違って、石造りの家屋の文化は、頑固でいて、それを誇りに何代も引き継いでいこうとする素晴らしい文化である。

人間の住む建物がある木々がある

美しい街人こみまでも美しい

建物の外観は昔のままであるが、一歩中に入れば近代的な店になる。香水を売る店では、試供品の様々な香りが鼻をくすぐり、高価な香水をスーパリーの買い物籠のようなものに何本も詰め込んでいる人がいる。

じつくりと品定めをする若い女性もいる。店の中に限らず、世界中の人種が集まってこつたがえしている。

こんな街からバスで郊外へ数十分走ると、平坦な土地に広がる雑木林があり、白っぽい山桜も咲いていた。自然を大切にするところは人間の豊かさの表れかも知れない。

適当に雑木林が播いてある

雑木林を抜けると、農場が広がる。

リングの白っぽい花が咲き、所々に菜の花の絨毯が見られる。農場の境界にはポプラが植えられ、低地には自然の小川が流れている。

境界のポプラ律義に並んでいる

農家にも近代的な建物は見当たらず、石造りの伝統的な建物のようにある。

建物は低地にはなく、比較的高いところに建てており、水田に頼り低地に家を建てる日本と大きく異なる。農家のたまたまは派手には見えないが、堅実な国民性を感じる。

自然を愛するパリには、ロータリーに季節の花が植えられ、歩道にも大きな石造りのフラワーポットが並べられていた。

その中に見覚えのある山ゲミが植えられており、朱色の実がなっていた。

私の家の近くにある山ゲミと同じと思つて実を食べてみたら、やっぱり同じ味がした。

川柳大原500号
 合同集発行
記念川柳大会

とき 4月24日(日) 開場9時

(締切11時30分) 開会午後1時

ところ 大原町総合センター(寶頭線大原駅から歩3分)

参加料 2000円(発表誌・軽食)

欠席投句拝辞・御祝、寸志等拝辞

総合点10位まで呈賞

おはなし 川柳塔社主幹 河内天笑氏

兼題と選者「どこまで」岡田千茶・「しつかり」

小林由多香・「こだけ」国米正

志・「すつかり」神原日出夫・

「にらむ」土居哲秋・「さわやか」

新家完司・「むげん」尾高水陽

事前投句 締切3月20日「これから」小林妻子謝選

宛先〒707-025 岡山県英田郡大原町下庄町785

小林妻子宛 ☎0868-78-2607

宿泊の方は内容をハガキに添書きをして、

早めに投句願います。宿舎は国民宿舎五

輪坊ですが前泊・後泊・共同部屋・個室

等も明記願います。事前投句にも別途呈

賞10位まであり。

宿泊料金(泊二食)五輪坊6825円、交流館8925円

主催 大原川柳社 後援 岡山県川柳協会他

西宮川柳会創立20周年
記念川柳大会

日時 3月27日(日) 開場午前11時半

出句締切午後1時 開会1時半

会場 西宮市民会館 1階大会議室

阪神西宮駅東出口北へ1分

JR西宮駅南2号線西へ13分

会場 西宮市役所南隣(会館入口は南側)

会費 1000円(記念品・発表誌呈)

お話し 「20年の歩みの中で」

時の川柳社主幹 小松原 爽介

兼題・選者(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

「白」事前投句 時の川柳社 小山 紀乃

「重い」ふあすと川柳社 村上 氷筆

「ゆつたり」川柳塔社 奥田みつ子

「開く」番傘川柳本社 竹森 雀舎

「一面」時の川柳社 平山 繁夫

賞 各題天・地・人呈

事前投句 2月28日(月)まで ハガキに2句

〒663-8211 西宮市今津山中町9-22

舟辺隆雄宛 ☎0798-36-6826

懇親宴 4000円「華章」当日受付申込願30名

主催 西宮川柳会 後援 時の川柳社

第四回川柳マガジン文学賞作品募集

「川柳マガジン文学賞」第4回目の作品募集を開始します。同賞は「後世に残る名句の誕生」と「次世代を担う作家の発掘」を目的とし、川柳界第一線作家46名による共選、そして大賞副賞は「川柳句集出版」とし、広く発信いたします。

応募要領 課題「色」3句(未発表作品)

専用投句用紙に住所・氏名雅号・年齢・

電話番号・性別・所属結社を明記の事

参加費 3000円(郵便小為替を同封し、左記

「川柳マガジン文学賞」係へ郵送下さい。

選考方法 第一次選考者 池 森子・山本蛙城他

28名による共選方式(無記名による各選考者

ごとに特選1句、秀句3句、佳句10句

第二次選考者 河内天笑ほか15名

賞 「川柳マガジン」大賞1名に賞状と楮

副賞として川柳句集。準賞3名に賞状と楮

締切 3月10日(消印有効)

発表 第一次選考発表川柳マガジン6月号

第二次選考発表川柳マガジン7月号

応募先 〒537-0023 大阪市東成区玉津1-9-16

新葉館出版内「第4回川柳マガジン文学賞」係

第54回西大寺会陽川柳大会

とき 2月27日(日) 10時開場・13時開会
ところ 西大寺ふれあいセンター

☎086-944-1800

会費 2000円(発表誌・記念品・昼食呈)

題と選者 11時30分投句締切 各題2句

「腰」 平山 繁夫選

「虫」 小島 蘭幸選

「差」 大西 泰世選

「仏」 西原 知里選

「嫁」 大島テル子選

「折る」 松原 典子選

「マウス」 北川 拓治選

席題1題 久本に地選

読み込み可 欠席投句拝辞

(A)前夜懇親会 西大寺グランドホテル

2月26日(土) 18時〜 5000円

(B)宿泊幹旋 シングル 5821円

(A)(B)とも1月31日締切

〒704-8112岡山市西大寺上1-15 28

久本に地宛 TEL086-942-3074

主催 西大寺川柳社

後援 岡山市ほか

やまと番傘川柳社創立55年

記念川柳大会

―本田輝子句集「吾亦紅」発行―

い つ 3月12日(土) 11時開場

どこで 榎原ロイヤルホテル

☎0744-28-6636

祝 辞 番傘川柳本社幹事長 田中新一氏

句集紹介 堺番傘川柳会会長 中田たつお氏

事前投句 「輝く」 阪本 高士選

欠席投句拝辞 2月15日締切

〒634-085榎原市東坊城町22-45

宿 題 「本」 松田 俊彦選

「自由」 筒井 祥文選

「青」 徳永 政二選

「突く」 川上 大輪選

「口」 本庄 東兵選

「斜め」 森中恵美子選

各題1句 締切12時

会費 3000円(軽食・句集・記念品)

懇親宴 7000円

お問い合わせ

杉森節子(☎0744-27-4019)

主催 やまと番傘川柳社

後援 番傘川柳本社・奈良川柳連盟

第25回ときせん賞作品集募集

雑詠二句(未発表句)

選者 大野風柳・河内天笑・去来川巨城

森中恵美子・小松原爽介

投句締切 平成17年1月31日消印有効

発表 平成17年4月号誌上

賞 ときせん賞一名・準ときせん賞二名

佳作七名

投句料 「時の川柳」購読者は五百円

購読者以外は千円(共に定額小為替)

投句用紙 発表誌進呈・切手拝辞

便箋大(B5サイズ)用紙に作品

投句先 〒650-0026 神戸市中央区

古湊通2-1-21 土井喜久栄宛

選句方法 無記名清記の上選句、上位10句を入賞

◎多数のご応募をお待ちします。

時の川柳社

あかつき川柳会一月句会

とき 1月7日(金) 午後2時から

ところ 国労大阪会館(丁R天満駅下車)

兼題 「迫る」「ノート」「起源」席題1題

投句〒576 824岸和田市葛城町891-22

岩佐 ダン吉方



毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳さんだ

北野 哲男報

デカンショの街だが寝ては暮せない
 期限切れなのにおいしいお饅頭
 まっ先に土産をねだる犬がいる
 カレンダーに人気番組書いて置く
 おせち豆亡母の味まで今一步
 肩車された子どもの豆しほり
 土の香の土産をドンと母が積む
 赤飯をチンするだけの誕生日
 出来悪い息子クラスの人気者
 根性があるかないかで決まる道
 老いたなの自覚とき時食べこぼす
 全快を土産に帰る見舞客
 まだ女朝の化粧が肌に乗る

五人生み耕し恋なく逝った母
 副作用押える薬またくすり
 禁煙で確かに五キロ増えました

サークル檸檬 (前月分) 吉田あずき報

正和 歳子 順子 雅司 開子 哲男 朋月 五月 孝一 美籠 鹿太 晴美
 妻世 たもつ 哲夫

胃ぐすり探すまた恋の副作用
 ひつじ雲今を昔にしてくれる
 長くてもいつかトンネル抜け出せる
 ダイエット副作用には御用心
 無理が効く間の無理に責められる
 人間不信 手痛い恋の副作用
 副作用知って薬の恐怖症
 今日憂鬱風呂で流せるほどのこと
 次世代と修復出来ぬ間が出来る
 その時は副作用など考えぬ
 まだ愛が少し残っている弱味
 人の顔みんな違ってみんなよし

高槻川柳サークル卯の花 田中千莞子報

自惚れの穴がどんどんほつれ出す
 消去法とどんどん迫る僕の番
 涙する母の論しも効かぬ歳
 じんわりと親の意見が効いてくる
 辛口の友のひと言効いてくる
 はりやいと指圧どれかが効いた腰
 千手観音千の効き目を持つてはる
 粗食家に何でも美味い幸せよ
 店頭に並ぶ松茸見る味覚
 社員旅行味覚も皆に合わせとく
 失った味覚戻った日のスープ
 日本の味覚おいおい多国籍
 愛という鎖に今も繋がれる
 鎖切れ自由を謳歌する子犬
 母と子を結ぶ絆という鎖

遠野 楓楽 房子 扶美代 美籠 みつ子 光久 義子 あずき いわゑ 希久子 正坊 昭義 照子 美照 信醉 スミ子 石舟 砂輝守 宵草 きよし 孝一 稲子 祐作 尚士 庸佑 泰雄

老いの坂愛の鎖に頼る日々
 鎖よりもっと確かな赤い糸
 札束にあつさり鎖はずされる
 手拍子のリズムは絆深くする
 手拍子の中に裏切る人を見る
 手拍子とり軍歌で締める同期会
 気の合った同士手拍子梯子酒
 手拍子で野球拳した頃が華
 恋人を四五人これも罪ですか
 親切を金に換算してしまふ
 終章を飾る絵がない金もない
 人畜無害なのに女が近よらぬ
 世渡りのコツだと知った隠し味
 不気味な家だ旗日に旗を出している
 切れはしの雲が決断唆す

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

仲人の面目潰した過去がある
 豆潰し意地で九回投げつけ
 身代を潰して秋の虫を聴く
 山の駅大きい自然に迎えられ
 晩学の今も大きい希望持つ
 悲しみの肩を大きな手が癒す
 尻尾振る相手にきつと下心
 サマワでは日の丸振って迎えられ
 日の丸を振って見送りたくはない
 妻の振るタクトで家は平和です
 因習のつらさに耐えられた嫁の位置
 辛さ耐え飄々とゆく山頭火

秀夫 千莞子 重人 典子 義一 活恵 治三郎 光穂 宏章 武史 晴美 比る志 握夢 求芽 シマ子 萬的 湖風 信治 あや子 美子 章久 度 美弥子 秀夫 雅文

拉致家族怒りの底にある辛さ
つらかった夏を溜めてる秋の海
果てしなき天空千の風が吹く
天職がわたしの指を太くする
おもいきり翔べば優しい秋の天
秋の天翼麥サンマが南下せず

柳 弘
元 紀
ばっは
太 郎
和 子
高 尚

心の錦一つ憶えの父の唄
軍事郵便兄上様と書きし頃
親に似ぬきれいな文字の子の手紙
山は錦小熊そろそろおやすみよ
マラソンの抜きつ抜かれる天高し
被災者を思えば高い野菜など
愛も恋も半端なままでこぼれ萩
被災者へあの日の自分そこにある

暑に耐えたガーベラ嬉しい顔を見せ
言いわけを考えすぎて無駄ばかり
錦繡の飾りでモデル冷やかに
エスプレッソ胸の底から秋滴ちる
猛暑ゆく目にしみてくる花のいろ

美 籠
いわゑ
武庫坊
年 代
孝 一
義 子
君 子

わかあゆ川柳会 松本はるみ報
つじつまが合わなくなつた杉林
つじつまは一生掛けても割り切れず
つじつまをさらに合わせて風は去に
人の世はつじつま合わせのゲームです
野の花の名前覚えて散歩道

か つ 子
聖 子
恵 美 子
好 栄
仲 子
はるみ

つじつまの合わぬ人生歌がある
つじつまの合わないままの米寿婚
几帳面すぎれば人が寄りつかず

博 利
清 泉
白 汀

川柳塔おっぱひ吟社 木村あきら報
会者定離草花無情知つて
仕組まれたワナには美味い餌がある
母の背に草の強さを見て育ち
余命幾何なお捨て切れぬ欲を抱き
ほほ笑みを与えて鬼を手なずける
生きている証に薬飲んですます
顔見知り名前なかなか出て来ない
寒風に耐えて凛々しく梅は咲く
平等に老いても目立つ苦勞人
二歳児も両手合わせる墓詣り
大役を終えてニッコリエビス顔
横車押す老人のしたたかさ
満面の孫の笑顔が福の神
しらふでは言えぬ男のグチ話
体温計枕灯で見る長い夜

吟 笑
ひかり
八重子
勝
かおり
賢
放 任
あきら
輝 夫
治 延
いさむ
文 仙
初 恵
よしみ
貞 月

川柳塔みぞくち 小西 雄々報
採血へ異状なかつた心晴れ
断ち切れぬ血のつながりより難う
血生臭い事件あれこれ気が迷う
台風のために農家の血がさわぐ
採血へ看護師さんの上手下手
結婚のシーズン若い血が騒ぐ
血の絆今日もうれしい娘のメール

千代美
公美枝
和 代
久 子
鈴 枝
信 雄
豊 枝

人間の悲しさ同じ血がもつれ
行動と血液型のおもしろさ
血のかよう隣近所とお付合ひ
いい出逢いありそう胸の慕ひろげ
大陸の戦野へ置いた血の雫

智 枝 子
弘 子
静 江
正 光
雄 々

川柳塔打吹 大森 孝惠報
相合傘男の肩が濡れている
打吹天女衣を濡らす笛太鼓
雨に濡れあの子どこまで帰るやら
初年兵の枕はいつも濡れていた
あの言葉心に刻み墓場まで
時刻む音も聞かせず九月去る
人生の風雪超えて春刻む
手術中時計睨んで待つ長さ

節 子
三津子
博 丈
重 忠
友 楽
和 子
清
龍 枝

佳句地十選 (12月号から)
籠 鳥 恵 子

レコードの針は青春通過中
答などくれなくていい旅が好き
罪洗う入浴剤はうす緑
青林檎かじれば青き挫折感
しあわせか夕陽私に問うてくる
続編はもうないだろ秋桜
かすり傷ぐらひは黙って舐めておく
褒められてバラ赤くなり青くなり
私が怒るとみそ汁が辛い
人生の旅秋色が深くなる

大 輪
求 芽
和 枝
芳 子
美 代 子
政 義
白 汀
シマ子
西 畔

イチローは歴史に残る名を刻む

とき刻み終点近し喜寿の年

石仏を刻む両手に血が滲む

元氣だよ傘寿百寿と年刻む

母の笑み心に刻み生きてゆく

毎分六十いのちを刻む音がする

しくしくと泣かせてみたいあの女を

しくしくと愚痴り慰め合う同士

しくしくと泣きの一手でくどかれた

しくしくと泣いておられます今日の雨

しくしくと泣いた後からアカンペー

しくしくと四十九日の泪壺

心臓がしくしく痛む片想い

しくしくと女が泣いていて秋だ

しくしくと空が泣く日は毛糸編む

七十年夢中の空の茜雲

夢中になった女をおいと呼び捨てる

空蟬に夢中に生きた日々を問う

すぐ夢中すぐあきつぱいB型だ

胃袋を夢中にさせるバイキング

無我夢中ネズミの顔でサンマ食う

主婦業の年季が分かる刻む音

竹原川柳会 時広 一路報

百一歳の墨絵の中にあるいのち

墨のちび方を師匠に見てもらおう

大賞を目指すたつぷり墨をする

人の世の善をあつめて墨をする

青い空お地藏さんと遊ぶ蝶

富恵

久芽代

幸子

禎元

紀美恵

蝿

義人

玲子

京子

勝見

美知江

石花菜

照彦

玲坊

公恵

克枝

みち子

芳光

美美子

善江

完司

孝恵

蘭幸

青居

静風

半覚

房子

もつれあう蝶むつまじい夫婦かも

昔々はらべこ青虫だったわたし

キッチンも茶の間も匂いわたしの座

大吉に気をよくしての旅続く

平凡な日詩を今日も書きつつけ

菊の白さは別れの白さまぶしいね

美しくなれる魔法にかかりたい

香水をつけている日は勝負の日

記憶の限り残しておきたい父の詩

愛の詩集妻へ届けて深む秋

僕の詩ドレミに乗った夢を見る

詩心のある石ころが跳ねている

バラリンピック生きる歓び愛の詩

やさしさをみずゞにもらう花菜

反戦の詩賛成の声で読む

雨音は亡母のふところ母の詩

雲を見た河童詩人になりました

蟬の穴いのちの詩がためである

薄墨で水平線をすつと引く

水墨画墨は全ての色を出す

川柳ねやがわ 森

長年の努力が実る表彰状

実りの秋招かぬ客の熊が来る

実る秋冬からにするダイエツト

きつと実る奥手とわが子信じ切る

天才も遊んでいては実らない

突然に咲く花などはありません

はつとけば突然死やなどおとす医者

栄恵

千代美

汎美

幸子

孝枝

笑子

千枝

史子

慶子

節夫

正宏

比呂子

淑子

敬子

力

厚子

万年

不朽

輝恵

一路

茜報

三郎

高栄

栄二

庸佑

博泉

あやめ

頂留子

突然の出費にへそくり吸い取られ

幼な児はある日突然歩き出す

突然の自然の猛威神を知る

突然の訃報に涙止まらない

紅白を配るうれしい秋日和

大家族心配りも慣れたもの

母さんの包丁確か五等分

配給のとうもろこしで生きた古稀

目配せで言うな言うなと口の蓋

くたびれた父さん配る終電車

喜寿の餅元氣のあんを入れ配る

氣配りがうまい娘なのに未だ一人

もう名刺配る苦勞のない暮らし

お役所は多分黒字とするブラン

預言者の辞書に多分の文字がない

つい本音ほろりと吐いてさとられる

鈴つけて熊よ来るなどランドセル

クマよけによく売れ出した鈴と笛

お世話した男の泥をかぶる羽目

草笛を吹いても誰もふり向かぬ

松茸を一番上に市場籠

石一つ置いただけでも墓は墓

金もくせいだけの匂いへ布団干すとする

尼崎尾浜川柳会 山田 耕治報

コオロギの声は独身かも知れぬ

年金ししゃカニも野菜も食べられぬ

あつさりと暗示にかかる人の良さ

わがままも愚痴も言いたいさびしがり

亜也子

さち子

忠央

ルイ子

恵子

一笑

かすみ

勇太郎

とし子

茜

寿子

れい子

弘風

修

洋

亜成

一風

日出子

たもつ

仁清

弘一

度

晴美

五月

カズ子

信子

洗濯物空いっぱいに干しあげる
 下駄箱の白いヒールが冬仕度
 合格をあつさり告げる無口な子
 大吟醸呑んだその胃へパンシロン
 仁王様に素行の全部申し上げ
 今夜から大布団出せと云うて起き
 仏彫る匠合掌して始め
 疼くほど青春の門叩いてる
 夕月に罪を承知の恋洩らす
 着ながしの角帯に見る炎の匂い
 あつさりと終止符をうつ片想い
 自画像に手を加えると男前
 味気なや誘えばあつさりことわられ
 定年後妻の配下にしてもらう
 仏さんのような顔して悪さする
 夏ばての胃にあつさりと胡瓜もみ
 横顔が似ているようなちぎれ雲

柳柳塔なら

坊農

柳弘報

よし子
 秋子
 亀与子
 宏太郎
 昭三
 耕治
 折杭
 孝一
 里江
 正治
 まさ
 鹿太
 江美
 美代子
 全彦
 義芳
 美籠
 カズ子
 博一
 ふりこ
 蘭香
 真理子
 千梢
 絹子
 とし子
 茂雄
 芳香

窓際でとかく屋台の酒が好き
 何時からか花の匂いをもつ少女
 ロボットがとかく私に指示をする
 ゆつくりと雲が棚田に話しかけ
 体裁は悪いが利口な犬である
 体裁が良いが中身のない男
 両の手の右は戦のためのある
 雲走るわたしも走る秋の中
 もう一人のわたしと戦するわたし
 体裁をかまわぬ愛が怖くなる
 決断をしるとむくむく雲の峰
 雲一つ流れてどく計の知らせ
 雲行きを確かめながら右ひだり
 のんちゃんの雲でときどき里帰り
 百態の雲父になり母になる
 行雲流水わたしは風になりました
 少年のとかく転んでいく非行
 ゲルニカが今日も描かれているイラク
 娘の筆式もうロイヤルと決めている
 秋の雲放浪癖がまた騒ぐ

柳柳塔唐津

仁部

四郎報

まつお
 孝子
 富子
 章久
 弘風
 弥生
 洋子
 修
 和夫
 一風
 隆盛
 美千子
 朝子
 秋雄
 理恵
 欣之
 ダン吉
 國治
 春雄
 晴翠
 勝視
 實
 正剣
 蜂朗
 水笑
 四郎

無愛想席をゆずった茶髪の子
 大学を出るまで孝行待ってくれ
 ひとつかみいぐらの朝のせりの額
 西宮北口柳柳会
 黒田 能子報
 元氣よく叱る電話に生き返る
 テレビの電話うちと同じ音でなる
 曖昧な事務所掛け持つ電話番
 本人か息子が迷う電話声
 以下同文軽い賞状渡される
 復員の兄へ父の遺言書渡す
 ラブレター一度は渡してみたかった
 二代目へ手渡す時期を見極める
 つり銭とお駄賃余分渡す父
 子や孫に紺碧の空渡したい
 手渡しのレスキュー隊が神に見え
 吉野山もみじに映える蔵主堂
 古都道遠風情をそえる小糠雨
 せせらぎに風情いたどく床料理
 人を恋う風情で揺れる木守柿
 人を恋う風情に似合う作業服
 ひたむきに言うた意見が受けている
 ひたむきな姿に似合う作業服
 ひたむきな姿に目もと熱くなる
 追憶に出て来るひとと一途な目
 快復の祈りも詰めて見舞品
 親と子の距離を縮める鍋の湯気
 人を恋う手紙可愛い切手貼る
 もう一つの顔は鏡に映さない
 死語になる釣瓶落としに日は暮れる

輝夫
 高明
 虹汀
 貴代子
 静子
 曙蝶
 いたる
 美代子
 キク子
 光子
 千代
 奮水
 石舟
 富喜子
 トミエ
 萬的
 五月
 美籠
 江美
 光久
 春美
 孝一
 紀乃
 涼子
 鹿太
 折杭
 歳子

フィルタを通して見ると美しい
虚と実の間に熱い詩が生まれ
喪が明けて胸の焔火に火をつける

川柳大阪

高木

信酔報

未練からボンと飛び出す古い傷
ヒマワリがコスモスになる秋の色
天高し子を真ん中にぶらさけて
アホになるコツを覚えて家平和
夏疲れ言うておれない赤トンボ
蝉時雨一瞬止めた大きくしゃみ
ほんならと奥の手出して来る女
許したらハートの霧が晴れわたる
回復をしたな毒舌とんで出る
夏ばての回復に良いさんま焼く
ふたたびの春を夢見て松葉杖
霧が晴れ本音の心透きとおる
朝顔の数が僅かの夏なごり
老いの坂互いを杖に歩み行く
奥さんが入れ知恵してる電話口
説き伏したつもりが逆に説き伏され
座禅組むその空間にある悟り
何処までも人生いつも綱渡り
そつてつかほんならまずはワンカップ
花が散るように崩れた鬼瓦
煩惱が霧にかすんでいる夜更け
青い地球崩してるのは誰だ
霧晴れて父のドラマがまだ続く
うるこ雲出てるが暑い秋の彩

童子
いわゑ
たず子

ひろゑ
民
楽子
章久
タカ子
隆司
宏
朝子
ダン吉
利昭
一風
芳香
功
喜楽
鉄心
照月
柳弘
青道
笑風
美花
一步
洛醉
かよこ

秋の綾虫の音色と酌むワイン
玉砕を知らぬ若者行くサイパン
回復期ナースの笑顔美しい
昆虫の亡がら埋めて夏がゆく
松葉杖はずして大地踏みしめる
欲得を捨てて悟りの老い歩く

川柳塔鹿野みか月

土橋

鳥かごの一日老いた鳥ぐらし
寝そべって大空を飛ぶ鳥になる
食べごろの柿になったと鳥がくる
天を仰ぎボチボチ帰る西の道
一番鶏一声聴いてまた眠る
放れ鳥まだ父母は元氣だよ
涙が甘くなるまで味を舐めている
手がぐりぐりで味付けできるお姑さん
病む猫に愛し時を重ね合う
彩りを心で包むお弁当
彩りを欲しいままにし峰飾る
生家にはいつも変らぬ母がいた
白い髪いま惜しみつつ梳る
銀杏を拾い集めて秋惜しむ
惜しまれて若い命が花と散る
惜しまれる死の適齢期ふと思う
たつ鳥が跡を濁して渦となる
ニワトリもクマゴも危機におかされる
白鳥よあなたも地球まもるんだ
沈む陽へ帰ってこない鳥一羽
埋められた鳥が見守る酉の年

柳昌
川童
重人
本蔭樺
まつお
信酔
蟹報

八重子
保子
かおる
喜与志
彩子
八重
きみ子
はるお
孔美子
和子
睦子
武子
汲香
久枝
幸枝
弘子
宣子
みさ子
立亥
かつ乃
実満

羽毛布団夜中に騒ぐ幾千羽
同居して阿呆鳥にも馴らされる
序曲かなでて鳥が舞う恋に舞う
愛されて町をばたたく鳥になる
点になるまで白鳥の行方追う
囁つてしまひ酉の刻も昏れる
欲消して七福神を待っている
羽ばたいてみても餌場に行けぬ鳥
一の酉二のとり三は信天翁

城北川柳会

神夏磯典子報

酒おはぎ暮も満腹花ゆれて
満腹に馴れて何かを恐れてる
ブラットホーム大阪人は並べない
保護色で食べられぬよう生きている
失った時間が自分史を責める
染めたい色あれこれあって迷うてる
長々の挨拶マイクにさらわれ
紳士でもマイクを持っては別世界
添加物きれいな色が恐ろしい
満腹になつても乳房握りしめ
マイク持ちカポチャと度胸自信つけ
戦うのは満腹の国と飢餓の国
満腹の夢を見ている俘虜日記
言い訳も色々あって笑わせる
喚問の時だけ失っている記憶
色気という言葉をさらう女子社員
何を今更けた壺は振り向かぬ
古稀すぎて咲いてまだまだピンク色

童子
くに子
富久江
菊乃
公子
諷人
茶子
盛桜
容子
はじめ
政子
典子
高栄
達子
美智子
タカ子
さとし
あき子
喜美子
倫子
重人
あやめ
求芽
あい子
春蘭
とし子

一言で水の信頼消え失せた
濃いコーヒー脳のストレス和らげる
車上から軍歌で威圧するマイク
意地つ張り自説は曲げぬ栗の穂
先輩のつらさ無い袖振らされる
村を呑むダムは悲しい遠く飛ぶ
陰口はマイクなしでも速く飛ぶ
補聴器を嫌う女のイヤリング
手のひらの寝みに残る自尊心
失うた痛み引きずり未だ独り
新聞の隅に小さなお詫び文
計算は苦手金儲けは上手

京都塔の会

都倉

求芽報

ケイタイでつきあいしてる娘の瞳
二階から目薬をさすおつきあい
法律に疎くて離婚できません
豊かさが心むしばむ法治国
法外な儲け話に惚れた耳
法つくる議員が法を守らない
黒幕は巧みに潜る法の網
なんだかんだと第九条をなし崩し
松茸の調理方法忘れそう
女ひとり世間の法に逆らわず
離れても互いの汗を知るふたり
お互いの個性を出して二人展
お互いに笑いあっているもの忘れ
似たように互いに枯れて茶が和む
現代と時代が交差する京都

柳一 昭子 史風 集一 志華子 正 公一 順三 千里 ひさ乃 公一 修 鹿太

先取りの時代を描いている漫画
年寄は家族でないという時代
時代劇のチャネル権はおじいちゃん
葬送も時代が変わる花浄土
生きにくい時代かニートひきこもり
IT化時代にゆつくり墨を磨る

川柳さざやま 遠山 可住報

冬眠も出来ずストレス抱いたまま
リストラと言う人間の使い捨て
台風之余波へしばらく待たされる
まだ役に立てる五体で家を守る
しばらくは着られぬ内緒で買った服
ありがとう今日の命へ乾杯す
ふり向けば主役を降りた老いの日日
しばらくとご無沙汰詫びて届く旬
赤とんぼしばらくの人連れてくる
振り上げた拳しばらく下ろせない
もうしばらく元気でいたい医者通い
蟹が出て話しばらく途切れさす
泣き止んだ主役大きい方を取る
子を産みに島へ帰って来る千里

欣之 篤子 満子 百合子 啓子 則彦 惠美 純子 美紗子 文子 多美子 靖子 開子 とみ子 つや子 八重子 君代 哲男 芳郎 可住

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

栗を割る音もなつかし総入園
挽きとればかすかな温み秋トマト
満員の客を沸かせて割る土俵
新紙幣かざして見入る裏表
来る来ない占っている裏表

黒頭巾とれば裏方優男
面白く味付けをして裏話
軽く受け人生狂う裏の金
裏窓の月が詩人にしてくれる
裏ばかり読みチャンスを取り逃がす
台風がいま通過中じつと忍従
快報の朝は鏡がよく映える
記念日に一人ぼっちで凝るバズル
会者定難ぶつくり便り来ない人
やや呆けて植物園のなかにいる
影が似てかまきりの雄不憚なり
夕映えの空はコスモス色となる
鶏頭のまがりきれずに冬に入る

長柳会

村上

直樹報

肩肘を張らずに生きて肥満気味
足腰も肩も五体はもう寿命
肩たたき友を相手に鬼となる
故郷が湖底に沈む秋の暮れ
どん底の生活の中へ身を沈め
肩の荷を下ろし見栄捨て並ぶレジ
名旅館豪雨に沈み跡もなし
地震来て微妙な二人仲なおり
瀬戸内に沈む夕日の旅途中
潮満ちて沈む干潟にある秘密
喜怒哀楽包んで今日の陽が沈む
村祭り遊び疲れて肩車
双肩に担う家族の重いこと
特攻隊海に沈んで盾となる

昭三 純 幸子 紀乃 和一 宏一 武庫坊 東園 年代 薫 半蔵門 久子 芳子 直樹 やすひろ 明信 もこ 靖子 三和子 輝子 史 正一 よしお 芳野 武男 淳司 ひろし

悲しみの肩に置かれた掌の温み
 浮き沈みばかり私の花衣
 地震でも慌てぬ我が家の子沢山
 いつの間にか肩を寄せ合う仲になり
 沈黙を破った人の二枚舌
 民営化薄くなったね肩パッド
 肩もめば骨折れそうな母の背
 地震予知してほしかった占い師
 牛乳風呂顔を沈めてご満悦
 中流にこだわっている肩の凝り
 なで肩の男にしては骨がある
 沈んでるベッドへ友の見舞状
 湖の底に沈んでいる民話

かわはら川柳会 上田 俊路報

ミサイルを没にしてこそ平和来る
 地球儀でミサイルこない場所さがす
 ファクシミリしかし電話で念をおす
 米余りしかしおいらも麺が好き
 老いが来てラストの恋も見つからず
 人生のラストは菊の香に埋もれ
 ひたすらに生きてラストはさわやかに
 ラスト曲心のひだに深くしみ
 走り終えた母の背中丸くなり
 人生のラストは神に委ねてる

川柳塔きやらばく 福代 天雀報

和代 けい子 マサ 明子 英美 和子 敬二 正美 たけし 富美子 幸雄 正子 一慧
 かず恵 静子 悦子 寿子 登生 泰良 好道 雅予 余史子 俊路
 紫泉 寿々子

水鏡この世がもっと美しい
 イチロー君勝つて兜の緒をしめる
 心まで秋色に染め衣替え
 幸せは笑顔の中に住んでいる
 文化紡ぐ世界の織にあこがれる
 笑つたら睨まれそうで中座する
 お経文字考えながら聞いている
 移り気な月にむらくも長い影
 心の捻子うっかりして老いふたり
 心と体アンバランスになる日暮れ
 青空の下で私は胸を張る
 爽やかな秋風うけて趣味の道
 手品師に乗せられているだまし舟
 スタミナをたっぷり溜めて飛ぶチャンス
 迷ったが花が咲いていた回り道
 こすもすやさしい花をありがたう
 枯野の中でトランペットを吹いてみる

川柳ふうもん吟社 杉本 孝男報

ゴシップへ心の冬がまだ去らぬ
 未知数のあの人とても眩しいぞ
 介護して母娘の絆問うてみる
 あの人が天を仰げば恵み降る
 パーマ屋で冷めたゴシップ拾つてる
 火の紐であなたぐるぐる巻きにする
 紐きりり締めて女にあるいくさ
 糸から紐へ紐から網へ絢う絆
 母捨てたあの人だけは許せない
 ゴシップで生き返る人消える人

ふみ やえ 初枝 春枝 田鶴 蘭 天雀 瑞枝 玲子 なみ ゆき てい子 晶子 すみえ 恵子 千春 千代 洋々 忠良 節子 朋恵 公子 一瑤 昌京 無限 義徳

改革は紐つきの人ばかりです
 おんぶ紐母のぬくもり子に伝え
 あの人がいるから丸い輪が書ける
 一面を飾るゴシップ明日は消え
 犬に紐猫にはなんて紐つけぬ
 たかが紐されど凶器になり変わり
 あの人優しさに触れグツとくる
 亡夫との紐は空まで続いている
 ゴシップになるほど生きてるつもり
 あの人来る軽やかな足音で
 ゼロ金利財布の紐を首にかけ
 人間に戻りたくなり紐を切る
 まあいいか両手のばせる屋根の下
 単身赴任紐はしつかり結んでる
 紐が切れ無力の辛さ身にしみる
 憎いのはあの人いつも逃げ腰だ
 あの人のことは言うまい愚痴になる
 ゴシップをまた聞いて来た万歩計
 あの人に逢うため散歩道を変え
 わが子へは見せぬためらひ傷のあと

川柳塔わかやま 牛尾 緑良報

天井に夢を描いてから眠る
 人生のゴールへ坂は九十九折
 迷路から抜け出る時の荒い息
 荒れる子を母は静かに抱きしめる
 老残という字を荒く書く手紙
 荒削りすんで優しい仏様
 靴の音今夜の父は荒れている

正敏 美雪 雅女 はつ江 喜美子 由美子 寿美子 信子 茂登子 富子 志げ緒 一粹 善夫 金祥 孝明 圭一郎 秀夫 秋月 殺 孝男 保州 准一 和子 夕胡 太茂津 輝子 雅代

荒削り未来に望みでかい夢
道草が大きくさせた子のゴール
しんがりのゴールにから舞う花吹雪
ゴールない人生だから行くのです
ゴールインまでは素直な妻でした
人生のゴールへ徳を積んでおこ
老いの一徹ゴールいらぬと歎を打つ
侮った小石がゴール直前に
ゴールまで世話かけまいとリハビリ
眺望は這って登ったこ褒美だ
蟻よお前は若這う風を知ってるか
不景気の横這いなんて頂けぬ
オレだつて這い這いしてた頃がある
這つても孫の式には出ると言う
改良の土壌にやつとみみず這う
ふる里の秋山並に這う煙
育つ子へ母の天井高く出す
酒あびるおや天井が回り出す
狭いから天井裏も物置き場
青天井好きなあなたへ菊香る
責任のない野次天井枚敷から
天井を狙つて元も子も無くし
地を這えば地にある声を聞き生きる

川柳塔まつえ吟社 三島 浜丘報

佐一 富美子 さち子 伶 智三 良一 克子 和代 願 美子 よしこ 年子 東吉 豊太 泰女 寿子 三喜夫 英子 紀久子 正博 緑良

強靱な生き様雑草から学ぶ
草いきれ寝転ぶ空に鱈雲
待ちぼうけ枯れてしまった花時計
枯れ草の下で春待つこほれ種
枯れ落葉敗者復活するつもり
枯れかかる夢まだひとつ捨てられぬ
枯れました脳の味噌まで枯れました
枯れ尾花女無口になりすまし
八十路坂まだ登れそう骨の音
あつぱれと言つて下さる仏さま
あつぱれな撃のさばきが腹にしむ
棟梁に技盗んだと褒められる
粋な娘があつぱれ撃の勇みうち
あつぱれと言つてはかはない金メダル
健康のしるしアハハよく笑つ
健康やかに育てと覗く乳母車
健在が嬉しい父の筆跡
信念で歩く私の健康法
健やかに老いるつもりユータイン
余力などないが静かにしています
マラソンの余力最後に振りしぼる
老妻の余力あしたへ光る鍬
ばあちゃんの太つ腹には叶わない
花道の余力はいつも持っている
ライバルの余力に負けぬ靴を履く

浜丘 宏 桂子 静恵 昌枝 知恵子 茂美 多賀子 義良 多喜 静枝 注湖 幸子 たけし ちえこ 喜美子 玲子 すみこ 秀子 蘭 邦代 小生 房子 治代 雪代 叮紅 棲世

加齢する自分へちよつと薄化粧
この歳で口を尖らす癖がある
許さなくて初めて知つた自分の非
母ちゃんに言うぞと言われ黙り込む
手垢ではないから消えぬ愛の染み
老いでは少しは人が見えてきた
アキレスけん敵はとくに知つていた
弱点の三つぐらひはあたたか味
うしろめたいから喋り続けている
お互いの弱味を庇ひあつて今
弱み強み天秤にかけ生きてます
弱気とは見せないための髪かたち
弱みなどないがいつも負けている
弱味ポロポロこぼして歩く余生なり
何事もない日幸せかも知れぬ

岩美川柳会

石谷美恵子報

節子 たもつ 千代 哲夫 遠野 楓楽 房子 扶美代 みつ子 光久 義子 あずき いわゑ 希久子 正坊 公乃 蟹郎 完子 節子 孝男 和枝 重忠 山節子 はお 螢 一瑠 圭一郎

枯れ草になつても老いの夢を追う
草原に立つと聞こえてくる自然
草紅葉命の限り燃えつくす
手作りの草餅供え亡母偲ぶ

昭二 芳山 政子

豆秋の孔子の享年越えて凡

サークル檸檬

吉田あずき報

棲世

閉じた目に音の風景見えて来る
カランコロン鬼太郎夜を闊歩する
正確に散つて行きます咲いた花
霊柩車時計を間違ふことはない
正確な時計お守りに手がやける
正確に蛙は蛙の子供産む
正確に幸せな分肥えてくる
正確に動く五感に安堵する
正確な時計を誰も持つてない
年寄りに逆らう新語ふり翳す
損ですぬ逆らう癖がおならない
アメリカに逆らう国の地獄絵図

はるお 螢 一瑠 圭一郎

逆らわずたまには褒めてみるもいい
逆流が家財産を巻き上げる

ライブドア負けるが勝ちの株がある
切り株に座りロダンになる日暮れ

花の株そと盗んだ跡がある
下手に手を出したらあかん株と蟹

株券が一夜で紙に化けちゃった
人の目にアウトセーフの誤審あり

家計簿がセーフアウトをくり返す
大物がセーフ間際に飛んでくる

人間にアウトセーフが難しい
セーフまで仮面かぶったままでおく

家族みなオールセーフの年の暮れ
特訓の成果セーフの祝勝会

逆らつてみてもいずれば母の膝
それぞれの思いで違う雨の音

高知川柳社 川竹 松風報

まだ砂を吐いてる昭和史の汚れ
大物がお札の束に汚される

雑巾が孫の足跡追っかける
親バカへ宅急便の汚れもの

思い切り汚して遊べ子供服
イチローのスボンにいつもある汚れ

脱走兵でした汚点は拭われぬ
海を見ていると汚れが消えてゆく

祝杯を涙で交わす娘の菓立ち
青空のリズムが目尻柔らげる

叱つても目尻が笑う好々爺

目尻から笑いこぼれるお年頃
よく笑う目尻のしわに惚れている

ばあちゃんの下げた目尻を見逃さず
最高に目尻を下げて孫といふ

娘の事話す父さん目尻下げ
幸せも不幸も熟知する目尻

川柳エスポ 山本 三郎報

カラオケを互いに褒める胸の内
秋晴れに若さ弾けるソーラン節

さんま焼く煙に亡夫の笑顔あり
もうあの世行きたい言うて養命酒

趣味囲み友と楽しむ生き甲斐に
仰き見る塔を跨いだ朝の虹

宿六も災害時には気の支え
もてなしに何もない夜の酒と月

電話料せつせと稼ぐ孫の恋
ウォーキング時々覗く万歩計

無常観無言で貴方知らしめず
酒に類染めて祭のいい女

彼岸花ふるさと想い母元氣
おいでよと歓迎されてつい長居

それぞれの人生ありて窓明かり
曼珠沙華燃えて敬老灯が消える

初めての祝い貰った敬老日
残酷なドラマではない子の叫び

I Tの仮面社会に魔女がすむ
温暖化花も狂わす新天地
獲繰む天引貯金辞めました

美々々 ままき子 京子 悦子 和江 則子

川柳塔のぞみ 播本 充子報

窓際の椅子で歪んだ月を見る
ワイングラスを掲げて愛を投げてみる

自分流で見る眼に任かす花を生け
雷にゴルフの出端くじかれる

ごろ寝して不覚の風邪に悩まされ
植木鉢倒し台風待つ準備

眠れない町で月夜も忘れてる
夫ごろごろゴキブリはすばしい

疲れ取る葉ゴロ寝に限ります
母のような月に悩みを問いかける

十三夜愛をこっそり入れ替える
偶数の月は陽気になる財布

月の無い夜はあなたが見えてくる
ごろごろが鳴つても臍を隠さぬ娘

斜めから見る人間も傷まみれ
天才や秀才ごろごろ三歳児

石臼ごろごろ炉端で祖母の冬仕度
豊作の手心で握る芋の出来

傷心と洗濯物を投げ入れる
背信の雨は斜めに頬を打つ

斜めから見た辛口のペンの刃え
合掌へ少し斜めにいる仏

バックスのご機嫌をとる夕まぐれ
大阪の月はあることを召し上がる

月だつてやがて人間臭くなる
坂道をごろごろ落ちていく童話
朝刊を斜め読みして発つ戦士

紀伊子 丁女坊 きみ 精七 隆志郎 宣子 賀世子 シマ子 あやめ 桃葉 扶美代 典子 やすお 妻子 哲男 哲子 誠幸 朋月 権悟 慕情 朝子 尚士 (吉) 修 充子 千里 恭昌

富柳会 池 森子報

台本になかったギャグが受けている
 ふりがなは打つな小さな自尊心
 イチローの顔やコメント哲学者
 友情に少し打算の赤い爪
 虫眼鏡で見つめる愛が一つある
 一台のカメラ夕陽を追いかける
 さわやかな秋野に夢を点火する
 鏡台の前で女はアーチスト
 一本の釘を本気で打っている
 打ち消しの泡をとばしてカブチーノ
 ふと見ると妻はこっそり歳をとり
 ちよっと嘘まぜた話に味がある
 土台まで揺する台風から秋が
 再就職決まるさわやか踊る空
 減量中メインディッシュは薩摩辛
 うっかりと仮面を付けたまま帰宅
 台本が見えずに揺れる星条旗
 向き合えば恋人になるレモンティー
 初恋の傷跡消しゴム知っていた
 繰り返して読んでも胸を打つくんだり
 丸ごとの命を賭けた手術台
 二度三度酒の肴になる内緒
 秋の貨車母の軍手を乗せてくる
 辛抱の涙で磨きかけた腕
 いそいそと小さな運に動かされる
 風に背押されて場違いの舞台
 しみじみと妻は戦友だと思ふ

鐘造 和子 淳司 冬虹 英子 扶美代 紅紫朗 深雪 奈保美 夕子 奏子 巳代一 浩子 政義 高鷲 亮幹 和子 アキ 宗貞 初太郎 順子 信子 信子 宏至 哲史 ひろこ 和代

ベテランは愛の本音を端書に
 一札をして少年の回れ右
 子を受けて親を想っている荷台
 豊中もくせい川柳会 江見 見清報

廃校の昭和も遠く元教師
 人生は色紙のよう今日フルー
 頂いた好きな句集を読み返す
 スランプを名作読んで癒される
 名作の深みの判る年齢となり
 出す人にあわせ便箋使い分け
 おしゃべりの妻が無言で居る不気味
 田辺聖子読んで笑ってしゅんとなる
 大勢の愛で奇蹟の優太ちゃん
 晩学に教師がほしいボールペン
 悪妻愚母反面教師でいる私
 親の汗家庭教師が拭つてる
 白髪になっても仰ぐ我が師の恩
 ケイタイに便利さ馴れた落し穴
 土ついた野菜ゴロゴロ宅配便
 とりあえず何でも値切る癖がある
 癌告知オベカ薬か余命表
 世の移り月はだまっで見てござる
 熱血教師にPTAが小うるさい
 フルムーン財布は妻にまかせきり
 娘から電話便利に母使う
 便通のよしあし健康バロメーター
 魚好きしゃぶつたような皿の骨
 良い方に勘違いされ苦笑する

幸一 欣之 森子 郁子 玲子 慶子 和子 宇乃子 巴子 幸雀 千津子 けい生 蛙 寿美子 隆彦 則彦 知香子 正坊 尚士 緑骨 満寿巳 石舟 萬的 都代子 英子 庸佑

先生と呼ばれて照れる新教師
 食べ放題手も洗わずにぶどう狩
 顔色を読みさよならを考える
 天高く空気吸つても太りそう
 八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

楽しげに躍り合っている手話の指
 吊革でふと聞いているいい話
 その話何時か何処かで聞いたはず
 大賞の苦勞話を菊に聞く
 根気よく話すナースの注射針
 話すこと何もおへんと口を閉じ
 キヤベツからミサイルまでの立ち話
 始末して母が内緒にポケットに
 ひとり住む母へ気になる火の始末
 始末書を書くたび僕が軽くなる
 始末してためたばかりに眠られず
 始末屋の妻で賢母で美人です
 胸の奥始末におえぬけもの棲む
 女の始末ぐらにはつけて逝きなはれ
 被災地で始末手伝う恩返し
 髪形を変えて女は四股を踏み
 仕上りは見せてくれるなすい髪
 ひとりの居の孤独に耐えた束ね髪
 火も風も越えた女の束ね髪
 はらはらと散れば詩人になるわたし
 うそだ嘘だと風が落葉を掃いてゆく
 風に散る落葉を観るごとく
 からからと落葉が後を付いてくる

高栄 求芽 重人 見清 一風 欣子 春蘭 さらり 柳伸 とみを 浩三 いっふみ ますみ ダン吉 博仁 まつお 宏至 直子 義明 あかり きよみ 昌子 秋雄 國治 弘直 シマ子 加津子

成長の命を撫でている深い寝
天よ地よ人間いじめ程ほどに
いい笑顔いつか心もほぐれ出す
自衛隊はまだ時間かかりそう
拘りを捨てれば秋に秋の花
不揃いの皿でバランス取る夫婦
蓮根の穴にすっぽりいる私

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

欣之
頂留子
更紗
芳香
幸生
民
美代子

口止めに飴玉ひとつ掴まされ
ジョーク好き掴みどころのないお人
藁掴みポツクリ寺を素通りす
IT系何を掴んであの富豪
あの人の人眠症の種である
苦労させると言えはうなずく妻である
回想の一コマ毎に彩があり
来し方を想う一人のプラックコーヒー
回想のあの日わたし光ってた

あかつき川柳会

森村 美化報

欣史子
慶子
喜美子
香住
シマ子
弘直
加津子
あずき
能子

祝われる度に丸くなる背中
誇らしく九条祝う今が旬
いささかの夢カルチャーで見る余生
いささかも妥協をしない無農業
いささかも筋を曲げない父の釘
過密ダイヤいささか不安な時刻表
いささかの野心潜めている背広
いささかも恥しることなし汗の量
いささかの余命しつかり磨かねば

生枝
正
和香
保州
清史
幸生
美籠
ダン吉
重人

石段の途中で待っててくれる孫
石段に叱られていた不摂生
遠近両用窓の石段踏み外す
ヨイトマケ唄って石段昇り切る
親子で喘いだ子育ての石段
満願の日の石段の軽い足
村人の手作り石段苔をむす
あおぞらに二度と出すまいきのこ雲
夜勤明けお疲れさまと空の青
被災地の明日の青空信じよう
争いの空しさを説く青い空
前向いて進もう空があおいから
あおぞらに地球のすべて見つめられ
窮状を訴えに来て熊が死ぬ
首切りを気づかう勤労感謝の日
九条がいささか邪魔なオエラ方
地球儀の色の違いでうむ悲劇
地雷より平和の種を埋めてきて
再選をブツシユのポチが嬉しそう
無責任三セク揃い行詰まる
風と地震お返しの手が汗しってる

仁緑
楓楽
柳弘
希久子
左代子
みつじ
シマ子
ゆうこ
まつお
一歩
幸生
正坊
美智子
扶美代
正コ
いとく
蕉子
敏

南大阪川柳会
吉川 寿美報

東吉
孝一

高原のお茶屋に残る剣の跡
剣よりもベンが暴力振るってる
短剣を抱いて旅立つ黄泉の国
剣の山火の川越えて好々爺
剣捨てて鎌を握ってから悟り
紳士ほど表にださぬ空手技

章久
昌紀
柳伸
楓楽
集一
日出子

素手で来て宅急便の里帰り
相撲と空手オリンピックも夢でない
空手形で終ったあの人との恋は
人間の手をいつばいに空手
幕洗う素手に伝わる師のぬくみ
縄に切紙付けて初春を待つ
切紙の七夕飾りうまい母
切紙で見事山下清の絵
吊り橋を渡る勇気を試される
芸は身を助けると言う紙を切り
大台も女忘れぬ薄化粧
大台のへそくり妻のうふふふ
あとわずか大台に乗る娘を案じ
大台を越えて化粧に念が入り
大台をどんと乗り切る森光子
勇ましい話はきらいハルウララ
他所の子を叱る勇気を持っている
とりあえず勇気を出して茶に誘う
向う岸渡る勇気は残しとく
生き甲斐を離島に女医はひとり発つ
それはわたしですただそれだけにいる勇気
人形の勇の袖がすこし枯れ
大台で買った株券持てあまし

弘子
初太郎
シマ子
朝子
柳弘
タカ子
直子
萬的
更紗
千梢
志華子
憲太郎
叡子
修

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

手拭を小道具にして隠し芸
必勝の手拭締めて一夜漬け
エッサツサいつも陽気な豆紋り
手拭が器用に芸をする高座

庸佑
耕策
みつこ
泰子

根気なら負けぬ下積み長い俺

一畝の根気を土に諭される

貧しさの中で育つて行く根気

六法の抜け道根気よく探す

最後尾それでも根気だけ走る

一点を見詰めて待つている根気

安普請かたかた風と仲良しで

かたかたは弱震がたがたは逃げる

かたかたを押し立てたに第一歩

かたかたと骨を鳴らして生きのびる

わが体モデルチェンジしてみたい

ショー終えてモデルソファに身を沈め

この顔もモデルチェンジしませんか

モデルルーム夢を食べてる見学者

モデルハウス覗いて算盤弾いてる

カメラからモデルの孫が逃げ回り

銀行へモデルガン持ち行きたいね

モデルからスターになった立志伝

モデルチェンジして新しい彼とゆく

泳ぐなどいつてのほかよ水着ショー

生き方のモデル無学の母に置く

手の届きそうな故郷の星明かり

見上げれば私を守る星がある

翠洋会 谷口

出船入船この友は離すまい

今はもう戦友のように妻と居る

青空に友とおかかの握り飯

披露宴悪友のスピーチ気にかかる

たけし 久仁雄 一壺 六點 ダン吉 美代子 ヨシ枝 章司 フジ 重人 昭平 猿杓 喜久子 りつえ 吐来 敏 真一 志洋 いさお かつみ 扶美代 悦一 知子

メル友で顔知りたくてデートする

友達も各種インドアアウトドア

愛という宇宙があった母の胸

志友二人の別れ道

人生は右か左か迷い道

目的一步出ると女も敵がいる

目的は妻の妹だったのに

運命の出合いと思う敵味方

空耳か遠くで霧笛鳴っている

点滴を吊つて病人らしくなる

人情味チョッピリさかす新喜劇

優しさ人情兼ねた朝ドラマ

人形に託す情の文楽座

人情の厚さ不幸の中で見る

やさしさに触れ人情の有難さ

姿なき松茸めしの香り嗅ぐ

お役目を終えた落葉を掃き寄せる

作り手の苦勞を偲ぶ菊花展

アクセルとブレーキ踏んで十二月

老母ひとり里の辺りの茜雲

美しく化ける鏡を買いに行く

むらくも川柳会 毛利

母からの素顔満足化粧せず

モナリザの微笑む素顔魅せられて

わたくしの彼女素顔が美しい

街角の素顔美し総ガラス

朝起きて隣の素顔誰だっけ

素顔で見合い縁談は一決

舞夢 真理子 奏子 さと美 照子 会美 蕉子 日の出 みつ子 正坊 良一 満作 絹子 蛙 昭 理恵 久峰 義 志華子 富子 幸報 定子 彰 秀子 安男 信夫 明朗

露天風呂のどかに素顔さらけ出し

化粧せず素顔のままの嫁が好き

お互いに素顔をやっつと確かめる

神楽舞う故郷の土にある温み

泡立草我もの顔に野をうめて

八十路には未だ先がある敬老会

王道をいく人どこか冷たくて

長雨に洗濯物も干し場なく

帰る家あつて人生旅に出る

神の国さすが台風通り過ぎ

松茸をまるごと一つ秋を食う

三幸川柳教室 古久保和子報

懺悔することはないかと胸に聞く

選択の余地がありそう回れ右

どなたさん言い出す母の大ピンチ

お見舞いに明るい話ひとつ添え

組板の窪みは妻の金メダル

これからのこと考える秋夜長

偏差値を並べて個性とじこめる

自己主張五分と五分とが渡り合う

理屈好き悪口言うのもつと好き

汗掻いて掻いて心を軽くする

運命の星に生まれた幸不幸

親方に白星重ね返す恩

流れ星流れるように消えた愛

火星人と交信中の糸電話

目に余るマナーが悪い異星人

美保 清吉 幸 恵美子 八重子 ます美 寿 ふさえ 美喜子 喜美 昭子 俊夫 信子 千秀 豊太郎 智三 町代 純一 准一 光男 幸 義男 孝義 靖子 登美代 次根

過疎に住むせ星が降り注ぐ
 どの星も輝いている句読点
 星の雲浴びて羅漢のひとり言
 星を捜すビルの谷間の難破船
 記念品壊れても友情の輪が丸い
 友達と違ふ波長の秋の虫
 とうちゃんど半分っこする友が居る
 友達が来ると小遣いくれる妻
 食べ頃になると友達やってくる
 友好関係むすぶに口が軽すぎる
 毒舌家の友をカンフル剤にして
 どんぐりの夫婦でいつも友達で
 時々友がゼンマイ巻きにくる
 友と言うのは温かい潤滑油
 地球と言う汚れた星に住んでます

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

清史 保州 朱夏 和子 桂香 かずみ 昇 イセ 起世子 みね 章子 公子 徑子 碧 武

筏舟を浮かべる川が消えている
 年輪に苦節の跡が浮き上がる
 洗柿の匂を知らせに来るすずめ
 思い出がぶくぶく浮かぶ昼下がり
 焼酎の魔力で柿を甘くする
 柿の葉が落ちていつもの過疎になる

倉吉川柳会

竹信

照彦報

黙人 岳水 蒸情 花峯 一花 五楽庵 玲坊 喜美子 萩江 和子 重忠 日出子 康子 龍枝 風露 悠子 泰輔 次男 節子 幸子 和枝 京子 よしえ 睦子 勝誉 賀寿恵

持ち上げて家事を授ける妻の知恵
 すいすいと泳ぐ手の平ほどの海
 すいすいと自由に泳ぐ詩の道
 すいすいと好いちようわいと米子弁
 赤とんぼ追いかけてゆく老人車
 人脈をすいすい泳ぐ美人秘書
 すいすいと雲は流れる許そうか
 饒舌ですいすいかわす押し問答
 行くところは同じ豪華なお葬式

川柳クラブわたの花

井尻

民 八寿子 はじむ 道子 宏至 ミツ子 君枝 宏 一風 きらり 欣子 幸枝 晴美 俊子 浩三 正純 一道 (本) たえ子

甘い一生だと思ふ
 あれこれともう迷わない北斗星
 刈り終えた藁の香残し日が沈む
 自爆テロそんなあつさり死ねるのか
 人生のバランス愛が取るのか
 ふるさとの恋はとつくにダムの底
 長電話沈む心のうさ晴らし
 沈む陽が彩り添える野の仏
 愛の炎ワイングラスの底で待ち
 天高く羊の毛玉ふわふわわり
 底辺に生きる素顔に光る汗
 青春は食欲ばかりニキビ面
 オレオレ詐欺つきつき進化するそうな
 一定の溝が埋らぬ言葉尻
 華やかな女子ゴルフ界夢がある
 絵手紙と飛ぶチャンスを待つ花菖蒲
 盛大な見送りの中風抜ける
 金木犀一輪挿しに話しかける

きつと美酒を酌み交わすらし酔芙蓉 (赤) 妙子
 エリートもおらず兄弟仲がいい ますみ
 大ジョッキ溢れる泡を賞でて飲む 敏男
 玄關の靴の乱れは家の恥 まさと
 帰る蟻ゆく蟻秋の陽が沈む いつふみ
 花だより急がなくては散り果てる たか子
 故郷便開ければ秋がてんこ盛り 義明
 生きる知恵工夫してます不景気に 春枝
 わたし色染め一生のフィナーレを 知佐子
 ケータイが頼みの綱の家族の輪 美代子
 紅葉に神光潜む滝の道 ふりこ

川柳藤井寺

高田美代子報

横綱も十両までは居候
 親を看る口実がある居候
 腹一杯三年過ぎた居候
 公園に居座っている青テント
 何もかも知ってて言わぬ居候
 十指では数え切れない過去の恥
 それぞれが違う音色を弾く指
 天国も地獄も知った葉指
 つまらない約束ばかりする小指
 うっかりをからめた小指喋り出す
 指先が世界を開くキーボード
 番付が一枚下で逆らえず
 見栄張ったばかりにこわい請求書
 一枚をやぶるたびに四季が見え
 もういちまい余分に付いた僕の舌
 一枚の瓦が語る古城の詩

淳司 龍一 絹歌 かつみ 鐘造 悦子 庸佑 惠勇 志洋 映三子 桂子 喜代子 春蘭 耕策 雅枝

一枚の辞令の重さ計れない
 手焼きせんべい一枚ずつにある田舎
 もう一枚書いてあります裏帳簿
 アイラブユーだった一枚胸おどろ
 秋の旅ベスト一枚忍ばせる
 一枚の紙で離婚も結婚も
 いちまいの辞令に狂う青写真
 いちまいのネガへ戻ってゆく旅路
 内部から告発一枚岩にひび
 白紙いちまい俄かに怖い貌をする
 皿一枚割って女の気が晴れる
 たかが紙一枚僕も裏表
 歳月がいちまいかんて丸くなる
 足腰が丈夫で義理を欠かせない

川柳さんた

北野 哲男報

大根もロングブーツも冬仕度
 大根炊きされどけれどで四苦八苦
 干大根母の香りを乗せてくる
 姑の味をつないで大根干す
 大根で道を教える田舎道
 真っ白い大根土に染らない
 予定とは未定だと知る健康度
 清濁を吞んで予定の位置に居る
 晴れと言う予報士嬉しそうな顔
 鍋の湯気夫の顔が見え隠れ
 傘一つ旅の小雨に合う歩幅
 飲みだすといつでも狂うスケジュール
 予定日のママの素顔が美しい

絹枝 喜久子 武義 登志子 ヨシ枝 一知 留美子 史郎 美代子 昭子 栄一 政代 雅司 開子 順子 章子 藤朗 千代 房江 忠 正和 歳子 一之 朋月 婦美子

折願には本当の歳を書いておく
 岬川柳会 八十田洞庵報

老いは未だ紅葉が映えて火照る頬
 字も読めず人いきれののみ人気展
 靖国が問題になる初詣で
 被災地の痛みを想う夜の冷え
 愛しくて心底採んだ君の頬
 伝統の母校少子化さびれさす
 中流の意識の中心にいる安堵
 柳人のみならずわらわら居らず
 ひとときを無心であそぶ波の音
 お彼岸に僧侶と会話に和む午後
 波の音心にひびく時の妙
 それとなく耳をダンポに聞く噂
 優太ちゃん暗い世相に後光さす
 母にだけ分かる指切り思い馳せ
 美男女はかりやない舞踏会
 底ついて冷めたる夢の後始末
 老いてなお活火山なり注意をう
 初物を笑って食べた人が逝く
 伝統の味は名器にのせて映え

川柳塔おとり

西原 艶子報

物忘れ巡る月日へ置きざりに
 墓の中までもふたりで行くつもり
 煩惱のままゆつたりとお浄土へ
 寺巡り優しい人にしてくれる
 おさがりをゆつたりと着る三人目
 哲男 富美子 茂平 里子 年子 令子 俣子 勇 蛙城 みやこ 悦子 桜琴 貞夫 幸 孝子 和香 哲男 和美 洞庵 由多香 雄々 螢 以和方津 幸次郎

退職で四国霊場旅巡る

ゆつたりと月の友連れ露天風呂
カップルの男を見ればボクが上
見るだけじゃとつても仲のいいふたり
よく笑う妻が私の宝物

巡り合う人は前世の決まりごと
残る日々ゆつたり暮し春を待つ
児等巣だち広い空間だけのこる
延々と続くふたりの立ち話
季の巡り早くて心吐息つく
病む夫に明日を約束互いの目
ゆつたりと心静かに生きる道
ふたりして築いたホーム宝もの
童心に還る百円バスに乗る

ほたる川柳同好会

水野 黒兎報

信心はどんぐりひとつから芽生え
キャンドルにそつと悪意が見えかくれ
悲しみは突然来てはそつと去る
どこまでが内緒か肩の疑る話
うなだれる芝居がうまいうちの犬
妻よ還れうなだれのの字描いたころ
そつとして欲しいが傍に居てほしい
腕白にそつとねだられ爺にやり
うなだれてトポトポ帰るクジはずれ
白い杖そつと見守る駅ホーム
バイトする窓から見える夏祭
初恋を刻む少年の日の机
項垂れて読んてる振りが漕ぎ始め

小生 一弘 真一 黙光 舍人 ヒロ子 道子 和子 風花 清子 登美 松枝 知恵 艶子 黒兎 契子 見清 桂子 昭子 よしろう 徹子 雪子 直次 禮子 柳童 信男

可も不可もなくして信心続けてる
仮設建ち家族にもどる内緒ごと
そつとならいいのにさつと呆けは来た

ロース川柳会

山崎 君子報

詩心澄ませと銀杏散りしきる
まちがいが電話やさしい返事してあげる
間違っていないつもりの大間違
月澄んでコトリと解けたわだかまり
寄せ鍋や孫にやさしい母の箸
澄ましてもわるさの匂いもれてくる
弥陀を彫る研ぎ澄まされた仏師の目
とり澄ます柿でつべんで熟れている
間違つた道ではないと言いつ聞かせ
煩惱を重ねて今日も生きている
絵手紙を書いたことない紅葉狩り
間違いは大笑いして包みこむ
澄んだ目にすべてを語る零歳児

平成17年川柳塔誌発送予定日

1月27日(木) 7月27日(水)
2月26日(土) 8月27日(土)
3月26日(土) 9月27日(火)
4月27日(水) 10月27日(木)
5月27日(金) 11月26日(土)
6月27日(月) 12月27日(火)
以上の通り予定していますので、
参考にして下さい。

第五十六回 大阪川柳大会 秀句

在阪柳社六社の自主運営となつて2回目
の川柳大会は、11月20日(土)北区民センタ
ーで163名の参加を得て開催された。当日の
秀句は次のとおり。(太字は本社同人)

「散る」 木本 朱夏選
散るものは散り重い約束残される 前田美巳代

「叶う」 足立 淑子選
風船しほむ望み叶つた形して 西出 楓案

「強」 北川アキラ選
平和論強化ガラスの中において 足立 淑子

「黄色いもの」 田頭 良子選
黄色では止まる慌てることはない 玉置 重人

「穏やか」 堀江としを選
噂ばなしはそつとオブラートに包む 板野 美子

「狩」 前田美巳代選
熊は木彫りで狩人の血を騒がせる 墨 作二郎

「きつと」 三宅 保州選
白紙にもきつと言いたいことがある 嶋澤喜八郎

「時事吟」 井上一筒選
精神科の椅子に座りたまえアツシュ 板野 美子

高野山合祀法要

於・高野山大靈園

十一月十三日、世界遺産となった高野山はとても沢山の人が出でた。お山はすっかり晩秋の景で、赤や黄のみじがなごり惜しげに燃えていました。十六回目の合祀法要是静寂の大靈園で行なわれました。新しく合祀されたのは、垂井千寿子、尼れいじ、二宗吟平、楊井二南、梅田宣司、堀江正明、西田柳宏子、木村正剛、林はつ絵、堀江光子、金村青湖氏の十一名でした。読経を聞きながら、やがて私も参りして頂く方になるんだなんてふと……。

ご出席のご遺族の方達は、川柳塔碑にこのようにおごそかにお参り出来た事を、とてもよろこんでおられました。法要のあとはみんなで食事をしながら、なごやかに故人をお忍びしました。

その後は大勢のお参りの方達にまぎれて、奥の院に参拝したりお土産を買ったり、それぞれに時を過し、無事帰路につきました。

ご遺族の方々に川柳塔本社にもお顔を見せていただけたようお誘いを申し上げてお別れをしました。来年も元気だったらお参りをさせていただきますと思います。合掌。

(大内朝子記)

お供拝受(敬称略・順不同)

西田美代子・二宗貞夫・尼信子



参列の皆さん

第6回 文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

募集作品 文学ルート(5市)周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限ります)

宿題・応募先 (宿題に応じてご応募下さい。各2句)

松江市 「橋」「神話」	松江市産業振興部 観光文化課 〒690-8510 松江市末次町86	TEL(0852)55-5293 FAX(0852)55-5564
尾道市 「クレーン」「石畳」	尾道市企画部 観光文化課 〒722-8501 尾道市久保1丁目15-1	TEL(0848)25-7366 FAX(0848)25-7293
今治市 「燈台」「楠」	今治市教育委員会 文化振興課 〒794-8511 今治市別宮町1丁目4-1	TEL(0898)36-1608 FAX(0898)25-1700
松山市 「雲」「太鼓」	松山市総合政策部 国際文化振興課 〒790-8571 松山市二番町4丁目7-2	TEL(089)948-6634 FAX(089)943-9001
高知市 「さんご」「闘犬」	高知市教育委員会 生涯学習課 〒780-0870 高知市本町4丁目3-30	TEL(088)822-6394 FAX(088)823-1095

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品 (FAXによる応募可)
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記して下さい。(柳号の場合は本名も明記)
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。1人2句以内。

応募締切 平成17年3月31日(木)(当日消印有効)

出品料 無料 **選考** 平成17年5・6月

発表 平成17年7月、入賞者に通知します。(表彰式は、17年10月予定)

選考委員 (第二次選者) 吉岡龍城・塩見草映・橘高薫風
(第一次選者) 竹内すみこ(松江市)・角本華峰(尾道市)・田ノ窪岩泉(今治市)
一色美穂子(松山市)・尾崎呂谷(高知市)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

明けましておめでとうございます

本年4月、野村太茂津先生が卒寿を迎えられます。
ご長寿をお祝いするとともに、長年の川柳活動に感謝し皆様のご賛同を得て下記大会を開催することとしました。
ご参加をお待ちします。

野村太茂津卒寿記念川柳大会

- 日 時 平成17年4月10日(日)
開場 午前11時 開会 午後1時
- 会 場 J A 会館 (JR和歌山駅前)
- 出 句 各題 2句 (欠席投句拝辞) 締切り 午後12時30分
- 祝 辞 川柳塔社主幹 河内 天笑 氏
- 事前投句 『 寿 』 川柳塔わかやま吟社 野村太茂津 謝選
- 兼 題 『 役 』 とらふす川柳会 辻 スミ 選
- 『 癖 』 三幸川柳教室 木本 朱夏 選
- 『 天 狗 』 番傘川柳本社 森中恵美子 選
- 『 播 く 』 川 柳 塔 社 西出 楓楽 選
- 『 大らか 』 川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良 選
- 会 費 2000円 (軽食・発表誌呈)
- 懇親宴 5000円 (事前申し込み)
- 投 句 先 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2
牛尾 緑良 宛
ハガキに2句 (1月より受付・3月20日必着)
懇親宴の出欠を明記して下さい。
- 主催 川柳塔わかやま吟社

献 壽

平成 17 年

川柳塔鹿野みか月

第24回“みか月”記念大会に際し、全国の皆様から温かいご支援を賜りました。こころからの感謝を申し上げます。

本年は第25回の節目記念の大会に当たる年でございます。何卒、旧に倍してのご支援をこころよりお待ちしております。

奥谷	太田	大角	大角	岩崎	乾	石尾	小倉	顧問	土橋	相談役	中原	副会長	森山	会長	
彩子	幸枝	正道	幸代	みさ江	喜与志	かつ乃	利男		螢		諷人		盛桜		
土橋	徳岡	津村	田村	谷口	田中	竹森	高原	児嶋	黒田	久野	国森	加藤	加藤	鹿兒島	垣尾
睦子	本丸	八重子	きみ子	百合子	きみえ	富久江	かおる	保子	くに子	野草	武子	永子	公子	節子	宣子
ほか	若林	吉田	吉田	横山	山根	山根	山口	山岡	福西	原田	西川	永原	中原	中原	土橋
会員	みどり	弘子	孔美子	房子	八重	立亥	実満	久枝	茶子	菊乃	和子	奈津子	みさ子	汲香	はるお
一同															

※事務局：〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279 中原 諷 人 方
電話 & FAX (0857) 84-2100

明けましておめでとうございます

平成十七年 元旦

会 柳 川 塚

河内天笑 石堂潤子 泉谷喜代子 稲川恵勇 岩崎公誠 榎本日の出 榎本舞夢 太田扶美代 大谷篤子 大橋鐘造 荻野像山 奥時雄 河内龍三 河盛月子 神原龍三

源田八千代 小寺竜之介 小西小雪 齋藤さくら 志田千代 高木世紀子 津守なぎさ 徳山みつこ 中井萌 中川楓 中崎深雪 中野健吾 中村忠敬 半井粹 西内朋月

西村りつえ 長谷川彰 長谷川春蘭 樋口冬虹 日野冬願 藤田泰子 升成好子 宮本かりん 村上玄也 八木侑子 八倉五子 矢倉五子 矢野梓 山本半錢 米澤半子 和田つづや 和田つづや

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西 口 いわゑ

北北川河亀門小小奥岩石井浅秋阿黒
野井島井岡谷倉熊田倉原上野元萬川
哲久諷庸哲た江みキ歳松房て萬紫
男美子児佑子子藍美子子子煙子る的香
富都坪田田田住坂酒小黒蔵久保木菊神
山倉井辺中中谷上井池田田村池原
ル求孝鹿正章石高利しげ能光千貴トミエ文
子芽一太坊子舟栄子お子子代子子エ
吉吉山山山松牧古藤長谷春春西長
武田本崎口下渕川村川城城口浜
良義君光比富奮メ春年武庫いわ美
絹恵子子久志喜子水女蘭代坊坊え籠

謹賀新年

川柳塔 唐津支部

坂本蜂朗	久保正剣	市丸晴翠	岩崎實	井上勝視
山口高明	樋口輝夫	仁部四郎	田口虹汀	宗水笑

明けましておめでとうございます

NHK川柳教室

河内天笑	井上信子	山田耕治
藤井正雄	北野哲男	莊司弘之
黒田能子	古今堂蕉子	池上清治
指宿千枝子	江見見清	久保田千代
鴨谷瑠美子	大崎侑子	角谷克治
志田千代	安達忠央	藤井則彦
野下之男	岩屋美明	西内朋月
井上松煙	福田満州	
緒方美津子	南原正和	

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々

会員 一同

事務局 〒680-0033 鳥取市二階町3-102

植田一京方

月例会 毎月第4日曜日 13:00～

JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

あけましておめでとうございます

翠洋会

高杉千歩 住谷石舟 清水絹子 佐々木満作 兄玉蛙 古今堂蕉子 奥田みっ子 尾形奏子 岡本久峰 太田桃花 大川舞夢 榎本日の出 榎本照子 井上真理子 居谷尚士 穴吹尚士 安土理恵 橘高薫風

寺井東雲 渡辺富子 渡部さと美 米田恭昌 山本希久子 矢野良一 安永春 藤井正雄 長谷川会美 西出楓楽 中村叡子 長浜美籠 中澤伽羅 天正千梢 坪井孝一 津村志華子 谷口義 田中正坊

あけましてお芽出度うございます

平成十七年 元旦

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 木村あきら

会員 角尾いさむ

副会長 成重 放任

辻上よしみ

会計 川崎ひかり

甚古 正雪

同人 工藤 吟笑

堤くに子

池内かおり

向山 治延

神保坊太郎

山崎 初恵

原 賢

松村 輝夫

伊勢八重子

赤沢 貞月

中塚 寿々女

あけましておめでとうございます

エイシス堺

講師 河内 天笑

泉谷喜代子

津守なぎさ

稲川 恵勇

富山ルイ子

榎本日の出

中井 萌

榎本 舞夢

中野 健吾

大久保伸子

原 さとし

大谷 篤子

樋口 冬虹

荻野 象山

升成 好

奥 時雄

宮本かりん

源田 八千代

村上 玄也

齋藤さくら

矢倉 五月

高木世紀子

矢野 梓

明けましておめでとうございます
ことしよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

塩谷八重子	澤田千春	佐々野紫泉	佐伯やえ	小村てい子	木村春枝	木村富美子	門脇晶子	鹿島蘭	大塚恵子	猪森スミエ	石中時子	池尾保子	青戸田鶴
八木千代	光井玲子	三好寿々子	政岡日枝子	二岡初枝	福井雪江	福代天雀	林瑞枝	野坂なみ	中野弘子	中井ゆき	田中亜弥	白根ふみ	

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町284

吉岡きみえ方

TEL 0853-22-1068

大阪川柳人クラブ

会長 磯野 いさむ
副会長 橘 高薫風
幹事長 坂本 晴美
総務 長 浜美籠
会計 川原 清宏
事務局 大堀 正明

あけましておめでとうございます

川柳おたまじゃくし

赤塚 楽天
助川 和美
土橋 房枝
堤 楢代
中岡 香代
林 力子
森元 ふみよ
雪本 珠子
山本 蛙城

〒596 0076 岸和田市野田町一―六一二

土橋方

TEL (0724) 381-3308

明けましておめでとうございます

エイシス東大阪

講師 河内 天笑

生嶋 ますみ 佐々木 満作
井尻 民 飛永 ふりこ
伊藤 博仁 中岡 妙
内田 甲子 中村 れんげ
岡本 訓也 西川 更紗
笠井 欣子 星野 きらり
神原 まさと 堀 富重
吉川 寿美 松井 秀夫
國見 蘭香 松井 敏子
熊代 菜月 山口 美津子
古手川 光 山本 宏至
坂上 高栄 米田 水昇
坂本 夏代 和田 つづや

謹 賀 新 年

川柳塔まつえ吟社

同 人 一 同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方
電話 0852-24-5450

明けましておめでとうございます

城北川柳会

会 員 一 同

例会 毎月第一土曜日 正午 神徳会館

新年のおよろこびを申し上げます

川柳若葉の会

吉	山	宮	宮	宮	古	中	永	辻	黒	橘
田	内	本	崎	崎	川	井	浜	川	田	高
あ	香	欣	シ	弘	喜	ア	加	慶	能	薫
ず	住	史	マ	直	美	キ	津	子	子	風
き		子	子		子		子			

明けておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹	齊藤 蒔
副主幹	小寺 花峯
相談役	福士 慕情
	工藤 甲吉
顧問	森中恵美子
	波多野五楽庵
理事	岩渕 黙人
	櫻庭 順風
	佐治千加子
	浅田 隆樹
	肥後和香子
監事	田中 叶
	相馬 銀波
	小枝ふさゑ
会計	相馬 一花

ほか同人一同

あけておめでとうございます

尼崎いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日 午後一時

会場 サンシビック尼崎 三階
(阪神尼崎駅西南五分)

明けておめでとうございます

川柳はびきの

会員一同

はびきの市民川柳会

おめでとうございます

川柳 さ さ や ま 一同

明けましておめでとうございます

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

会 長 山 本 三 郎

事務局 高 田 博 泉

「この会は、鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会諷刺の精神を現代に生かし……」(会則から)

あかつき川柳会

川端 一步 加山 勝久

森村 美花 前田 紀男

岩佐ダン吉 森松まつお

山本 柳昌

近藤 正 塩満 敏

江島谷 勝弘 田中 正坊

◆毎月奇数月に句会

05・1・7(金) 14時

国 労 大 阪 会 館

◆会報「あかつき」定期発行

〈事務所〉〒596-0824

岸和田市葛城町891-22

岩佐ダン吉 方

明けましておめでとうございます

川 柳 塔 打 吹

会長 牧野芳光・会員一同

事務局 〒682-0924 倉吉市河原町1879

高多博文方

電話 0858-22-6128

川柳塔おとしり

明けましておめでとうございます

確かな指導者とあたたかい仲間。

会員一同がんばっています。

平成17年 元旦

会長 小林由多香

事務局 〒680-0805 鳥取市相生町1-110 TEL. 0857-23-1170

明けましておめでとうございます

尼 崎 尾 浜 川 柳 会

田小荒松木三延村作松奥河軸小酢西岩林松坪山河長坂黒
他辺熊木村村輪野山山本村野丸西谷部城 下井田津浜本川
一鹿江宏里美玉カよ信秋五折勝ま亀イ義昭比孝耕正美晴紫
同太美郎江子枝子子子子月杭巳さ子ミ芳三志一治治籠美香

謹賀新年

かわはら川柳会

上田 俊路 漆原余吏子

谷口 泰良 漆原 登生

田中 好道 山田 雅子

谷口 寿子 渡辺 道子

国本 悦子 山尾かず恵

西田 静子

〒680-1241

鳥取市河原町長瀬六三六

上田 俊路 方

☎ 〇八五八―八五―二四六三

明けておめでとうございます

もくせい川柳会

橋	高	薰	風	安	藤	寿	美	子	阿	萬	的	岩	崎	玲	子	江	見	清	子	柏	屋	都	代	子	榎	谷	郁	子	唐	井	庸	佑	河	田	知	香	子	岸	川	紫	生	源	田	啓	蛙	兒	玉	千	津	子	進	藤	千	津	子	住	谷	石	坊	舟	田	中	正	坊	玉	置	重	人	玉	置	英	子	辻	川	慶	子	野	島	満	寿	巴	子	廣	島	則	彦	藤	井	則	彦	宮	田	緑	骨	安	永	門	夕	春	山	門	夕	春	ほ	か	会	員	一	同
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

毎月第3月曜日に定例会を開いております

酉 乃 歳

川柳藤井寺

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘

会 員 一 同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364

安田方 春木圭一郎

TEL 0857-24-2834

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

あけましておめでとうございます

サークル 檸檬

吉山山山前早西西西長鶴田久片奥大太浅橘
田本口本川村出浜田中保岡田塚田野高
あず義光希た棲哲楓いわ美遠正千智み節扶美房薫
き子久子もつ世夫楽ゑ籠野坊代恵子子子代子子風

あけましておめでとうございます

岩美川柳会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115

TEL 0857-72-0762

明けましておめでとうございます

京都塔の会

会 員 一 同

謹
賀
新
年

河内長野

長柳会

加 島 由 一
水 谷 正 子
村 上 直 樹
山 岡 富 美 子
石 堂 潤 子

前進

川柳塔のぞみ

代表 播本 充子

東京都八王子市散田町2-31-3

大阪川柳の会

句会 事務所 毎偶数月月上旬・サンケイビル本館3階 322号室
〒532-0025 大阪市新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

大阪川柳人クラブ	砂吉	安森	本濱	内坂	岡碓	足立	世話人	磯野	代表
大坂堀	木村	井口	田田	藤本	氷立				
正晴	啓雅	英美	智良	光和	良祥	淑		いさむ	
明美	三文	華羽	彦知	枝樹	三昭	子			

新年おめでとうございます

西宮ローズ川柳会

山本	山崎	春城	春城	西口	長浜	坪井	久保	木村	菊池	亀岡	小倉	奥田	岩倉	飯西	秋元	橘高
義子	君子	年代	武庫坊	いわゑ	美籠	孝一	まさお	貴代子	トミエ	哲子	藍	みつ子	キク子	ミサヲ	てる	薫風

謹 賀 新 年

東大阪市川柳同好会

会 長 片 岡 湖 風
 会 計 森 下 愛 論
 会 員 一 同

馬 増 江 藤 砂 井 篠 乾 八 山 中 神 村 吉 生 松 平
 場 田 波 本 田 尻 原 倉 本 島 原 上 村 嶋 葉 川
 道 正 一 八 美 知 宏 春 ま ミ 一 ま 君 幸
 宏 子 純 道 子 民 っ 代 子 至 江 さ と ツ 子 風 すすみ 江 枝
 飛 上 吉 小 松 井 辰 田 笠 星 寺 西 赤 本 脇 杉
 永 田 広 西 浦 上 巳 邊 井 野 川 川 木 田 本 晴
 ふ り こ 和 栄 博 愛 た 敏 浩 欣 き は 義 妙 た 俊 晴
 こ 子 子 子 子 子 男 三 子 ら り む 明 子 子 子 子 美

川柳クラブ

わたの花

明けておめでとうございます

謹んで新年のご祝詞を申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

月例会は第三木曜日正午 高槻現代劇場306号室

明けましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会 員 一 同

賀 正

岸和田川柳会

平成十七年 元旦

稲葉	前田	助川	林越	河元	森本	雪光	田中	坂口	小島	堂免	善野	加藤	山本	不破	寺田	岩佐	長谷川
ゆい	和美	春栄	美代子	ふみよ	珠子	正文	英時	笑雄	路司	盛之	蛙基	仁城	甚一	ダ	ン	吉	万
家路	三宅	柿本	藤井	中岡	林岡	土橋	永田	中島	宮地	仲谷	宮野	田口	原崎	島崎	原伊	井地	芳狸
野添	ゆり子	あい子	照子女	香代子	力子	房枝	寿守	一海	弘脩	みつ江	穰一	苑子	富志子	さよ子	東吉	村	

明けましておめでとうございます

川 柳 塔 な ら

飛永	安土	渡辺	居谷	清水	宮西	吉川	大内	坊農	米田	中原	宮口						
会	員	一	同	真	理	子	絹	弥	寿	朝	柳	恭	昌	比	呂	志	笛
子	ふ	り	こ	恵	子	子	子	生	美	子	弘	昌	志	生			

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

谷中宇北前多小水藤宮唐寺江米出高田二栗田藤椋前富藤井橘
 川山山山川田田牧野澤田住井見原口嶋辺二ノ倉田中原山田永村上高
 勇春禮ヤい契信黒長禄柳見雪セツ正久蛭桂祥昭敏ノ直薫
 一治代子エむ子男兎一骨実童清子子勝郎子柳子風子子女次風

定例会会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛭池公民館

謹 賀 新 年

久	織	中	西	渡	吉	小	中	大	池	藤
世	田	崎	村	辺	田	野	井	橋		岡
高	幸	深	夕	奈	亮	紅	ア	鐘	森	花
鷺	一	雪	子	保	幹	紫	キ	造	子	梢
				美		朗				

富田林 富柳会

明けましておめでとうございます

南大阪川柳会

会 員 一 同

明けましておめでとうございます

今年もよろしく申し上げます

平成十七年元旦

川 柳 塔 社

名譽主幹
主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
常 任 理 事

橋 高 薫 風
河 内 天 笑
板 尾 岳 人
奥 田 みつ子
小 島 蘭 幸
前 吹 たもつ
穴 吹 尚 士
大 内 朝 子
鴨 谷 瑠 美 子
木 本 朱 夏
長 浜 美 籠
坊 農 柳 弘
村 上 玄 也
山 本 義 子

仁 部 四 郎
西 出 楓 楽
石 森 利 昭
籠 島 恵 子
河 内 月 子
鶴 田 遠 野
西 内 朋 月
松 原 寿 子
山 本 希 久 子
米 田 恭 昌

川柳塔社常任理事会

柳界展望

○第27回神戸川柳大会は10月31日兵庫県民会館で開催された。当日の本社関係者秀句。

吃水線まではこらえてい
た涙 門谷たず子

○平成16年尼崎ザ川柳は、11月6日尼崎総合文化センターで、54名の参加を得て開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

飲み込んだ秘密ときどき
音をあげる 西口いわゑ

○第5回いたみ市民川柳大会は11月21日14名の参加で開催され、当日の本社関係者の秀句は次のとおり。

宇宙葬にしてねと母の遺
言書 出口セツ子

○第11回松戸川柳大会は11月28日150名参加を得て松戸市民劇場で開催された。当日の本社関係者天位は次のとおり。

まう 北野 哲男
計報欄ついで年齢を見てし

○第19回国民文化祭のラーメン川柳百選入選句

一期一会ラーメン祭にあ
る温み 出口セツ子

○平成16年城北川柳会年間秀句賞は石塚順三氏に決定

▽表 彰△

新同人紹介

井丸昌紀
— 薫風・みつ子・たもつ・朝子推薦

小谷集一
— 修・典子・はじめ・朝子推薦

のり

紀

丸

集

一

推薦

まる

昌

集

一

推薦

い

丸

昌

集

一

推薦

新

同

人

紹

介

中

原

諷

人

氏

同

人

鳥

取

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

鹿

野

市

は、

昭

和

63

年

鹿

野

市

は、

昭

和

63

軽井川柳など約40点を展示好評を博した。

○本号から新連載の「川柳塔の川柳讃歌」執筆の木津川計氏は、読売新聞に毎週水曜日夕刊に連載のエッセイで10月20日「遊び心も人生も川柳から学んだ」と題し、「川柳塔」を紹介された。代々の主幹は人格者ばかりで、麻生路郎「妥協を許さぬ峻厳」、中島生々庵「端正なる威厳」、西尾琴「和顔愛語の包容力」、橋高薫風「人格柄柄共の清廉」と評し、各主幹の遊び心のある句も紹介。これから川柳を杖とも恃み、寄りすがって生きていくと結ばれている。

▽御芳志拝受△

○月原宵明氏（元相談役・今治市）御遺族から賛助費として金一封を拝受。

▼計報▲

□中澤伽羅さん（同人・大阪市）は、11月13日逝去。葬儀は14日親族のみで行われた。享年73歳（追悼記事は109頁に掲載）

□瀧井 勝氏（同人・東かがわ市）は、癌のため12月6日逝去、8日の葬儀には多数の柳友がお見送りした。享年75歳。（追悼記事次号）

▽訂正△

12月号P98上段右ワケ内、十一月句→十一月句会 P

116中段26行目、大阪知事→大阪府知事

□身近な「怒り」の川柳コンクール 1月31日締切。投句方法は実行委員会指定の絵馬（400円）で一枚一句。（何枚でも可）。審査は木津川計氏他 賞金賞品多数。

問い合わせ〒678-0239赤穂市加里屋68-9 赤穂商工会議所 ☎079-114312727

常任理事会 12月7日（火）9時から 出席者18名 ①各地川柳会代表者会について（1月29日開催予定）、案内状ほか細部検討 ②パンフ「川柳」製作の話し合い ③

第56回大阪川柳大会の反省（今後はマニュアルを作る等） ④高野山合祀祭の報告 ⑤同人2名承認 ⑥その他（80周年・まつりのアルバム回覧）

次回常任理事会 11月11日（火）9時30分、アウイーナ大阪

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 見合い・無益・芽・申込み	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
倉吉 川柳会	15日(土)午後1時から 今・晴れやか・着る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 ねやがわ	16日(日) 正午締切り 始め・夢・青空	寝屋川市民会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	16日(日) 正午から 再会(新年句会します)	和楽心 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 霜・毛皮・希望	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 変化・マナー・どうせ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
尼崎 尾浜 川柳会	18日(火)午後1時から 明かり・翔ぶ・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺龍太
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木) 正午から 目立つ・真夜中・かめへん ステップ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 喜び・椅子・ネクタイ・初	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳 民会	23日(日)午後1時から 愛情・スキー・能率・「油断」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	23日(日)午後1時から まっしぐら・メール・天下	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
南大阪 川柳会	26日(水)午後6時から まっすぐ・古い・うなる・床	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 命・用心・伏せる・のんびり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
京都 塔の会	31日(月)午後1時から 顔・うぬぼれ・正直	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

1 月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	6日(木)午後1時から 祝う・芯・夜明け	奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 開ける・椀・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城北 川柳会	8日(土)午後1時締切り 盛る・前途・ハッピー・自由吟	神徳会館 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩5分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
堺川柳会	8日(土)午後1時から 夢(共選)・たしか き・いろ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
富柳会	8日(土)午後1時から 招く・もうすぐ・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 打吹	8日(土)午後1時から 理想・皿・光る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 未来・鳥・招く・似る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川柳塔 みちのく	8日(土)午後4時から 初・ほんのり・寒い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	9日(日) 皿・折る(新年会を行います)	お問い合わせ先 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 酒・初日の出・チップ 一人称(私、僕など)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔 みぞくち	10日(月)午前10時半から 鶏(酉)・正月一切・雑詠	神奈備会館 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 口火・膨れる・夢・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 鶏・守る・いそいそ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳塔 唐津	11日(火)午後1時半から 準備・叶う・ポイント	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑

編集後記

☆明けましておめでとうございませう。

☆平成17(05)年は、乙酉(きのとり)年。乙は陰中での忍耐持久が実り、草木の芽が地上の光の中に出た形を表わしているという。そんな環境で、誰もが鳥のように羽撃ける年であつて欲しい。

☆地球温暖化防止に向けて、各国の温暖化ガスの削減目標などを定めた京都議定書が、ロシアの批准により今年2月に発効する。
☆地球温暖化は、約20年前の産業革命に始まったが、ここに至つて世界中が本腰を入れて取組まないと、子孫に青い地球を残せない事態に陥っている。
☆既に地球上の随所で影響は進み、太平洋の島国ツバ

ルでは、水位上昇により近い将来海中に没する。そのため国民全員(ニュージールランドへ移住するという。昨年旅行したスイスでは、氷河が大きく後退しているのを目のあたりにした。

☆日本として例外ではなく、昨年夏の猛暑、台風による集中豪雨は熱帯のスコール状のもので、日本が熱帯化したからだという説もある。☆しかし、温暖化ガスの排出量が世界で最も多いアメリカ、中国が京都議定書に参加していない。従つて、たとえ発効したところでその効果は疑わしい。また、削減目標は大変厳しく、達成するとすると国際競争力は失われ、産業の空洞化が進み、社会が荒むという。

☆国内憂外患も地球規模となつた昨今であるが、人間の叡知で解決して行けることを信じて。

(ふ)

初歩教室に思う

ひとこと

月末になると本誌「川柳塔」が届く。まず巻頭言を読み編集後記を読む。そして「初歩教室」の前書きを読む。三段組みの上段一ぱいに、時には二段目に及ぶ川柳格言は三宅保州氏の深い川柳造詣や長い柳歴の含蓄を感じる。

私が川柳を始めた頃、川柳の本を何冊も買い込んで読んだ、その

エキス部分をまとめ、改めて作句の心得として毎月注入して貰い、新鮮な気持ちでうれしい勉強になっている。多分本誌の多くの読者もそう感じていられるだろう。

そして頁を返し川柳塔欄の選句から読み始め、句意を味わいつつ毎晩眠り葉に読み続け、読み終わつて次が欲しいと思う頃、次号が届く、本誌は私の愛読書。

(小川 注湖)

○二〇〇五新しい年が明けました。昨年は何とも言いようのない多事多難にふり回された。なかに唯一のご慶事は「紀宮」の婚約で年末の話題になったとは申せ末の話題になったとは申せ水害、震災の傷跡は拭い切れておりません。被災されました皆々様心からお見舞い申し上げます。

○さて、年頭は大いに笑おうと落語のチャンネルに合わせた。奇席へ向くと断

家さんの高座は多く、松の内は中継もあるが日頃は少ない。残念なり。

○断家さんのなかには人間国宝と言われる方、名人もおられる。私、愚考しますに川柳と落語はひきあうものがあると思う。扇子と手ぬぐいだけで時には身振り手振りの入る方もありますが、一人で公家、武家、役人、商家、長屋等の社会。また

葉遣い。仕来り等を扇子手ぬぐい一本で演じる。勿論古典から現代まで脚本はあるが演じるのは断家さんの芸であると思う次第。

○さて、川柳は、鉛筆一本で、天地、前後左右その奥にあるものを引き出し、十七文字に表現する。その知識養成。嗚呼 勉強。

○今年は何卒良い年でありますよう祈念。

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（3月号）

地名

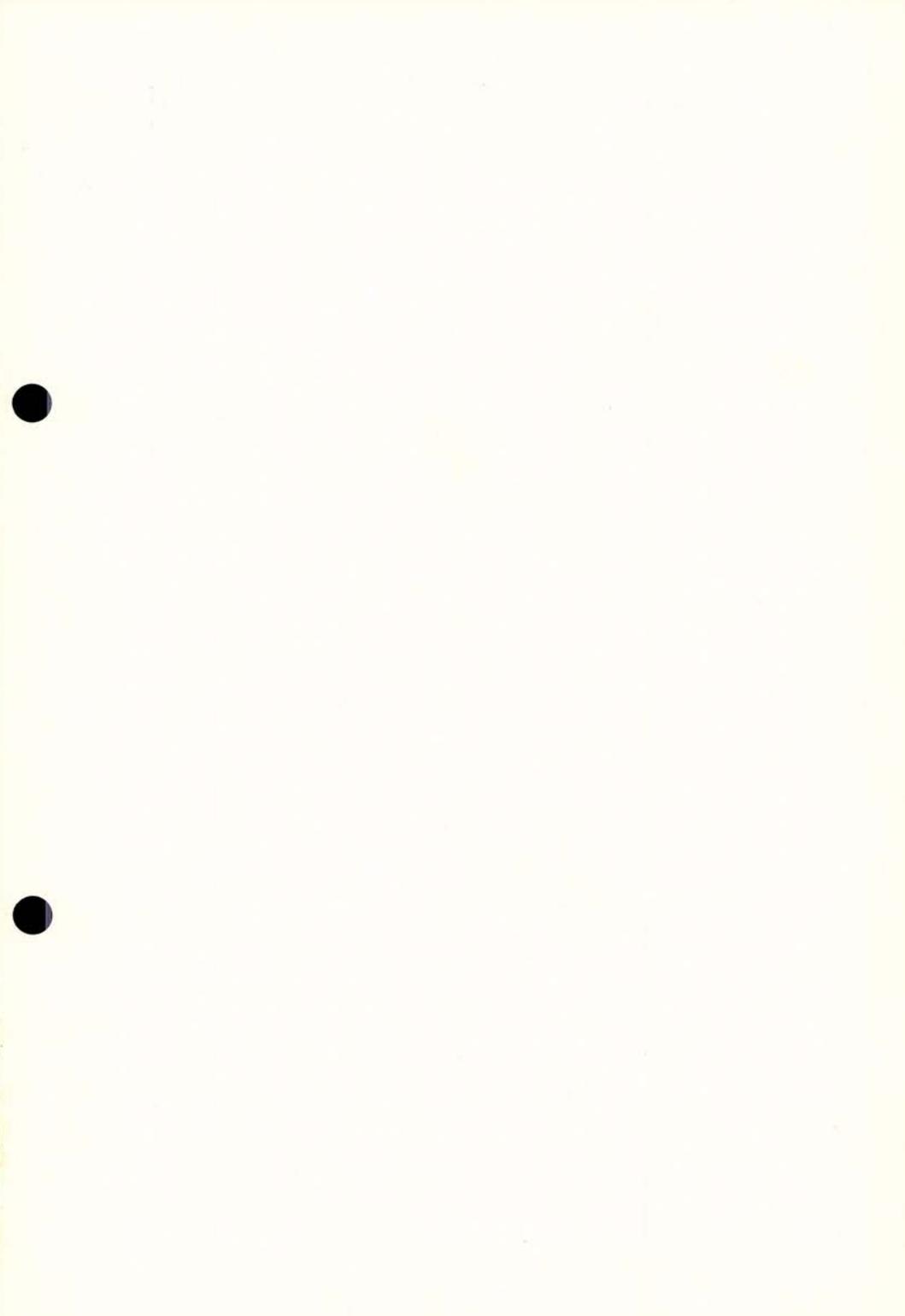
市 県

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室 「合併」(3句) 三宅保州担当	課題吟 (3句) 「ボイント」 西原 子選	「葉う」 永田 俊子選	「準備」 藤井 正雄選	「草香の花」(3句) 政岡 日枝子選	「愛染帖」(3句) 波多野 五葉庵選	「水煙抄」(8句) 奥田 みつ子選	「川柳塔」(8句) 河内 天笑選	3月号発表(1月15日締切)
----------------------------	--------------------------------	----------------	----------------	-----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	----------------

4月号	課題吟 初歩教室	「壺」「スーツ」 「軽い」 「立派」
-----	-------------	--------------------------

第23年度 夜市川柳募集

第8回「感じる」 田頭良子選
ハガキに3句 1月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円(送料92円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇〇五年(平成十七年)一月一日発行
編集兼 発行人 河内 権治
印刷所 美研アート
大阪市阿倍野区三明町二一〇一四
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話(06)262元一六九一四番
振替〇〇九八〇一五一一三三三八番

本社1月句会

会費 1000円	席題 1題 当日発表(各題2句以内)	兼題 「ふところ」 「魔法」 「のろける」 「信じる」 「祝辞」	おはなし 橘 高 薫 風	とき 1月11日(火) 午後1時開場・2時締切り — 開催時間、締切り時間にご注意下さい。 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
投句料 500円	河内 天笑選	西出 楓選	西内 朋月選	籠島 恵子選

本社2月句会 7日(月) 午後1時から

兼題 「芽ばえ」「喋る」「それから」
「道」「食べる」

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限りません。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

全日本川柳誌上大会のご案内 (柳多留第10集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(柳多留第10集)を開催します。日川協年第2次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞご参加ください。

課題と選者 (各題2句・連記)

「ヨーロッパ」 辻 晩穂 撫尾 清明 共選
 「年 金」 山倉 洋子 土田 欣之 共選
 「力」 照沼 智 角本 華峰 共選
 「離れる」 島田 駱舟 森 東馬 共選
 「ベ ッ ト」 齊藤由起子 中 原 颯人 共選

第二次選者

會田規世兄 磯野いさむ 大木 俊秀
 佐藤 岳俊 吉岡 龍城

参加費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第10集代)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

(財)日本青少年育成協会会長賞・(財)全日本川柳協会会長賞
 全日本川柳誌上大会賞・秀作賞 (予定)

締 切 平成17年1月20日(木)〈当日消印有効〉

発表表彰 第29回全日本川柳広島大会 (平成17年6月)

参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に

記入し、参加費2000円(振替又は小為替)とともに左記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-102

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

診療時間

・放射線科・ホスピス

月～金 8:30～16:00

・デイサービスセンター

土 8:30～11:00

JR 桃谷駅徒歩3分
<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861 (代)